

- (ロ) 胎兒の運動、即ち胎動によりて起る雑音
- (ハ) 臍帶雑音
- (ニ) 妊婦より發する音としては
- (イ) 子宮雑音
- (ロ) 大動脈音
- (ハ) 腸管雑音

等なり、今左にこれ等諸音の聴診上の特徴及び要點を説明すべし。

圖六十二百第
器診聽狀桿の狀形るな々種



- (一) 兒心音
 - (イ) 聴ゆる時期 は既に妊娠第三ヶ月の終りより聴き得ることありと云ふも、殆んど常に聴取し得るは妊娠第五ヶ月の終りなり。
 - (ロ) 最も明瞭に聴ゆる部位 は兒體殊に其心臟部が子宮壁に最も近く在る處にして
 - (甲) 縦位に於ては一、正規の胎

勢を取り兒體が前屈する場合(これを屈位と云ふ、後に明かなり)には兒背の向ふ母體側にて其臍線線とは臍窩と腸骨前上棘とを結ぶ直線を云ふ)の中點の附近にして、二、これに反し兒體が後屈する場合(これを反屈位と云ふ、後に明かなり)には反對に兒の胸部又は腹部の向ふ母體側 (乙) 横位に於ては、兒頭の存在する母體側にして第一分類の場合には明瞭、第二分類の場合には不明瞭なり。

(ハ) 其性質 は重複性にしてトントン…トントン…と聴ゆ。
 (ニ) 其數 は一分間に百二十乃至百四十なり、但し實地に於ては各五秒宛三回の數を以てこれを云ひ表はすものなり、例ば初めの五秒間の數、十、次の五秒間に十一、次の五秒間に十一なる時は其數十、十一、十一なりと云ふが如し。

- (ホ) 其強さ は胎動の際に強く、子宮收縮する際に弱し。
- (二) 胎動音
 - (イ) 聴き得る時期及び場合 時期は妊娠第五ヶ月の終り以後にして胎兒の運動せる場合にのみ限る。
 - (ロ) 其性質 は低くして短く衝突するが如くにして、不定期性、而も多くは同時に胎動其者を聴診器より傳達認識し得。
- (三) 臍帶雑音
 - (イ) 聴ゆる時期 は兒心音の場合と同一にして、

- (ロ) 聴ゆる場合 は臍帯に壓迫捻轉纏絡等ありて臍帯血行に障礙ある時なり従うてこれを聴く場合は比較的稀れなり。
- (ハ) 聴ゆる部位 は一定せざれども多くは兒心音の最も明瞭に聴ゆる部の周圍なり。
- (ニ) 其性質 は兒心音と同調に重複性にして只低く濁濁しザアザア……ザアザア……と云ふが如き響なり。
- (四) 子宮雑音 は怒張擴大せる子宮動脈管内を多量の血液が循環するため發する雜音にして
- (イ) 聴ゆる時期 は妊娠第三ヶ月の終りより以後全妊娠時及び産褥第一乃至第二日に到る期間にして
- (ロ) 聴ゆる部位 は子宮の兩側壁に著明
- (ハ) 其性質 は妊婦の脈搏と全く同調にしてヒュウ……ヒュウ……と聴ゆ。
- (五) 大動脈音 は稀に聴くものにして低く妊婦の脈搏と全く同調なり。
- (六) 腸管雜音 は腸管内の有形物と瓦斯とが腸の蠕動運動によりて動くために生ずる雜音にして雷鳴狀又は泡沫の消ゆるが如き響を呈し下腹の兩側に於て不定期性に聴くことを得。

(四) 妊婦の測定

妊婦に於て特に測定を要するは次に述ぶる骨盤測定の外に、

- 一 腹部の最大周圍 本邦婦人は妊娠第十ヶ月に於て大凡八十五厘米なり。
- 二 恥骨縫合上縁より臍窩までの距離 この距離は人により又妊娠の月数により非常の差あり平均數を得難し。
- 三 恥骨縫合上縁より子宮底に至る距離 この距離は妊娠月数により殆んど一定し妊娠月數の約三倍に相當する種なり例ば妊娠五ヶ月に於ては約十五厘米八ヶ月に於ては約二十四厘米なり。
- 四 恥骨縫合上縁より胸骨の剣狀突起に到る距離 等なり。

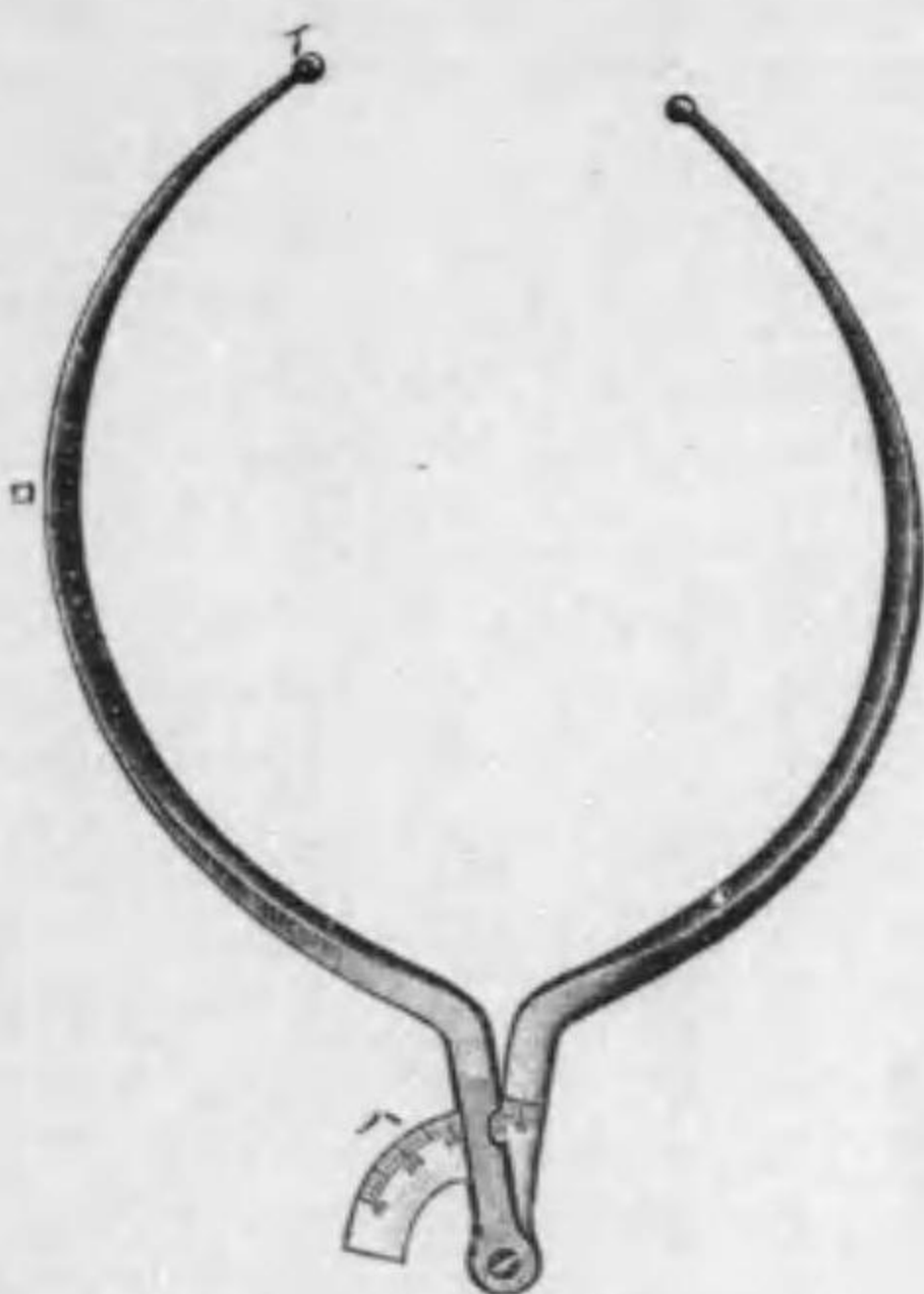
骨盤測定法

本法には内計測法及び外計測法の二法あり就中内計測法は種々なる困難あるのみならず以下述ぶる内診によるものなるを以て種々なる危険あり而も以下述ぶる何等危険なき外計測法が精確ならんか殆んど其必要を認めざるを以て助産婦は特に外計測法の熟達に努むべし。

骨盤外計測法

(一) 圖七十二百第

圖の計盤骨氏一キスイラフ



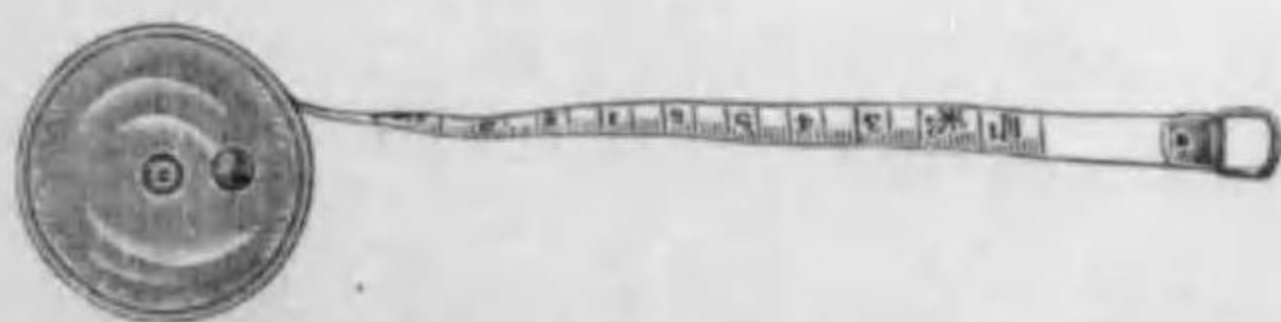
(二) 圖七十二百第

圖の計盤骨氏ンチルマ



圖八十二百第

圖の(尺卷)「スーマドンバ」

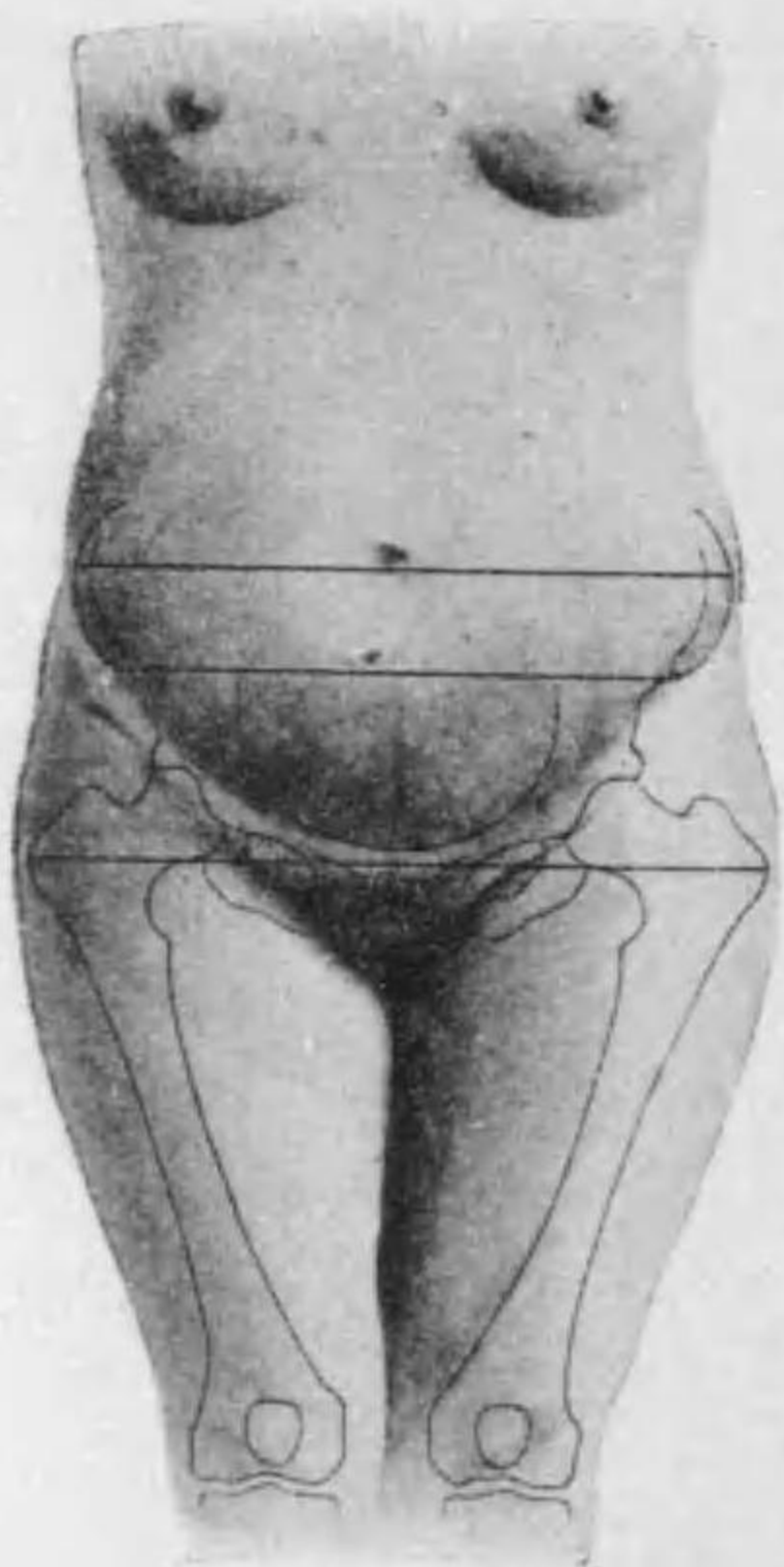


本法は骨盤計(第百二十七圖)を見と及び巻尺(第百二十八圖)を見とを以て以下述ぶる骨盤骨の一定點間の距離及び周囲の長さを測定して以て骨盤腔の大き及び形状を推知して以

棘間

棘間

圖九十二百第



イ、腸骨前上棘間距離
ロ、腸骨棘間距離
ハ、大转子間距離

ロイ

ハ

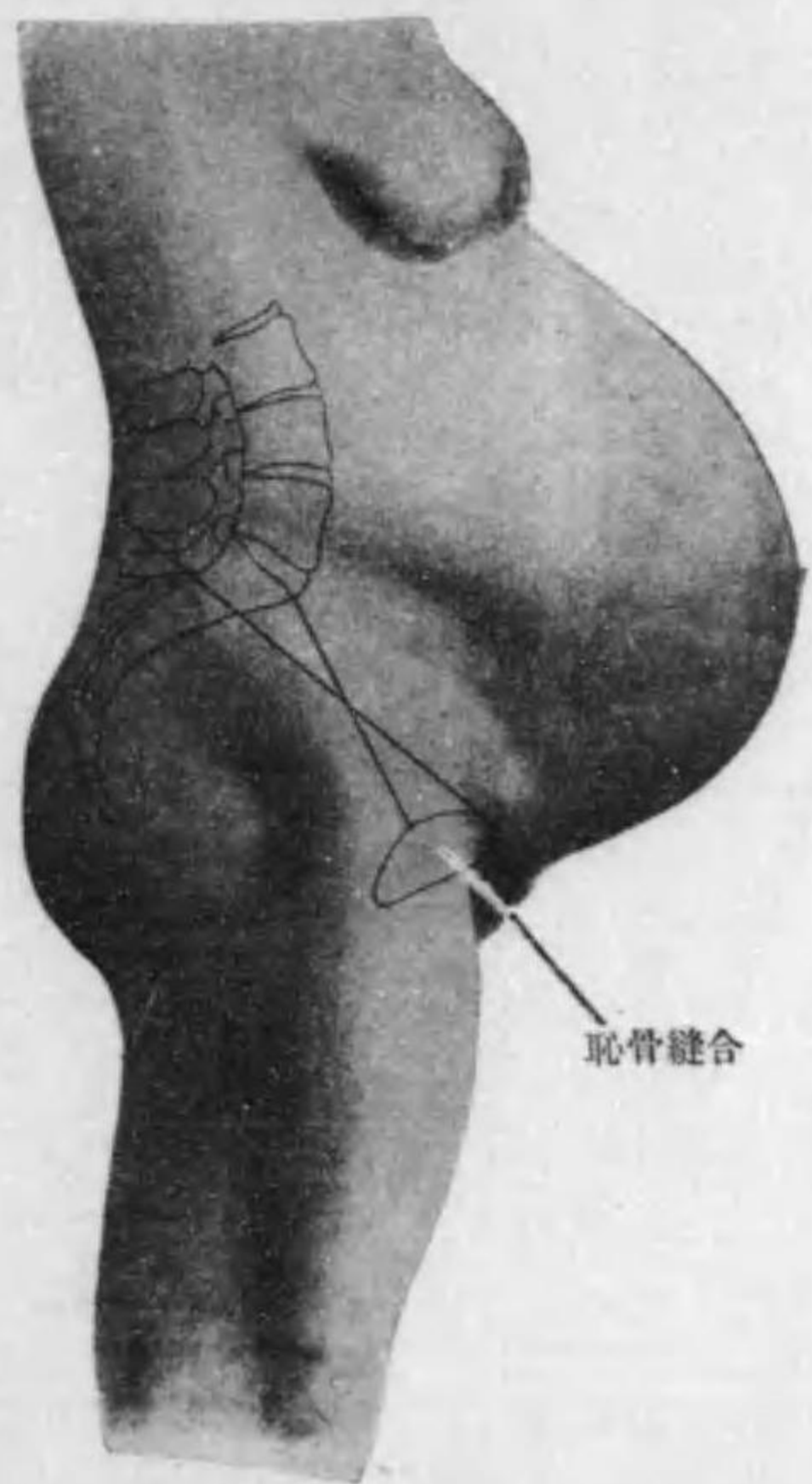
て分娩の難易を判定する助となすものなり。本法により測定すべき骨盤骨の一定點間距離は次の如し(こゝは正規分娩編骨部産道の部、即ち第一九九頁より第二〇九頁までの間を熟讀せる後に見られよ)。
一、左右の腸骨前上棘間距離、これを棘間距離又は單に棘間と云ふ(第百二十九圖のイを見よ)これ左右の腸骨前上棘間の最大距離にして、其正規的の長さは平均約二十三種なり、腸骨前上棘を觸知するには、鼠蹊窩を外上方に向うて探る時著明なる硬き突起として觸る。

二、腸骨棘間距離、これを棘間距離又は單に棘間と云ふ(第百二十九圖のロを見よ)。

これ左右腸骨棘間の最大距離を測定するにて、其正規的長さは平均約二十六種なり、この測定點は上記腸骨前上棘より更に兩側にて外後方に探りて硬き棘外縁にて左右最も隔りたる所なり。

圖十三百第

示示を係關のと線合結真と線合結外



一七四
三、大轉子間距離又は單
に大轉子と云ふ(第百
二十九圖のハを見よ)

これ左右の大腿骨大轉
子間の距離を云ひ、其
正規的の長さは平均約
二十八糎なり、大轉子
を求むるには大腿の外
側面を腸骨節より下方

に向つて探れば硬き突起として觸知することを得、尙ほこの距離を測定する時特に
注意すべきは兩下肢を充分伸展せしむるは勿論兩大腿を全く相密接せしめたる状態
に於てすることなり。

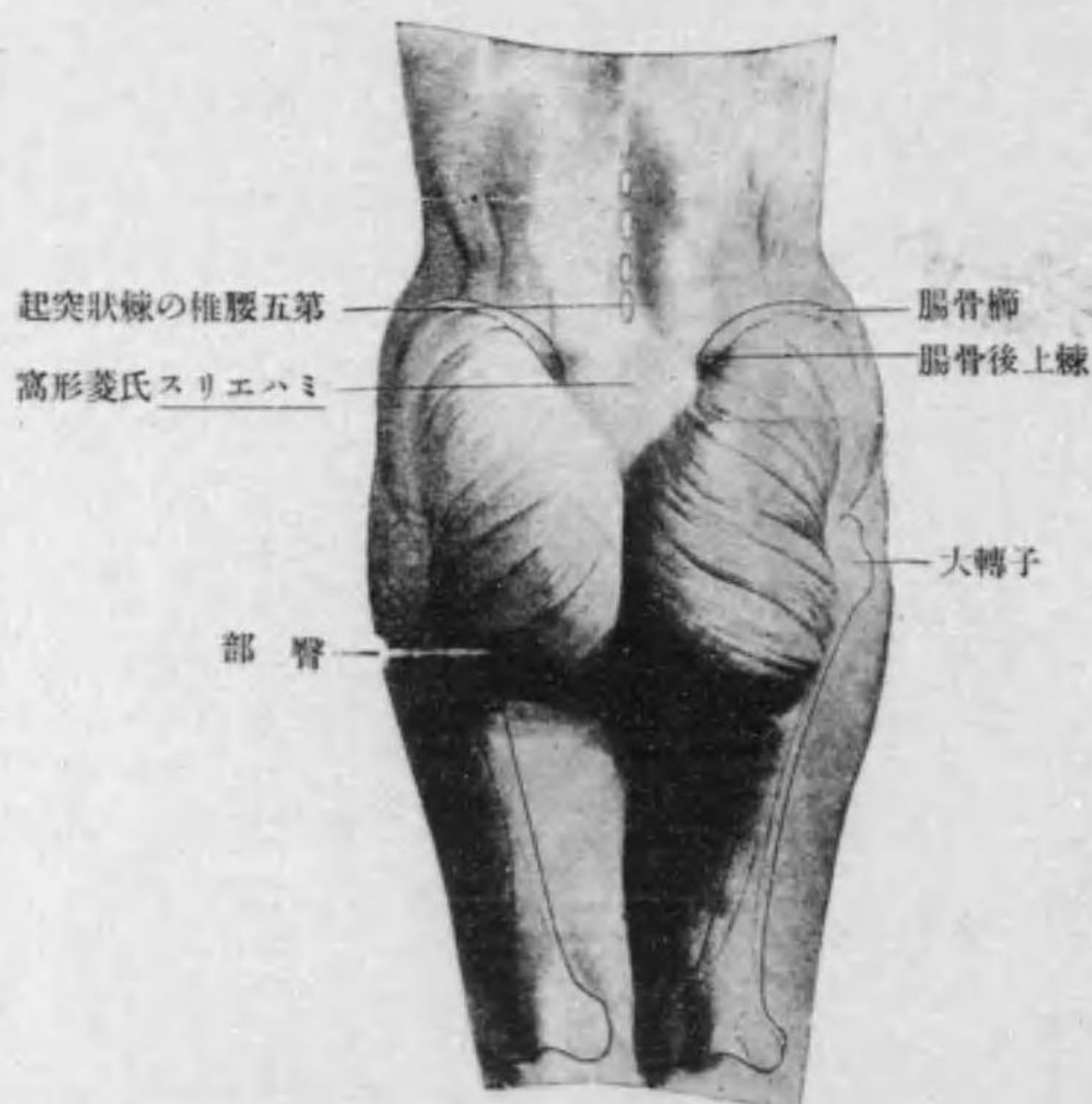
四、外結合線又は外直徑線或はボーテロツク氏徑(第百三十三圖一及び百三十二圖を見よ)

これは第五腰椎の棘状突起の下端より恥骨縫合の上縁に到る最短距離を云ひ、其正
規的の長さは平均約十九糎なり。

第五腰椎の棘状突起を知る法(第百三十一圖を見よ)
左右臀部間の上方にあるミハエリス氏菱形の左右の角の附近に左右の腸骨後上棘を

圖一十三百第

部腰るた見りよ方後



觸れ、この間を結合せる線
の中央を探る時はここに
一個の棘状突起を觸る、更
に其上方約二乃至三糎の
所を探る時はミハエリス
氏菱形の上角の附近に於
て前者よりもより強く突
隆せる突起を觸ることを
得、これ即ち求むる第五腰
椎の棘状突起の先端なり。

五、外斜徑線

これ一側の腸骨後上棘と
他側の腸骨前上棘との間
の距離を云ひ、次の二つを

區別し、其正規的長さは平均約二十糎なり。
(一)第一又は右外斜徑線

は右側後上棘と左側前上棘との間の距離を云ひ、

骨盤周囲

(二) 第二又は左外斜径線
 は左側後上棘と右側前上棘との間の距離を云ふ。
 六骨盤周囲即ち腰圍

これ前方は恥骨縫合上縁より側方は腸骨楯を経て後方は第五腰椎の棘状突起の先端に到る周徑を云ひ、其正規的長さは平均約七十五乃至八十種なり。

骨盤外計測
實施法

一、總べての徑線の計測数が該當徑線の計測徑線の上記正規的長さなれば其骨盤の大き及び形狀の正規なること、之れに反し、(イ)皆孰れも長き時は骨盤腔の過廣なること、(ロ)孰れも短き時は骨盤腔の狭窄即ち狹窄骨盤なること。

二、棘間及び楯間距離の過短なるは骨盤入口部の横徑線の過短なること。

三、大轉子間距離の短縮は骨盤腔殊に潤部に於ける横徑線の短縮すること。

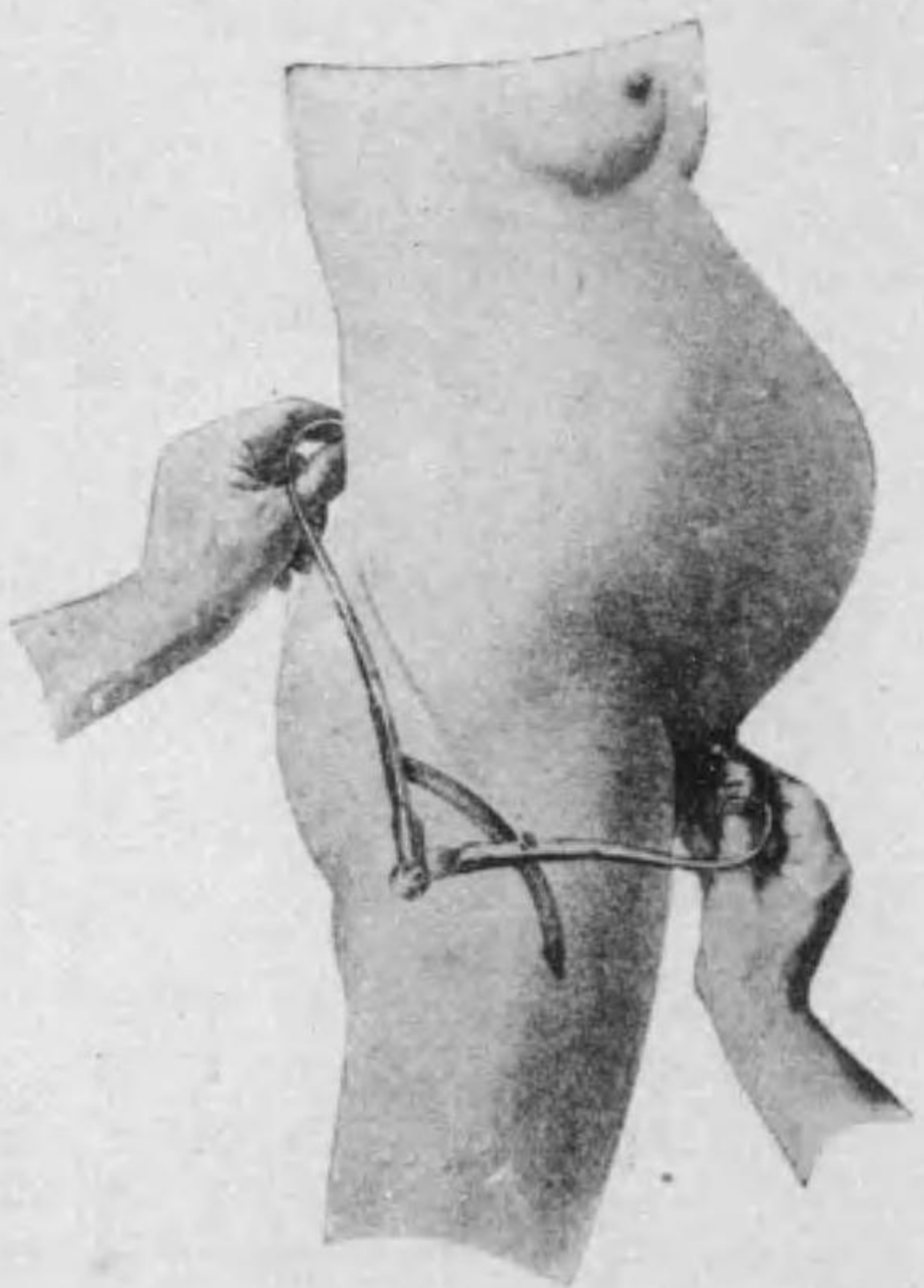
四、外結合線の短縮は骨盤入口の縦徑線即ち真結合線の短縮すること。

骨盤外計測實施法(第百三十二圖を見よ)。

一、妊婦の位置は直立位を最良とす、從うて其他の位置にて計測する場合にはなるべく直立位に近き姿勢を取らしむべし。

二、術者は其側方又は背側に坐を占め骨盤計の兩先端(第百二十七圖のイ)を各拇指及び示指頭間に挟み其脚部(第百二十七圖のロ)を上記兩指間に保持し、中指頭を以て計測せんとす。

圖二十三第
き付手の法定測線合結外



する一定點を觸定してここに骨盤計の兩先端を固定し其間の距離は柄部に附着する標尺(第百二十七圖のロ)によりて知る、而もこの數は一回に止めずして數回の平均數を求むるを可とす。

骨盤内計測法

對角結合線
測定實施法

本法は操作困難なるのみならず危険を伴ふこと既に述べたるが如し實地上本法の應用さるるは其骨盤入口に於ける真結合線の長さを測定する場合なり、そのために種々なる測定器應用さるるも、ここには手指を以て對角結合線を測り其長さより一八乃至二〇種を減じて以て真結合線を推知する方法を述べよ。

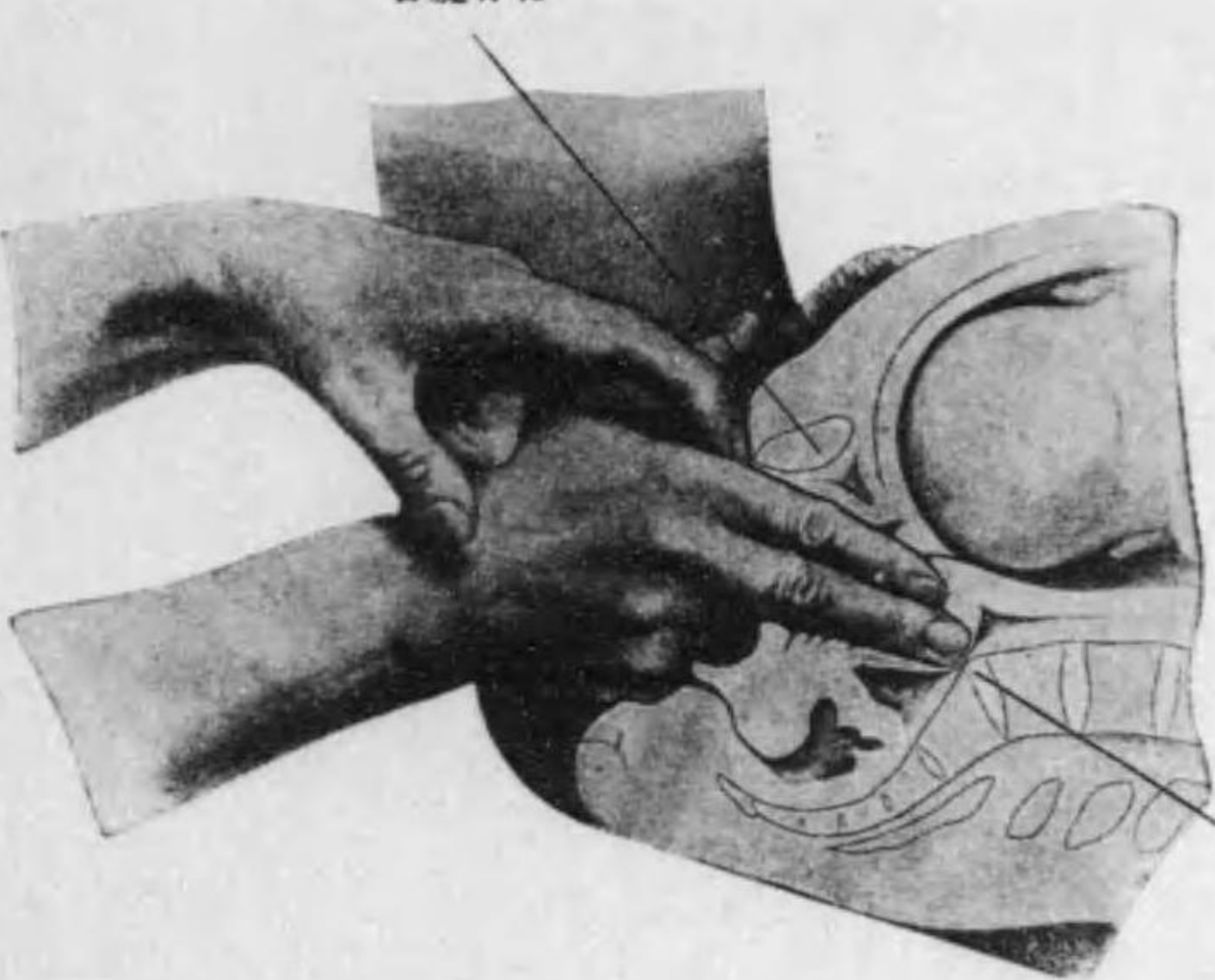
用指的對角結合線測定實施法(第百三十三圖を見よ)。

一、豫め膀胱及び直腸を空虚にし、

二、患者は臀背位とし腰下になるべく高き枕及び便器を入れ、下肢を股及び膝關節にて

圖三十三百第

き付手の法定測線合結角對的指用
合縫骨取



ふを抜去し記標せる部位と中指頭との間の距離を測定すればこれ即ち對角結合線の正規的長さは大凡一〇・五乃至一一・二種なり。

強く屈曲し且つ股間を充分に開かじめ、
三、外陰部及び其附近を充分に洗滌消毒
し其法後に詳なり

四、術者は其股間又は右側に坐し豫め充分に消毒せる左手其法後に詳なり)の指及び示指を以て陰唇を充分に哆開し右手の示及び中指を深く腔内に挿入し環小兩指はこれを手掌内に屈して以て會陰を下後方に押し以て中指頭を薦骨岬に達せしめ同時に示指の拇指側を恥骨弓の下縁に密接せしめ其部を他手即ち左手の示指頭を以て記標しつつ静かに内指(こは腔又は子宮腔内に挿入せる指を云

(乙) 妊婦内診法

内診の危険

内診の危険 吾人が以下述ぶる實法によりて内診即ち腔腔乃至子宮腔内診察を行ふ時は次の如き危険あり。

- 一、妊娠時鬆軟となれる腔壁又は子宮壁を損傷すること。
 - 二、分娩時に於ては卵胞後に詳かなり又は胎兒の先進部を損傷すること。
 - 三、消毒は如何に嚴重にするも絶對的ならず従うて腔腔乃至子宮腔内に病原菌を送入したために其傳染を來す恐れあること。
 - 四、妊婦に不快を感せしむること。
- 従うて内診を行ふ場合は次の二つの場合に限る。
- 一、上記外診法のみにては不十分なる時。
 - 二、其他止むを止ざる場合。

内診を要する場合

内診時の注意

- 一、總ての消毒はこれを嚴重にして以て病原菌の感染を豫防すること。
- 二、内診實施法を固く守り以て順序正しく且つ輕妙に行ひ決して粗暴なることなく殊に分娩時に陣痛發作(後に詳かなり)の來れる場合には其止むを待ちて行ふこと。
- 三、なるべく短時間に行ひ而も完全なる診査を行ふこと。

内診時診定すべき主要点

而して内診時診定すべき主要点は如次

- 一、外陰部の性状、即ち(イ)外陰部の病的變化、例は癰疽、糜爛、潰瘍、靜脈瘤、浮腫、新生物畸形等の存否、(ロ)膣入口、會陰等の伸展性の良否等。
- 二、膣の性状、即ち(イ)膣壁に病的變化の存否、(ロ)膣壁の鬆軟、伸展の程度、(ハ)膣腔の廣さ若し狹窄せんか其部位及び程度。
- 三、子宮腔部、頸管部及び下子宮部の性状、即ち
 - (イ)子宮腔部に於ては、1. 其存否、其存する場合には其大きさ及び形状、2. 病的變化、例は潰瘍、糜爛、癰疽、畸形等の有無及び程度、3. 鬆軟の度、4. 子宮口の開否、其開ける場合には其程度、其形、5. 前後兩唇の性状、即ち其厚さ、緊張せるや否や等。
 - (ロ)子宮頸管部に於ては、其開大の度、其空虚なるか又は何物か(例は臍帶、小部分、卵胞に填塞せらるるや否や、若し卵胞の存する場合には其大きさ、緊張の度、壁の厚さ等)。
 - (ハ)下子宮部に於ては、其緊張の度、鬆軟の度後に述ぶる前置胎盤の場合には特にこの部が著しく鬆軟となる。
- 四、胎兒先進部の状態及び其骨盤腔に對する關係、即ち(イ)先進部の何なるや、(ロ)其移動するや又は既に骨盤腔内に進入固定し移動せざるや、(ハ)其大きさ、(ニ)其他に何等かの異常の存否、更に進んでは、(ホ)其先進部の骨盤腔に對する關係を檢せざるべからず、この點に關しては分娩時内診の條下に述べべし。

内診實施法

五、骨盤腔の形状及び大きさの關係、この關係は寧ろ其重きを外計測法に置くべく内診によりては外形に變化なくして内腔の異常、例は薦骨岬の病的突隆、骨盤内壁に於ける腫瘤等を觸知して以て其狹窄又は畸形を診定する助となすのみ。

六、分泌物の性状、即ち其分量、其色、其臭氣等。

内診實施法 は次の順序にす。

- 一、患者の位置、は背位となし、腰下に高さ枕及び便器を入れ、下肢を股及び膝關節にて強く屈曲せしめ、且つ股間を充分に開かしめたる後、
- 二、外陰部及び其附近の消毒、は單純なる石鹼水又は石鹼水或は三%の割合に石炭酸を加へたる石鹼水と消毒せる脱脂綿又は綿紗を以て充分に刷洗し、稀釋せる消毒液、例は二乃至三%の石炭酸水、リゾール又は、リゾホルム水、〇二%の昇汞水等の多量を以て石鹼を充分に洗ひ去りたる後、
- 三、術者は股間又は右側に坐を占め、豫め充分に消毒せる左手の拇及び示指を以て陰唇を充分に左右に開きたる後、他手即ち右手の示及び中指を陰唇及び其附近に觸れざる様即ち其部分にある細菌を指に付けざる様注意して靜かに後腔壁に沿ひて骨盤誘導線(後に詳かなり)の方向を考へつつ深く腔内に挿入し、特に組織の損傷を來さざる様にして上記諸點を診査せる後、
- 四、内指を靜かに抜き出し、分泌物の性状を檢したる後、外陰部を清潔に保ち感染の起ら

ざる様に注意す。

第二節 妊娠徴候

以下述ぶる妊娠徴候は吾人が妊娠なりや否やを診定するに大切なる徴候にして、上記の妊娠時に起る母體の變化及び胎兒の存在により起る徴候を總稱するものなり。而してこの徴候中には、一、必ずしも妊娠に限らず男子にさへ來り得る不確實なるもの、二、男子には來り得ざるが必ずしも妊娠にのみ限らざる前者より稍確實なるもの、三、兒心音、胎動の如き胎兒の存在によりて初めて認め得る極めて確實なるもの等を含む従うて妊娠徴候は其診斷上の價値に従うてこれを次の三種即ち一、不確實徴、二、半確實徴又は疑徴、三、確實に區別することを得、以下これを説明すべし。

第一項 妊娠不確實徴

生殖器以外に來る變化にて妊娠にあらざるも起るのみならず、男子にも來り得る徴候にして、唯妊婦に於て比較的多く且つ強く現はるるものにて主として消化器系統、神經系統及び皮膚に起る徴候なり、即ち

- 一、早朝空腹時に於ける惡心吐逆、唾液分泌増加、便秘。
- 二、嗜好の變化殊に酸味の嗜好、齒痛、頭痛、精神狀態の變化。

三、皮膚着色、妊娠線、浮腫、靜脈の怒張乃至腫瘤形成等これに屬す。

第二項 妊娠半確實徴(又は疑徴)

婦人生殖器に來る變化にして前者に比し診斷上有力なるも非妊婦にも亦見らるることあり、即ち

- 一、他に疾病又は畸形等なくして今迄存在せる月經の閉止すること。
- 二、子宮鬆軟となり、且つ閉經期間に相當して増大すること、ピスカツラク氏徴候、ヘガー氏第一及び第二徴候。
- 三、腔入口及び會陰等が鬆軟となり、且つ特有なる着色を呈すること。
- 四、子宮雜音の著明なること。
- 五、乳房の變化、即ち乳腺の増殖、肥大、初乳の分泌、乳暈の着色、靜脈の怒張等これに屬し、主として妊娠初期に於ける診斷に應用さる。

第三項 妊娠確實徴

胎兒の存在によりて初めて來る徴候にして、以下述ぶる徴候の一つ以上を證明せば妊娠を確實に診定し得、即ち

- 一、胎児の各部分を明に觸知すること。
- 二、胎動を認知すること。
- 三、兒心音を聴取すること。
- 四、臍帶雜音を聴取すること。

これに屬す。
これを要するに妊娠は其後半期即ち第五ヶ月以後に於てはこれを確診し得るも其前半期殊に其初期に於ては其診斷容易ならずかかる場合に於ては上記不確徵及び半確徵殊に一今迄整順なりし月經の閉止、二閉經期間に相當せる子宮の増大及び鬆軟、三腔其他生殖器部位の妊娠性變化、四惡心吐逆嗜好の變化等に留意し其疑はしき場合には適當の間隔(二乃至三週間)を置きて再三周密なる診察を行ひ以て其妊否を診定し決して輕卒なるべからず。

第三節 妊娠の類症鑑別

想像妊娠

妊娠と誤り易き病氣及び區別點次の如し。
一、想像(又は妄想)妊娠 本症は肥満し妊娠を熱望するか又は嫌惡する婦人或は精神に異常ある婦人に見るものにて月經の閉止するは勿論其他の妊娠徵候例は惡心嘔吐嗜好の變化腹部の膨滿更に進んでは胎動の自覺陣痛様疼痛等を訴ふるものにして眞

子宮及び卵巣の腫瘍

の妊娠と誤る虞あるも精密なる外診により子宮の増大を認めず進んで内診により益益これを確定することを得。
二、子宮及び卵巣の腫瘍例は子宮筋腫又は卵巣嚢腫、この場合は(1)月經は多く閉止せず筋腫の如きは却て過多なること、(2)腫瘍の性質が妊娠子宮と異り其表面平滑ならず硬度は硬きか又は波動を呈し其増大極めて緩慢なること 等によりて區別することを得べく若し其困難ならんか醫師の診察を乞ふべし。

第四節 妊娠月數並に分娩豫定日診定法

第一項 妊娠月數診定法

妊娠月數の診定は實地上極めて必要なり而してこのためには
一、上記の妊婦診察法によりて上記の妊娠徵候殊に子宮の大きさ子宮底の高さ從うて腹部の大きさ及び形狀胎児の大きさ殊に見頭の大きさ硬度移動性子宮壁緊張の状態等を精査し、

二次に述ぶる分娩豫定日を計算し、
其第一の所見及び第二の知見を綜合考察して以て妊娠第何ヶ月に相當するやを診斷するものなれども種々なる妊娠異常例は雙胎妊娠橫位葡萄狀鬼胎羊水過多症過熟胎

兒等又は妊婦の痴鈍或は虚偽等のため其診定の困難なること決して稀ならず依て常に周到なる注意を以て精査し輕辛ならざる様注意すべし。
今左に妊娠月數診定上特に留意すべき點を擧ぐべし。

妊娠月數診定上特に注意すべき諸點

一、閉經の期間
二、其閉經の期間に相當する妊娠徵候就中、

(イ) 妊娠前半期に於ては、子宮の大きさ(第一五一頁を見よ)。

(ロ) 妊娠後半期に於ては、子宮底の高さ及び胎兒の大きさ(第一五二頁を見よ)。

但し妊娠第八ヶ月と第十ヶ月とに於ける子宮底の高さは殆んど同高なるを以て左に兩者の鑑別點を列記すべし。

妊娠第八ヶ月と第十ヶ月との鑑別點

一、閉經期間に差異あること。

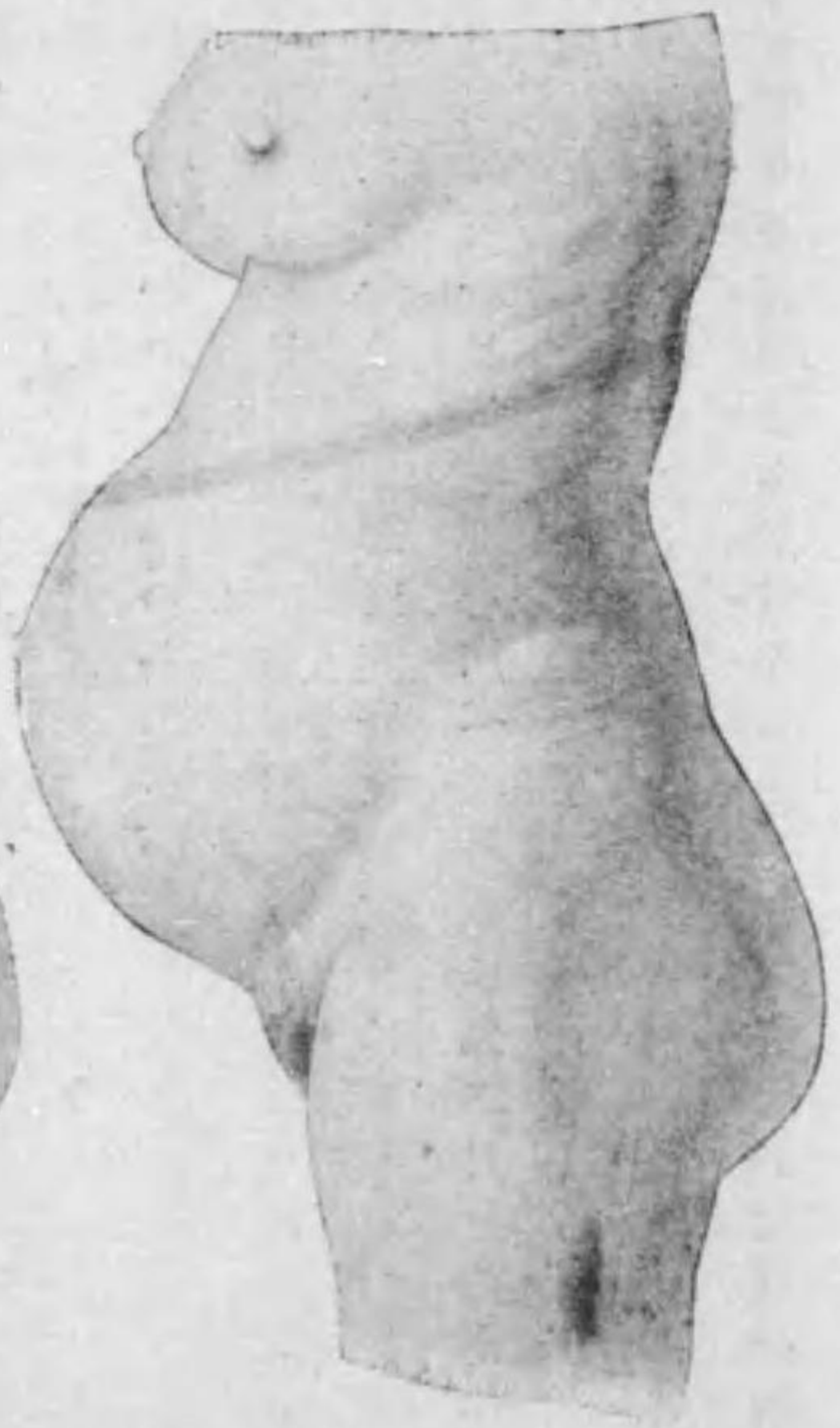
二、胎兒の大きさ殊に兒頭の大きさ、硬度及び移動性に差あること。即ち十ヶ月に於てはより大より硬く、移動性は八ヶ月に於ては初妊妊共によく移動するも十ヶ月に於ては殊に初妊婦に於て骨盤入口部に固定す。

三、腹部の形狀に差あること。即ち十ヶ月に於ては著しく前下方に懸垂す、第三百三十四圖と第三百三十五圖とを比較注視せよ。

四、子宮壁の感受性に差あること。即ち八ヶ月子宮に於ては普通診察時に其壁の緊張度に特別の變化を認めざれども十ヶ月に於ては收縮して固く緊張するを認む。

圖四十三百第

狀形の部腹るけ於に日月ヶ八第娠妊



圖五十三百第

狀形の部腹るけ於に日月ヶ十第娠妊



五、臍窩に差あること。

即ち八ヶ月に於ては尙ほ存在するも十ヶ月に於ては消失するか又は却て突隆す。
六、胃部腹壁の緊張に差あること。

即ち八ヶ月に於ては強く緊張するも、十ヶ月に於ては弛緩す。

七、子宮腔部に差あること。即ち八ヶ月にては稍短縮するのみなれども、十ヶ月に於ては殊

に初妊婦にありては消失す。
 八、恥骨縫合上縁より子宮底に到る長さに差あり。これ今井環博士の報告せる所にし
 て正規妊娠に於ては恥骨縫合上縁より子宮底に到る長さ(高さにあらず)は糧にて妊
 娠月数の約三倍に相當すと故に八ヶ月に於ては約二十四糧にして、十ヶ月に於ては約
 三十糧にて其間に約六糧の差あり。

第二項 分娩豫定日計算法

分娩豫定日はこれを次に述ぶる三種の方法によりて算定す而してこれ等の方法は皆
 妊娠の持續日数を二百八十日として行ふものなるを以て實際には多少の遅速を免れ
 ざる不確實なるものなり。
 一、最終月経より分娩豫定日を計算する法。
 (イ)最終月経の第一日に七日を加へ其月数より三ヶ月を減すべし、即ち最終月経の
 第一日を九月十日とすれば其分娩豫定日は翌年の六月十七日となる。
 (ロ)最終月経の第一日に七日を加へ其月数に九ヶ月を加ふべし、この法は最終月経
 の月数が三より小なる時に便なり、即ち最終月経の第一日が一月十日とすれば
 其分娩豫定日は十月十七日となるなり。
 二、胎動を自覺せる初日より計算する法。即ち妊婦が胎動を初めて自覺せる日より大

凡二十週即ち太陽曆日の四ヶ月と二十日の後を以て豫定日となす。
 三、受孕せし交接の日より計算する法。即ちこの月日に九ヶ月を加ふるか又は三ヶ月
 を減す。

以上の如く總て妊娠持續日数を二百八十日として算出するのみならず、最終月経と云
 ひ胎動自覺と云ひ皆妊婦の云ふ所によりて算出するものなるを以て多少の差異を生
 ずるは寧ろ當然のことなり、従うて妊娠月数の診定に當りては主として上記他覺的所
 見を基とし、分娩豫定日の如きは單に其補助として參考するに止むべし。

第五節 初妊婦と經産婦との鑑別

この鑑別は普通は問診により明白なれども、妊婦が故意に虚偽を云ふ時又は妊娠の早
 期中絶即ち流産早産(後に詳なり)等にして而も長き時日經過せし場合には困難なるこ
 とあり、次の諸點を精査すべし。

- (第一)外陰部に於ける差異は
 - (イ)陰門 初妊婦に於ては閉鎖し、經産婦に於ては哆開す。
 - (ロ)陰唇繫帶 初妊婦に損傷なく、經産婦に於ては消失又は強く弛緩し色素に富む。
 - (ハ)會陰 初妊婦に損傷なく、經産婦に於ては裂傷又は癍痕あり。
- (ニ)處女膜(第三百三十六及び百三十七圖を見よ)。初妊婦に於ては尙ほ輪狀に健存したとへ裂

傷あるも其腔壁に附着する部分までに及ぶことなし、然るに經産婦に於ては消失するか又は小片に裂懸して處女膜癍痕を形成す。

(本) 腔入口 初妊婦に於ては狭縮し高々尿道外口部を見るのみなるが、經産婦に於ては前及び後腔壁の露出すること多し。

(第二) 内陰部に於ける差異は

(イ) 腔 初妊婦に於ては狹隘にして皺襞に富み粗糙なるに、經産婦に於ては廣潤にして皺襞消失し滑澤なり。

(ロ) 子宮腔部 初妊婦に於ては短小にして圓錐形をなし、硬度平等にして、表面平滑妊娠末期に到れば觸知する能はず、然るに經産婦に於ては長大圓柱形にして、硬度

圖六十三百第

膜女處の女處



圖七十三百第

膜女處の婦産經



不等表面凹凸に富み、妊娠末期に到るも全く消失することなし。

(ハ) 子宮口 初妊婦に於ては圓形又は圓錐形點狀にして妊娠末期に到るも指を通ずることを得ず、然るに經産婦に於ては横裂哆開し、周圍に癍痕あり、妊娠末期には指を通ずることを得(第百二十一圖を見よ)。

(第三) 乳房 初妊婦に於ては緊満充實し乳頭短く、新妊娠線あり、然るに經産婦に於ては弛緩懸垂し乳頭長く、屢々舊妊娠線を認む。

(第四) 腹部 初妊婦に於ては腹壁緊張し硬く、妊娠後半期に新妊娠線を生ず、然るに經産婦に於ては弛緩し皺襞に富み、新及び舊妊娠線を認む。

(第五) 胎兒の先進部 初妊婦に於ては既に妊娠末期より骨盤入口に進入固定するが、經産婦に於ては分娩開始まで骨盤入口上に移動す。

然れども時に鑑別の全く不可能のことあり、殊に一回經産婦にして而も流又は早産にて長き時日を経たる場合に於て然り。

第六節 胎勢胎位及び胎向の診断

既に述べたる内及び外診法により胎兒各部分を觸知して診断す、後章更に述ぶる所あるべし。

第七節 胎兒の數の診斷

雙胎妊娠の
特徴

多胎妊娠中實地に遭遇するは主として雙胎妊娠にして其他に到りては極めて稀なるを以て茲には雙胎に就てのみ述べし。

雙胎妊娠の特徴 雙胎妊娠は次の諸點により診斷するものなれども葡萄狀鬼胎又は腹腔内腫瘍と單胎妊娠と合併せるが如き場合との鑑別は頗る困難なり、かかる場合には早く醫師の診察を乞ふべし。

- 一 既往症に於て雙胎の素因あること。
- 二 既に述べたる妊娠徴候がより著しく且つ強く現はるること、即ち子宮乃至腹部の増大膨滿著明にして妊娠線、靜脈瘤、惡心嘔吐、其他等の著明なること。
- 三 腹壁の隔りたる二箇所に於て各々明瞭にして其數の同じか又は異なる兒心音を聴取し而もこの二點を連結せる線の中央に近き部位に於てはこれを全く聴かざるか又は極めて弱く聴くこと。
- 四 屢々羊水の過多を合併し明かなる波動を證明すること。
- 五 子宮腔内に二個の頭部又は臀部及び單胎にはあり得べからざる多數の手足を觸ること。

第八節 胎兒生死の診斷

次の諸點に留意せば診斷さして困難ならざれども只一回の診察を以て輕卒に斷定すべからず。

(甲) 妊娠前半期に於ては

生活胎兒に於ては 一 想像せる妊娠月數に相當せる妊娠徴候あり、二 次回の診察に於て各妊娠徴候の定型的進捗を認む、然るに

死亡胎兒に於ては 一 各妊娠徴候が豫想せる妊娠月數に相當せず、二 屢々血性若くは汚褐色の子宮分泌あり、三 惡寒、食慾減退、全身倦怠等の感あり、四 次回診察により各妊娠徴候の進まざるを認む。

(乙) 妊娠後半期に於ては

生活胎兒に於ては 一 自覺的及び他覺的に胎動を認知し 二 兒心音稀れに臍帶雜音を聴取す、然るに

死亡胎兒に於ては 一 胎動消失し 二 兒心音及び臍帶雜音を聴かず 三 子宮は却て縮小し 四 乳房弛緩し腹部の冷感、體內異物の感(腹腔内に餘計の物入り居る感じ)あり。

第十三章 妊婦の攝生法

妊娠はもと生理的のものなれども其初期及び末期には常に多少の苦痛障礙あるものにして其甚だしき場合には早く醫治を要するは勿論なれども其然らざる場合には次の攝生法を守らしむべし。一般に妊婦の從來馴れたる生活法にして攝生上大なる缺點を認めざる範圍に於てはなるべくこれを許し只過度に互るを嚴禁すべし。

一 飲食物 はなるべく消化よく滋養に富むものを適度に取らしめ強て平素の習慣を變ずる必要なければ不消化物強き香の物例は芥子胡椒蕃椒山葵等或は興奮料例は酒類濃厚なる茶又は珈琲等はこれを避くべし。

二 便通 は常に順調ならしめ毎日一、二行ならしむ殊に妊娠初期には便秘を來し易くために「つはりの」症狀を増悪するものなるを以て適度の運動食餌法例は毎朝空腹時に腹部の温罨法（第八頁を見よ）芥子泥貼布（第一〇頁を見よ）等を行ひ飲食物に對する嫌忌の情を起さしめざる様に注意すべし、かくして「つはりの」症狀を早く消失せしむる様にすべし、然らざれば屢々恐るべき惡阻に變じて意外の不幸を見ることあり。

三 利尿 は子宮が増大するに従うて種々なる障害を來すを以てよく茲に留意し殊に尿が膀胱内に蓄積せざる様に毎回充分に排尿せしめ、一日の全量を注意し其量少く且下肢に浮腫ある場合は腎臓の疾患を合併するものなるを以て醫治を乞はしむ。

四 衣服 は清潔寛潤にして保温に適するものなるべく、（衣服の保温作用、第三三頁を見よ）特に胸部腹部を壓迫せざる様に注意すべし。

五 身體の清潔 は妊娠の初より特に注意すべし、入浴はなるべく毎日一回適度の温度の下になるべく短時間の全身浴を行ひ浴後感冒せざる様注意すべし、之れに反し温泉浴海水浴坐浴とは普通は盟を以て腎部及び下腹部浴をなすを云ふ、脚浴（湯量は膝關節部までを度とす）等は醫師の命令指導によりてのみ行ふべし、然らずんば屢々妊娠中絶の原因をなすことあればなり、外陰部は妊娠末期に近づくに従うて分泌過多のため不潔にな

に清冷水又は冷牛乳或は新鮮成熟せる野菜、果實等を與へ、且つ一定時に必ず上固便所へ行（せ）しめてこれが整調を圖り、止むを得ずんば石鹼水又は「リッソリン」の洗腸を試むべし、（第一頁を見よ）之れに反し下痢ある時は食物に注意し不消化物を避け、かくても目的を達せずんば早く醫治を乞はしむべし。

五 身體の清潔 は妊娠の初より特に注意すべし、入浴はなるべく毎日一回適度の温度の下になるべく短時間の全身浴を行ひ浴後感冒せざる様注意すべし、之れに反し温泉浴海水浴坐浴とは普通は盟を以て腎部及び下腹部浴をなすを云ふ、脚浴（湯量は膝關節部までを度とす）等は醫師の命令指導によりてのみ行ふべし、然らずんば屢々妊娠中絶の原因をなすことあればなり、外陰部は妊娠末期に近づくに従うて分泌過多のため不潔にな

に清冷水又は冷牛乳或は新鮮成熟せる野菜、果實等を與へ、且つ一定時に必ず上固便所へ行（せ）しめてこれが整調を圖り、止むを得ずんば石鹼水又は「リッソリン」の洗腸を試むべし、（第一頁を見よ）之れに反し下痢ある時は食物に注意し不消化物を避け、かくても目的を達せずんば早く醫治を乞はしむべし。

五 身體の清潔 は妊娠の初より特に注意すべし、入浴はなるべく毎日一回適度の温度の下になるべく短時間の全身浴を行ひ浴後感冒せざる様注意すべし、之れに反し温泉浴海水浴坐浴とは普通は盟を以て腎部及び下腹部浴をなすを云ふ、脚浴（湯量は膝關節部までを度とす）等は醫師の命令指導によりてのみ行ふべし、然らずんば屢々妊娠中絶の原因をなすことあればなり、外陰部は妊娠末期に近づくに従うて分泌過多のため不潔にな

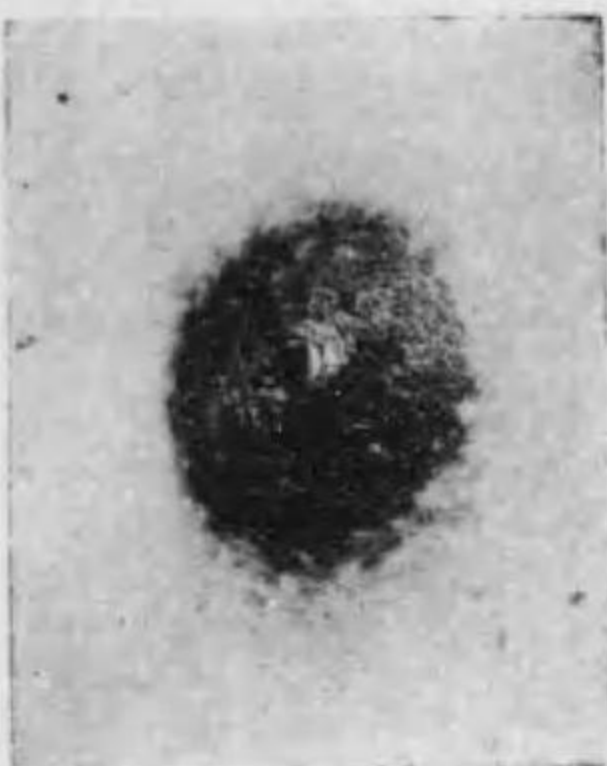
に清冷水又は冷牛乳或は新鮮成熟せる野菜、果實等を與へ、且つ一定時に必ず上固便所へ行（せ）しめてこれが整調を圖り、止むを得ずんば石鹼水又は「リッソリン」の洗腸を試むべし、（第一頁を見よ）之れに反し下痢ある時は食物に注意し不消化物を避け、かくても目的を達せずんば早く醫治を乞はしむべし。

り易く、放置すれば糜爛し、傳染の危険を増すを以て特に十分に注意し時々微温湯を以て洗滌すべし、之れに反し、**腔の洗滌は濫りに行ふべきものならず。**

六、乳房 は常に其清潔に留意し殊に皮膚は初妊婦にて嘗て哺乳せしめざるものは薄弱にして哺乳により容易に損傷し潰瘍を生じ常に哺乳時に劇痛あるのみならず乳腺炎又は鷺口瘡等の原因となるを以て既に妊娠時に於て冷水又はアルコール等を

第三百八十八圖

頭乳るせ没陷
(藏所室教學科人婦產大東)



以て時々摩擦して以て其健強を謀るべく、乳も屢々扁平なるか又は陷凹し(第三百三十八圖を見よ)哺乳に不便なることあるを以て妊娠中に豫め手指を以て引き出さしむべし。

七、運動 適宜の屋外運動即ち新鮮なる空氣適當氣温の下に散歩することは便通を整調し食欲を増進するのみならず精神を爽快ならしむる効あり、家庭に於ける平素の業務も其過劇過度ならざる範圍に於ては毫も不可ならざれども長時間に亙る裁縫洗濯張物等は宜しからず又長途の汽車汽船馬車人力車乗馬等の旅行階段の頻繁なる昇降重荷の始末等はこれを嚴禁すべし。
八、精神状態 も常に其安靜を謀り充分なる慰安分娩産褥其他に對する(の下に過勞又は劇動を(演劇音楽小説其他日常の喜怒哀樂避け睡眠を充分ならしむべし。
九、房事 はこれを制限すべきは勿論妊娠後半期にはこれを禁すべし。

第四編 正規分娩

第一章 分娩の定義

分娩 とは胎兒及び其附屬物が娩出力の作用により産道を通じて母體外に排出される現象を云ふ、而してかかる作用を営みつつある間の婦人を産婦と云ひ初産婦と經産婦とを區別す、其前者は初めて分娩に臨める婦人を云ひ、其後者は既に分娩を経過せる産婦を云ひ、かくして娩出せる胎兒を初生兒又は新生兒と云ひ、生後約十乃至十五日間を云ふ。

第二章 分娩の種類

次の四種を大別し、其各を細別すること次の如し。
一、其起る時期により、

(1) **流産** とは妊娠の第二十八週即ち七ヶ月以前に起る分娩を云ひ、かくして娩出せる初生兒を未熟又は不熟兒と云ひ、到底子宮腔外即ち母體外生活を續くることを得ず。

(2) **早産** とは妊娠第二十八週以降第三十八週以内に起る分娩を云ひ、其娩出せる初

分娩
初産婦
經産婦
初生兒

生兒を早熟兒と云ひ細心周到なる看護によりては辛うじて母體外に生活を續けることを得。

(ハ) 定期産又は常産 とは妊娠第三十八週以上第四十週に起る分娩を云ひ其娩出せる初生兒を成熟兒と云ふ。

(ニ) 晩産又は遅産 とは妊娠第四十週以上を経て起る分娩を云ひ其娩出せる初生兒を過熟兒と云ふ。

三分娩經過中異常の有無により。

(イ) 正規分娩 とは定期産にして經過中に何等異常なく母子共に健全なる場合を云ひ。

(ロ) 異常分娩とは以上に反する場合を云ふ。

四、分娩經過中に醫師の介助を要せしか否かにより。

(イ) 自然産 とは何等特別の介助を要せず自然に平易に行はれたる場合を云ひ。

(ロ) 人工産 とは介助を要せし場合を云ふ。

四、胎兒の數により

(イ) 單胎分娩 とは胎兒の一個なる分娩を云ひ。

(ロ) 多胎分娩 とは胎兒の數二個以上なる場合を云ひ其數により雙胎分娩品胎分娩、要胎分娩等を細別すること妊娠の場合と同じ。

第三章 産道

定義

産道とは分娩時に胎兒及び其附屬物の通過する路にして軟部及び骨部産道を區別し共に娩出力に對し抵抗を興ふる部分を云ふ。

第一節 骨部産道

定義

骨部産道とは骨盤を云ひ分娩に際し多少は擴張すれども極めて輕度従うて常に著

しき抵抗を及ぼす部分なり従うて其形狀及び大きさの正否は分娩の經過に重大なる影響を及ぼす特に注目すべき部分なり。

第一項 骨盤の解剖

薦骨

骨盤は軀幹の最下部にあり(第二十一圖を見よ)薦骨尾骶骨及び左右の髌骨が互に相關節し又は縫合して生ずる一個の複雑なる形狀及び大きさを有する骨管にして殆んど移動性なく従うて擴張せざる骨管腔にして其中に子宮卵巣輸卵管膀胱及び直腸を保護し、分娩時には産道となり其形狀及び大きさは分娩と重大なる關係を有す。

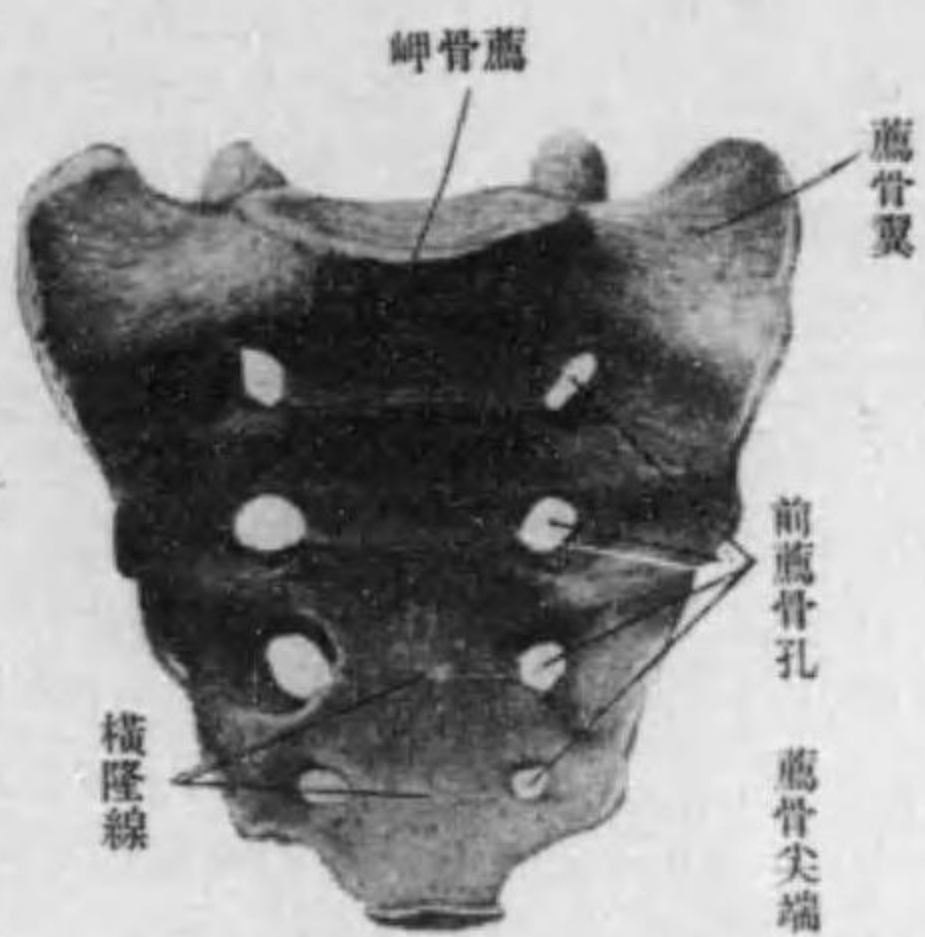
(第一) 薦骨(第三百三十九百四十四及び百四十一圖を見よ)

薦骨は尾骶骨と共に骨盤の後壁をなすものにして元來五個の脊椎骨が合して一個

となりたるものにして圖に見る如く上端より下端に到るに従うて狭小する三角形をなし其上端はある傾斜を以て第五腰椎と固く關節しその部分は強く前方に突出すこ

第三百二十九圖

薦骨を前下方より見たる圖



第四百十圖

薦骨を後上方より見たる圖



第四百十一圖

薦骨及び尾骶骨を側面より見たる圖



これを薦骨岬と云ふ其兩側面は薦腸關節によりて體骨と關節し其下端は薦尾關節により尾骶骨と關節すこの薦尾關節は後方に向うて多少移動することを得るも其他の關節は殆んど全く不動性なり其前面は強く後方に向うて彎凹し四對の横線と左右四對の孔とあり骨盤神經の出入孔なり其後面の正中線に沿ひて三乃至四個の突隆部ありこれを中薦骨岬と云ひ其内部は空洞をなし脊髓管に連り脊髓の末端を入る

薦骨岬

尾骶骨

薦骨

腸骨

腸骨前上棘
腸骨後上棘

(第二) 尾骶骨(第四百二十二圖及び四百二十三圖を見よ)
この骨は又尾間骨とも云ひ元來四個の小脊椎骨が合して一個と成りたるものにして大凡三角形をなし其尖端は下方に向ひ上端は薦尾關節により薦骨の下端と關節す

圖二十四百第

圖るた見りよ方前を骨骶尾



圖三十四百第

圖るた見りよ方後を骨骶尾



(第三) 體骨又は無名骨(第四百十四圖及び四百十五圖を見よ)
この骨は全身中最大なる不正

形を呈するものにして上方の腸骨下方の坐骨前方の恥骨の三つの骨が相癒合して生せるものなり、後方は薦腸關節により薦骨と關節し、前方は恥骨縫合によりて左右の恥骨相癒合して以て骨盤の側壁及び前壁を形成するものにして其脾白には大腿骨の骨頭を入れて股關節を作る。

腸骨は體骨の上部を占め體部と翼部とを區別す。
體部は下方に位し厚き硬き部分にして翼部は體部の上方に位する薄き扁平なる部にて孰れも内外兩面あり内面は陥凹して腸骨窩を作り其下方に一條の隆起線あり、これを腸骨の無名線又は孤形線と云ふ、上縁部はこれを腸骨岬と云ひ其前縁の突出部を腸骨前上棘と云ひ其後縁の突出部を腸骨後上棘と云ひ孰れも骨盤外計測の測定點

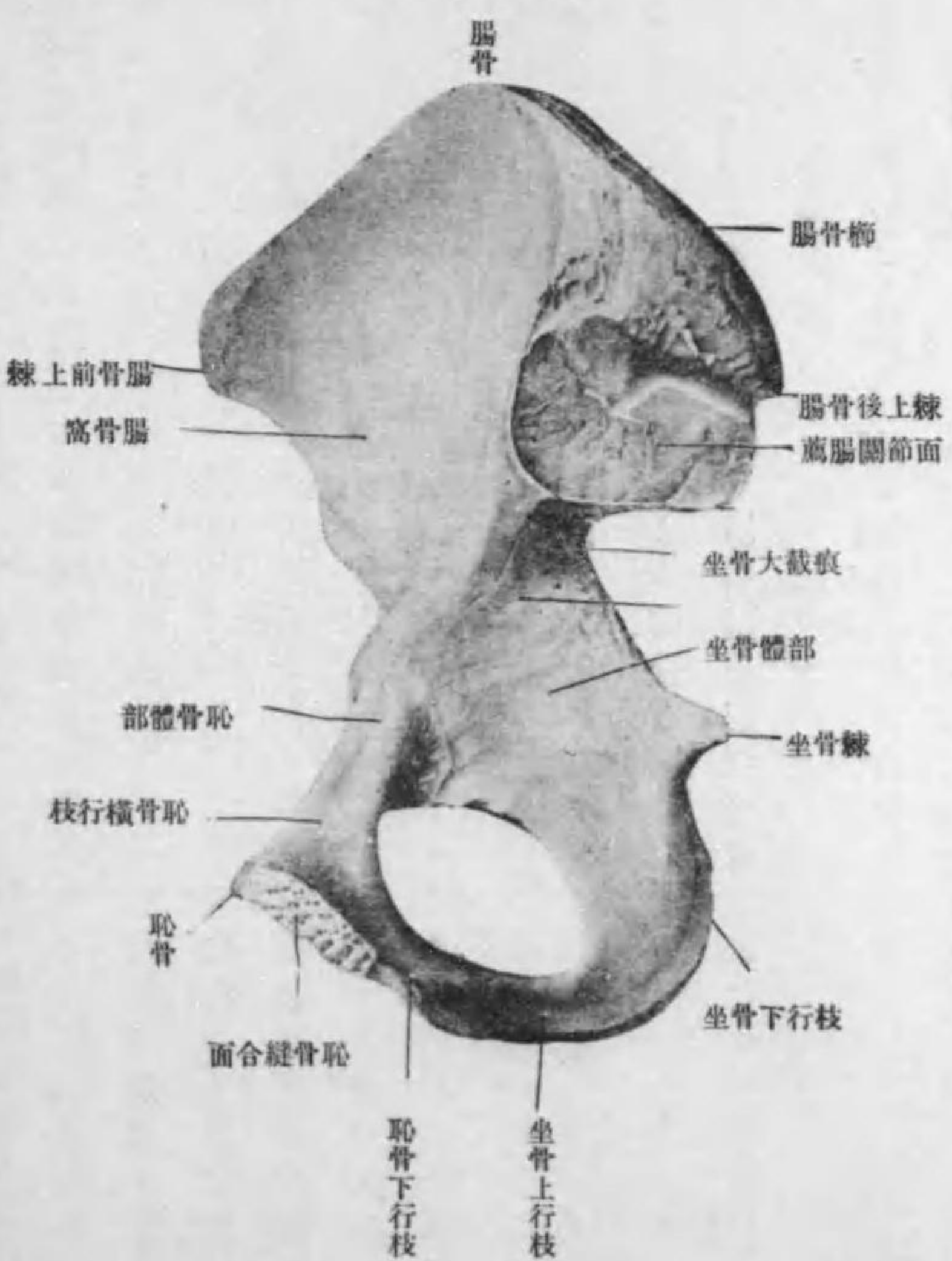
坐骨

第四編 正規分鏡

坐骨は、髌骨の後下方を占むる部分にして、體部及び枝部を區別し、枝部は更に後方の廣き下行枝と、前方の狭き上行枝とに分たる。其下行枝の後縁にて内方に突隆せる部

圖四十四百第

置るた見りよ側内た骨體側右



坐骨結節

恥骨

恥骨縫合

腸恥結節

を坐骨棘と云ひ、更に下りて其下端に近く骨質の厚き部を坐骨結節と云ひ坐位に於ける身體の重點となる。

恥骨は、髌骨の前下部を占むる部分にして、體部と枝部とより成り、枝部は更に横行枝と下行枝とに分たる。横行枝は體部より前内方に走り、前方に於て他側の同名骨と接

恥骨縫合面 閉鎖孔

恥骨

恥骨横行枝

恥骨體部

坐骨上行枝

坐骨

坐骨下行枝

節結骨坐

枝行下骨坐

部體骨坐

高白髌

部體骨髌

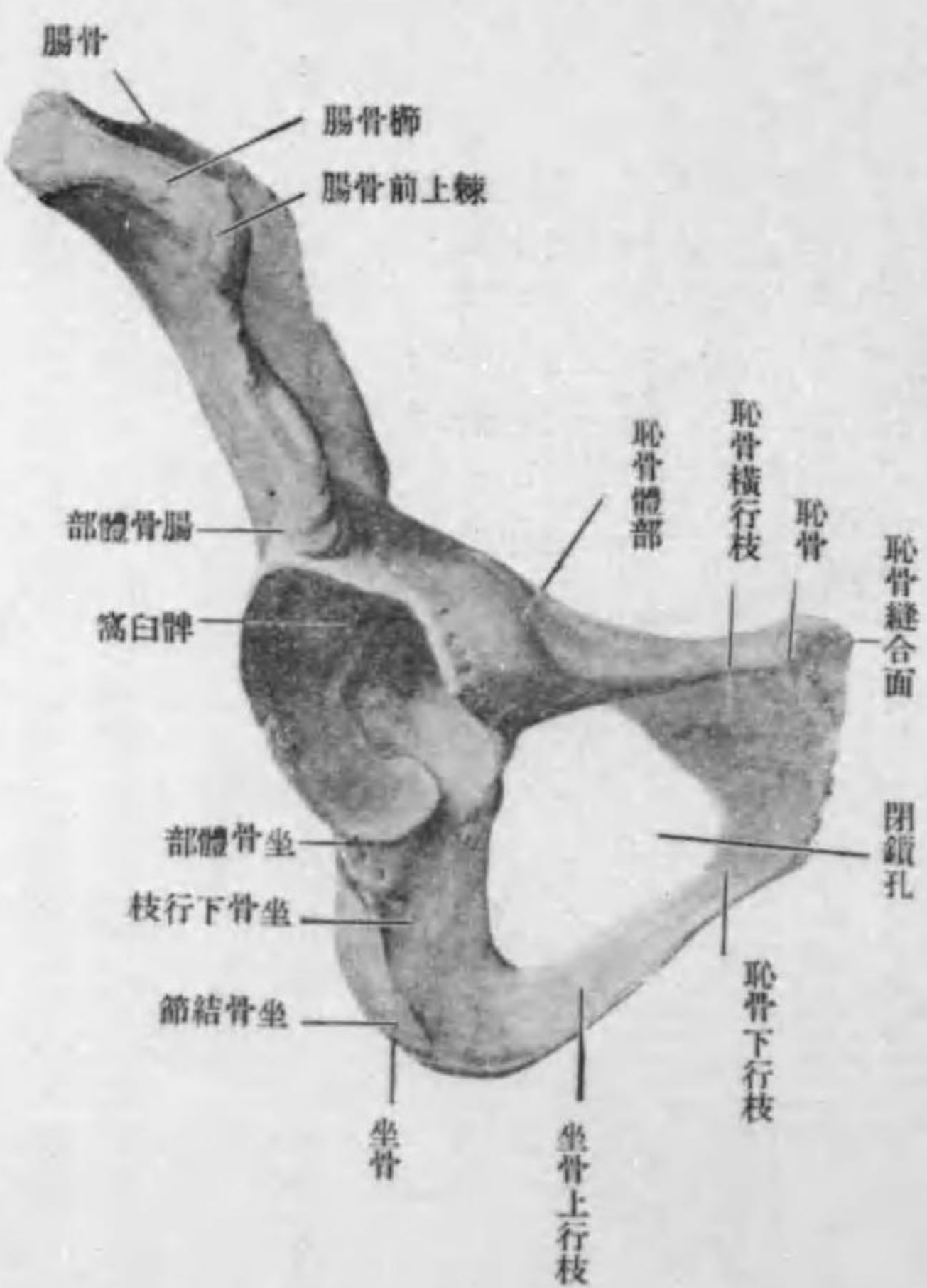
腸骨

腸骨髌

腸骨前上線

圖五十四百第

置るた見りよ方側前た骨體側右



下行枝は、恥骨縫合より下外方に走り、坐骨の上行枝と連結す。

第三章 産道

(又は縫隙を作る、其上縁はこれを恥骨髌と云ひ、腸骨の無名線に連續して、大骨盤腔との界をなす。其腸骨に相接する部位に極めて僅に隆起せる所あり、これを腸恥結節と云ふ。

閉鎖孔

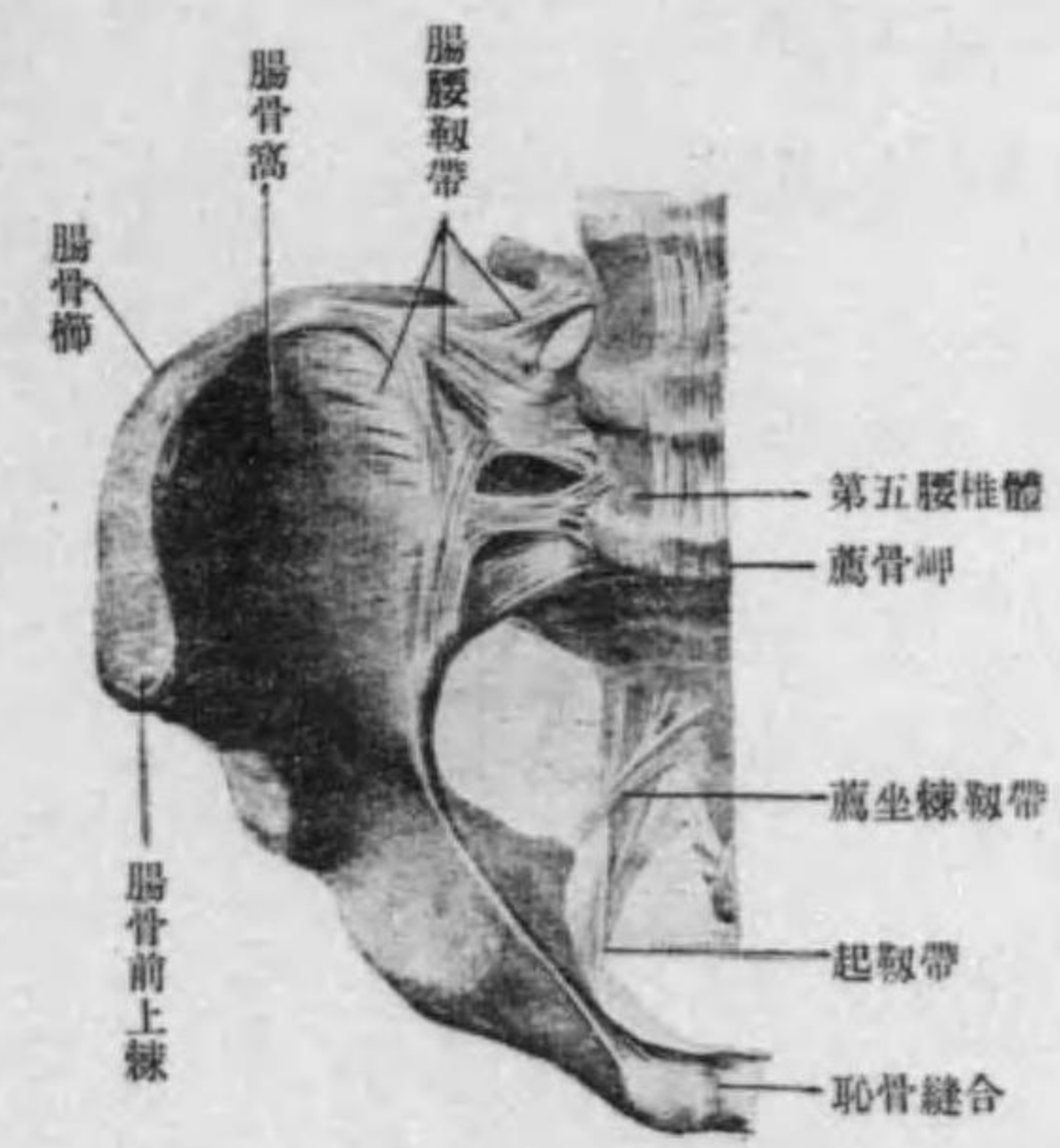
恥骨と坐骨との間にある橢圓形の孔腔を閉鎖孔と云ひ其大部分は靱帯の膜にて閉ぢらる。

恥骨弓

左右恥骨下行枝と坐骨上行枝とより作らるる弓状の門を恥骨弓と云ひ男女により著しき差異ありて(第百五十一圖を見よ)分娩と大なる關係あり。

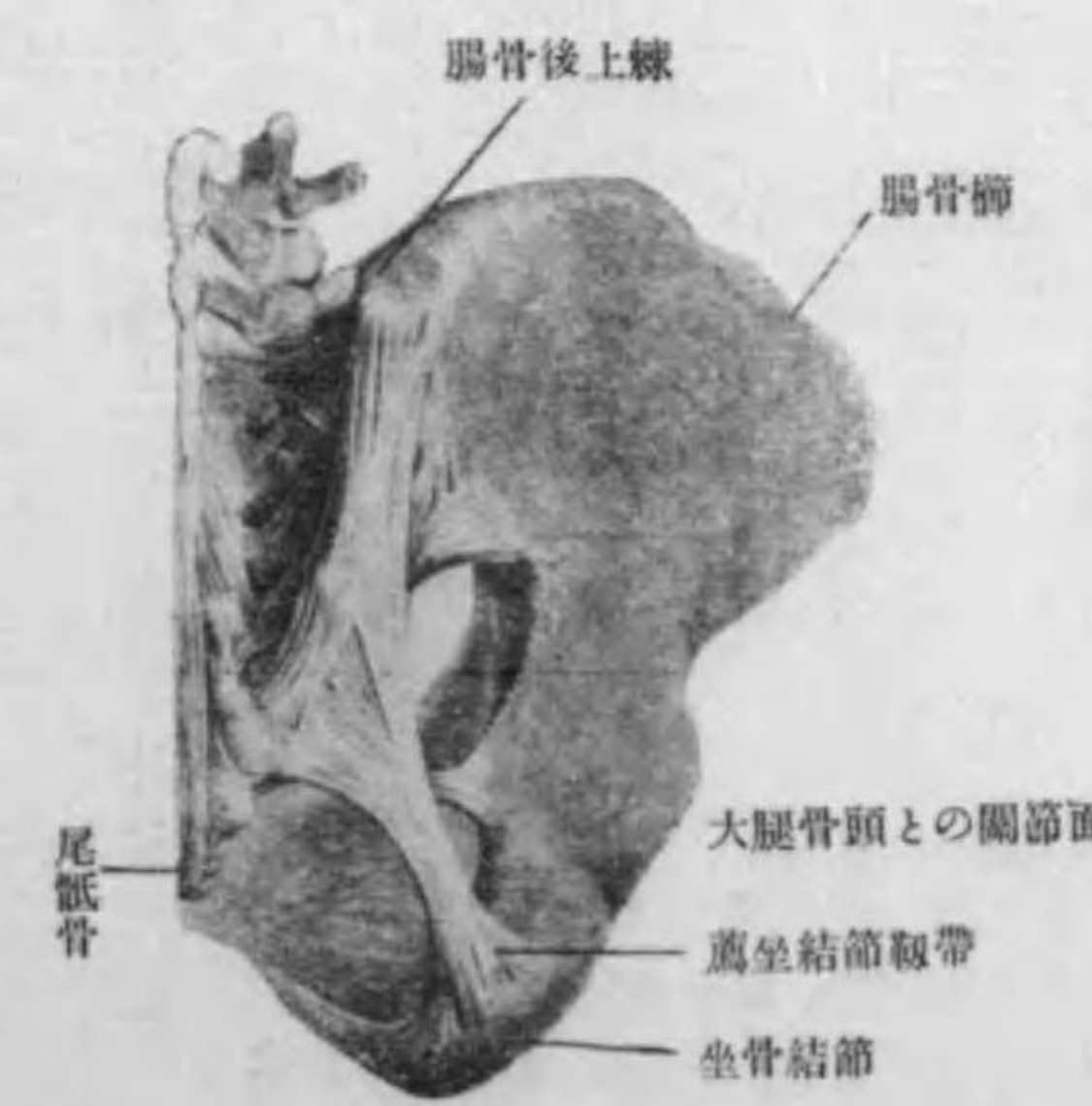
第百四十六圖

右骨盤半分の靱帯を示す(前上方より見たる圖)



第百四十七圖

骨盤の右半側に於ける靱帯(後方より見たる圖)



以上骨盤を形成する諸骨は上記の諸關節及び結合を以て相連結するのみならず第百

骨盤腔の區分

大骨盤腔

小骨盤腔

骨盤入口

四十六及び百四十七圖に示すが如き複雑なる靱帯によりて其連結を益々強固にさる。骨盤腔の區分

以上の如き構造を有する骨盤は後方は薦骨脚側方は腸骨無名線前方は恥骨柄によりて成る一つの輪狀の假定線によりて上方の大骨盤腔と下方の小骨盤腔とに區分さる。大骨盤腔は後方は第五腰椎側方は腸骨翼部前方は前腹壁の下部より成り廣濶にして胎兒娩出に對し抵抗を及ぼすこと殆んどなく從うて分娩とは直接に大なる關係を有せざれども其形狀及び大きさはやがて小骨盤腔の形狀及び大きさを推定するの助をなすものにして生體に於ける骨盤の測定に必要なこと既に述べたるが如し(第百七十二頁を見よ)。

小骨盤腔は通常單に骨盤と云ひ上記の如く殆んど移動性なき狭き一骨管腔なるのみならず其形複雑從うて其大きさは部位によりて廣狹不同にして分娩と直接に極めて親密なる關係を有する部分なり以下これを詳述すべし。

小骨盤腔の區分形狀及び大さ(第百四十八圖を見よ)。
小骨盤腔はこれを一骨盤入口二骨盤腔三骨盤出口の三部に區分することを得。
骨盤入口は又骨盤上口とも云ひ小骨盤腔の最上部即ち入口部に於て上記大骨盤腔と小骨盤腔との境界面に相當する一平面を云ひ其形橢圓形にして其徑線及び其正規的長さ次の如し。

一直徑線又は縱徑線或は眞結合線 とは薦骨岬の中央より恥骨縫合の上縁に到る最短距離にして一〇・七浬。

二横徑線 とは左右腸骨無名線間の最大距離にして一二・一浬。

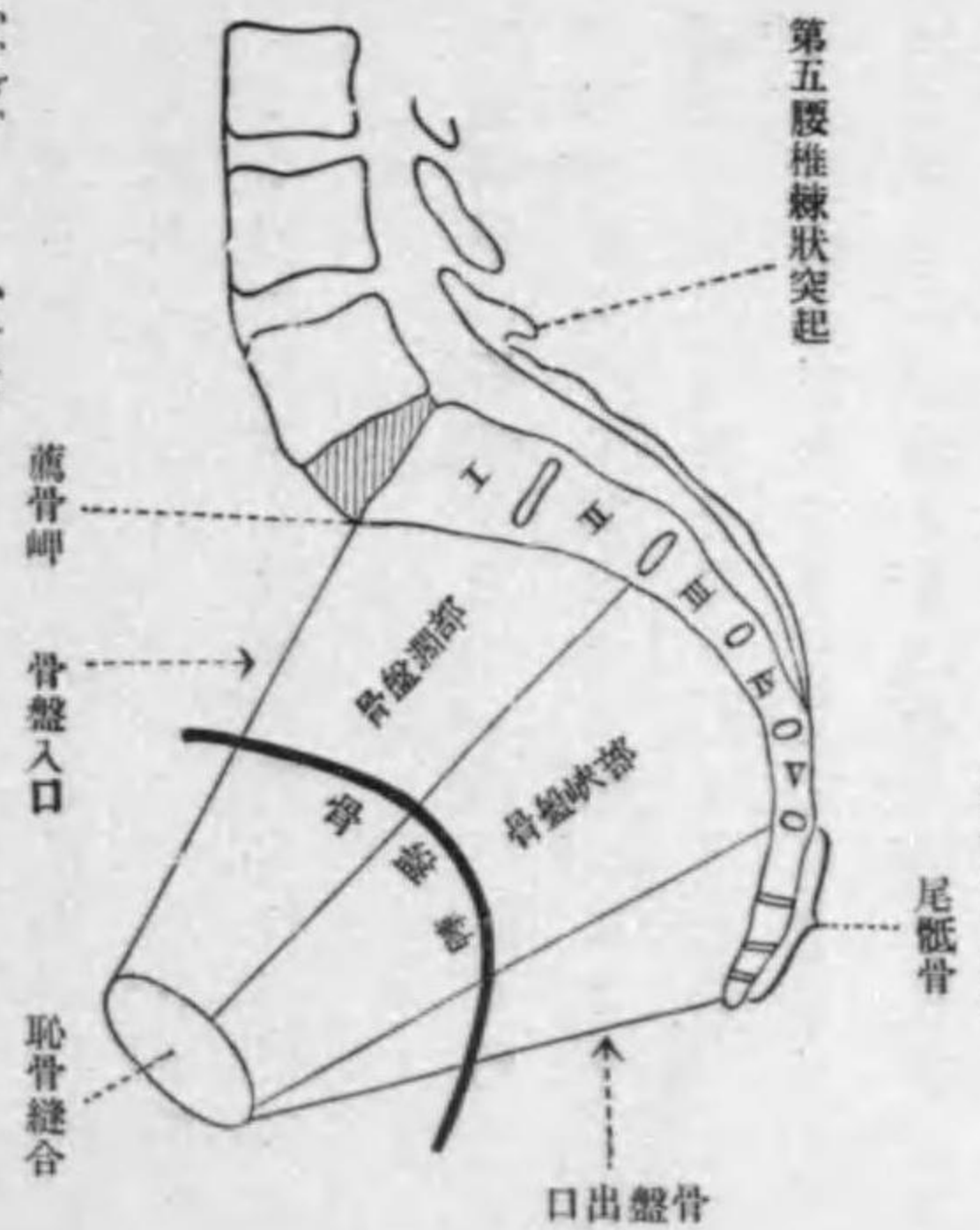
三第一又は右斜徑線 とは右側薦腸關節部より左側腸恥關節に到る距離を云ひ一二・〇浬。

四第二又は左斜徑線 とは左側薦腸關節部より右側腸恥關節に到る距離を云ひ一二・〇浬。

骨盤腔 は骨盤入口と骨盤出口との間に介在する間腔にしてこれを上方に位して廣き骨盤瀾部又は廣部と下方に位し狭き骨盤峽部とに区分し、兩者の境界は、後方は第二及び第三薦骨椎の癒合部、側方は髌臼窩の上縁に相當する部位、前方は恥骨縫合後面の中點を合む一假想面なり、而してこれ等兩部の形狀及び大きさを知らるために骨盤入口部に於けると同様なる徑線を假設し其正規的長さ次の如し。

第四百八十四圖

小骨盤の縦断面模型圖



骨盤腔
瀾部と峽部との境界

口との間に介在する間腔にしてこれを上方に位して廣き骨盤瀾部又は廣部と下方に位し狭き骨盤峽部とに区分し、兩者の境界は、後方は第二及び第三薦骨椎の癒合部、側方は髌臼窩の上縁に相當する部位、前方は恥骨縫合後面の中點を合む一假想面なり、而してこれ等兩部の形狀及び大きさを知らるために骨盤入口部に於けると同様なる徑線を假設し其正規的長さ次の如し。

骨盤瀾部

(甲) 骨盤瀾部に於ては

一 縱徑又は直徑線 とは第二及び第三薦骨椎癒合部の中央より恥骨縫合後面の中點に到る距離を云ひ一一・三浬。

二 横徑線 とは左右髌臼の中點に相當する骨盤内壁間の距離を云ひ一二・五浬。

三 斜徑線 とは大坐骨截痕上縁より他側閉鎖孔上縁に到る距離を云ひ第一及び第二を區別することと入口部と同じ各一三五浬。

(乙) 骨盤峽部に於ては

一 縱又は直徑線 とは薦骨の尖端即ち薦尾關節部より恥骨縫合の下縁に到る距離を云ひ一一・五浬。

二 横徑線 とは兩側坐骨棘間距離を云ひ一〇・〇浬。

三 斜徑線 は瀾部のそれに相當すれども兩測定點共に軟部に當るを以て一定數の長さを得ず。

骨盤出口 は又骨盤下口とも云ひ後方は尾骶骨の先端側方は坐骨結節、前方は恥骨弓によりて圍繞せらるる面を云ひ其徑線及び其正規的長さ次の如し。

一 縱又は直徑線 とは尾骶骨の先端より恥骨縫合の下縁に到る距離を云ひ其長さ平時に於ては九種なるが分娩時には兒頭により尾骶骨が強く後方に壓退せらるるため一一・一浬に延長す。

骨盤峽部

二、横徑線 とは、兩側坐骨結節間距離を云ひ一〇〇浬。
 三、斜徑線 は、兩測定點共に軟部に當るを以て一定數の長さを得ず、大凡一〇〇浬なり。
 以上小骨盤腔各部分に於ける諸徑線の長さを比較するに、骨盤入口部に於ては、其横徑線、骨盤潤部に於ては、其斜徑線、骨盤峽部乃至出口部に於ては、其縱徑線の最長なるを知る、即ち上記骨盤各部に於ては、上記最長徑線に相當せる部位に於て最も廣く従うて抵抗最小なるを意味するものにて後述する正規分娩機轉の第二廻轉は實にこれに原因して起るなり。

對角結合線

其他小骨盤腔には次の諸徑線を假定す。
 一、對角結合線 は、薦骨岬の中央より恥骨縫合の下縁に到る最短距離を云ひ其正規的長さ一二五乃至一三〇浬にして實地に於てはこの數より一八乃至二〇浬を減じた數を以て眞結合線の長さとなすこと既に述べたるが如し。

骨盤軸
骨盤誘導線

二、骨盤軸 は一名骨盤誘導線とも云ひ上記骨盤腔各部分に於ける縱徑線の中點を結合して生ずる第四百四十八圖に示すが如き一つの彎曲せる想像線にして胎兒及び其附屬物はこの線の方向に於て母體外に排出され内診指又は器械はこの方向に於て挿入さるるなり。

骨盤の高徑

三、骨盤の高徑 とは骨盤入口部と出口部との高さを云ひ、後壁の高さは薦骨岬より尾骶骨先端に到る距離にして一二乃至一三五浬、前壁の高さは恥骨縫合の上縁より下縁に到る距離にして僅に四浬なり。

骨盤の傾斜

骨盤の傾斜

既に述べたる如く骨盤は脊柱に對し一定の傾斜即ち角度をなして相結合す、従うて直立に於て眞結合線と水平線との間には一定の角度平均四十四度をなす、これを骨盤の傾斜と云ひ、個人的差異あるのみならず同一人にては其位置により多少の差を生ずるものなり。

第二項 男女骨盤の差異

(甲)全體としての差異は 男子の骨盤は深くして狭く、女子のは淺くして廣し。

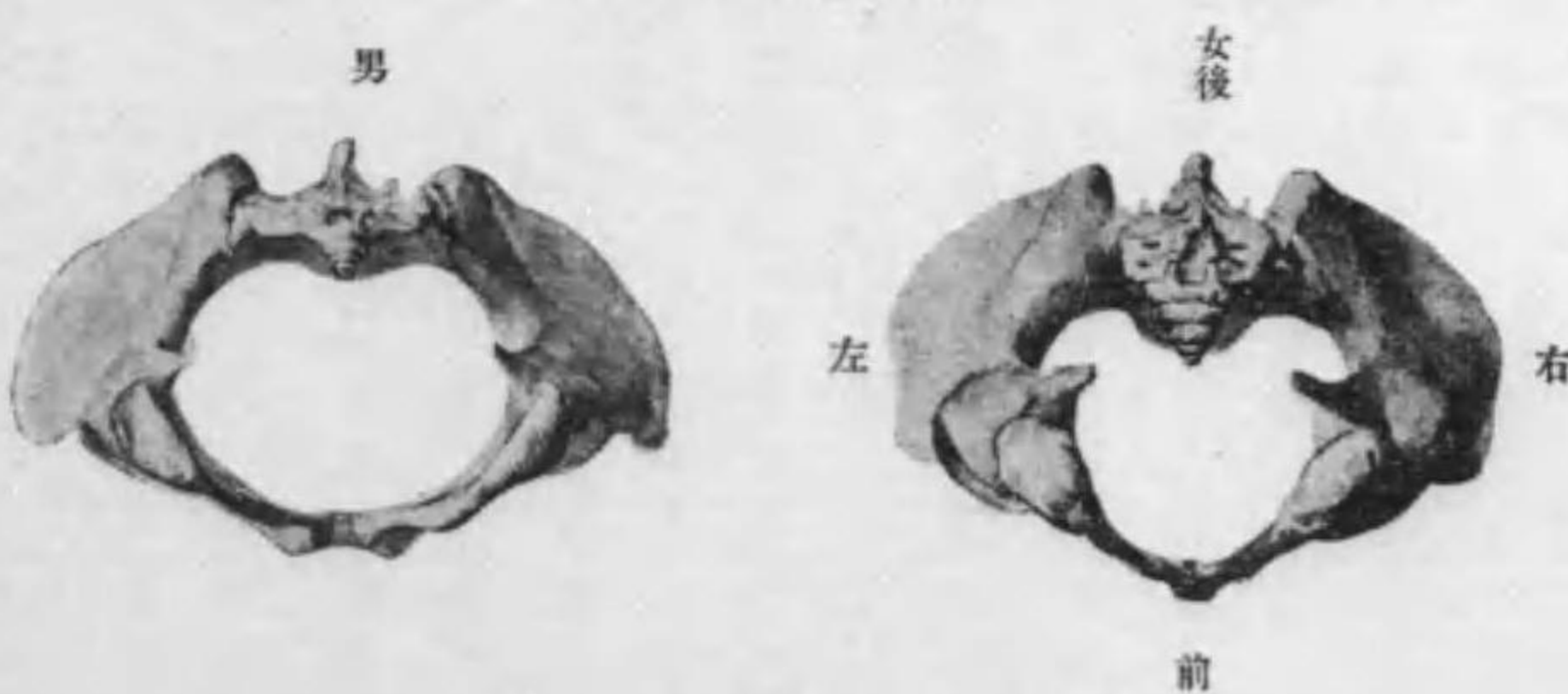
(乙)部分的の差異は 女子骨盤に於ては、一、薦骨廣くして短く、薦骨岬は男子の如く突出せず、二、骨盤入口部はより廣く、其形第四百四十九圖の如く橢圓形にして男子の如く心臟形ならず、三、骨盤出口部もより廣くして、男子の如く狹隘ならざること、第五百十圖に示すが如し、四、恥骨弓は男子のそれより大凡二十乃至二十五度廣く（第五百十一圖を見よ）、五、左右の髀臼著しく相隔り稍々前方に向ふ（第五百十一圖を見よ）。

以上の如く小骨盤腔は複雑なる形狀及び大きさを有するのみならず、脊柱に對して一定の傾斜（即ち直立位に於て後上方より前下方に傾く）をなす、而も是等の關係は分娩と重大なる關係を有するを以て殊に其形狀及び大きさを熟知することは極めて必要なり、而

圖九十四百第 較比の部口入盤骨女男



圖十五百第 較比の部口出盤骨女男



圖一十五百第 較比の弓骨恥女男

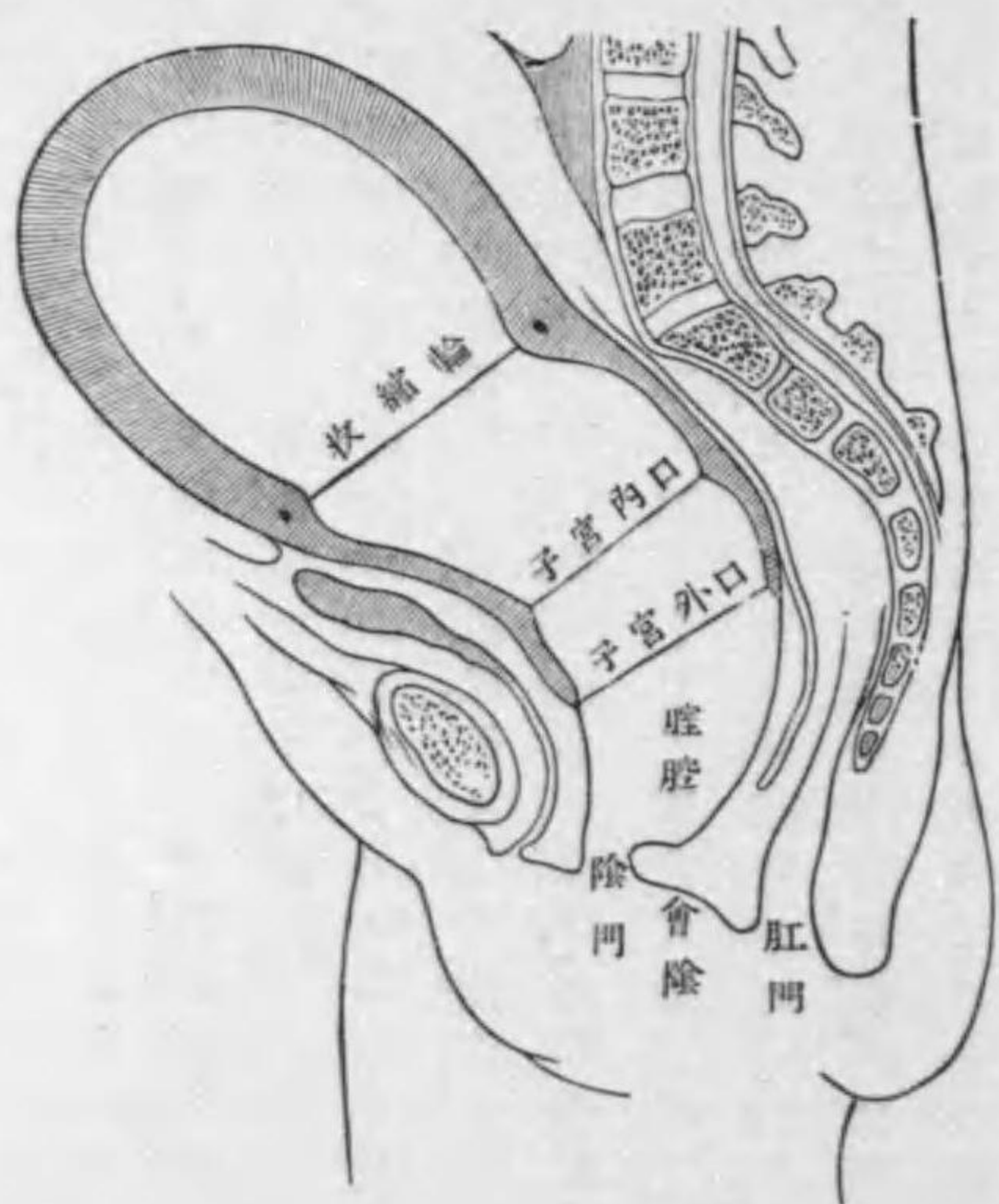


して其正規的の形状及び大きさは上記の如くなれどもこれ等の数は皆骨盤の骨格より得たる數にて極めて正確なれども實地に於て生體を取扱ふ場合には直接の用をなさず故に吾人は止むを得ず既述の如き方法によりて内及び外骨盤測定をなして以て間接に眞の骨盤腔の形状及び大きさを推定するに止むるなり。

第二節 軟部産道

軟部産道の 擴開

圖二十五百第 圖の道産部軟



第三章 産道

軟部産道とは子宮腔に始まり頸管腔腔を経て陰門乃至會陰に終る總て軟部組織より成る腔管にして分娩時に胎兒及び其附屬物の通過する路を云ふ(第百五十二圖を見よ)。軟部産道の擴開は次に述ぶる如く娩出力及び胎兒の下降によるものにして就中子宮口及び頸管

は主として卵胞により伸展擴張せられ腔腔及び陰門は胎兒の先進部により擴張さる、従うて若し娩出力に異常あるか又は胎兒の位置に異常ありために卵胞の形成又は胎兒先進部の下降に異常を來す時は軟部産道の擴張不充分にして分娩の滯滞を來すか又はあまり急劇にして大なる損傷を來すに到る。

今子宮口及び頸管の擴張に就て考ふるに、子宮壁は其體部殊に底部に於て筋組織最もよく發育して厚く下子宮部及び頸管部は之れに反す、今分娩開始し子宮壁收縮して陣痛來るや其發作時に於ては體部は強く收縮し従うて壁の厚さ増加し胎兒を強く下方に向ふて壓迫す其結果として下子宮部は寧ろ壓伸されて其壁菲薄となる、即ち陣痛發作時に於ける子宮壁は其部位によりて其厚さの増加する所と減弱する所とを生じ其境界部は腹壁外より一つの淺き溝として觸知し罕れに目撃することを得ることあり、これを收縮輪と云ひ普通子宮内口の上方約一乃至二種の所にあり、下子宮部壁の強く伸展され菲薄となる程益々明瞭となり、且つ其部位上昇し恥骨縫合上縁上一手掌横徑以上に存する場合には下子宮部が過度に伸展されしを意味するものにて子宮壁破裂の危険切迫せることを豫知するの助けとなる。

收縮輪

軟部産道の損傷

軟部産道の損傷 成熟胎兒の頭部の大きさと小骨盤腔の大きさととは殆んど相等し従うて分娩時に上記軟部産道壁は兒頭と骨盤壁との間に挟まれ強く壓迫されて容易に損

傷を來すものにて分娩後に於ける軟部産道は常に其全徑路を通じて一つの大きな創面と考ふることを得従うて若し細菌の侵入せんか忽ちに全面に傳播して恐るべき産褥熱を起し得るなり、これ分娩時は勿論産褥時に於て嚴重なる消毒法を行ふの必要なる所以なり。

第四章 娩出力(又は排出力、産出力とも云ふ)

娩出力 とは胎兒及び其附屬物を娩出せしむる自然の力にして、子宮筋肉の收縮即ち陣痛と、腹壁諸筋及び横隔膜の收縮即ち腹壓とより成る。

第一節 陣痛

陣痛 とは分娩時、定期的に反覆し來る子宮筋肉の收縮にして、殆んど常に疼痛を伴ふものを謂ふ。

効用 通常分娩を開始しこれを促進せしむ、即ち胎兒及び子宮の位置を正當に保ちつ

つ主として軟部産道、殊に子宮口及び頸管の擴張を司り、胎兒の下降を助く。

種類 次の數種を區別す。
一、妊娠時陣痛 妊娠中に不定期性に來る不規則性子宮收縮を云ひ、分娩とは關係なく稀なり。

定義

定義

効用

種類

二、前驅又は前陣痛、分娩豫定日の近くに於て来る不規則性子宮收縮にして、時に續て次に述ぶる分娩時陣痛に移行して以て分娩を開始することあれども、多くは早晩消失し眞の分娩は其數日後に来る従うて分娩とは直接の關係を有せざれども近き時日中に分娩の開始されるを豫告(前以て知らせるものなり)。

三、分娩時陣痛、分娩時に來る陣痛にして次に述ぶる特性を有し分娩の時期により次の四種を細別す。

(イ) 準備又は開口陣痛、分娩第一期に來るものを云ひ子宮口及び頸管を擴張する主動力なり。

(ロ) 排出又は娩出陣痛、分娩第二期に來るものを云ひ胎兒壓出の助けをなす。

(ハ) 努責又は戰慄陣痛、排出陣痛に屬するものにして兒頭が將に陰門を通過せんとするや陣痛及び腹壓其極度に達したために産婦の努責其絶頂にある場合の陣痛を云ふ。

(ニ) 後産期陣痛、分娩第三期に來るものを云ひ後産排出に與る。

四、後陣痛、産褥の初期に來るものにして時日を経過するに従うて不規則性の度を増し頻度及び強度を減退す産褥子宮の復舊機能を補助す。

特性

一、分娩時に於ける子宮筋肉の定期性收縮なること而して其收縮する時は子宮は其幅

を減じて細長くなり従うて子宮底は少しく高くなり固き抵抗として觸れ且つ殆んど常に疼痛を伴ふ。

二、而も其子宮收縮は突然に一時的ならずして漸次に強く收縮しこの期間を増進期と云ふ一定の極度に達するや其状態にて一定時間經過しこの期間を極期と云ふ次で

收縮が衰へこの期間を減退期と云ふて收縮以前の状態に戻り以上三期間を陣痛發作期間又は單に陣痛發作と云ふその状態にて一定時間經過せる後この期間を陣痛間歇(又は休歇)期間又は單に陣痛間歇と云ふ再び以上の發作及び間歇を繰返す即ち陣痛は陣痛發作と陣痛間歇とより成るものなり。

三、陣痛は不隨意的に起るものなれども亦精神作用外來の刺激によりこれを強弱せしむることを得例へば驚愕憤怒はこれを減弱せしめ子宮の摩擦又は罨法はこれを増

強す。

持續時間、は分娩の時期及び個人的差異により一定せざれども大凡次の如し。

陣痛發作の全持續は平均六十秒にして極期最も長く増進期及び減退期の和より大なり、間歇の全持續は分娩の初期には十乃至十五分なるも分娩進むに従うて短縮し遂には三十乃至六十秒となる。

持續時間

陣痛發作

陣痛間歇

第二節 腹 壓

腹圧は胎児排出の主動力にして分娩第二期に到りて初めて起る、腹壁諸筋及び横隔膜の緊張及び收縮による、陣痛と異り産婦の意志により増減し得るものなれども兒頭の娩出の直前には不随意的となり強く努責し既述の努責陣痛となる。かく腹圧の強弱は分娩殊に胎児排出と大なる關係を有するを以て左に其強弱法を述べし。

腹圧を強むる法

- (甲) 腹圧を強むるには、
 - (イ) 産婦の全身的元氣を高め且つ膀胱及び直腸の空虚を謀り、
 - (ロ) 適當なる産位即ち下肢を股及び膝關節にて軽く屈曲し、足趾を床上に支へ、兩手に固定物を握らしめ、
 - (ハ) 陣痛發作時には充分に努責せしめ、間歇時には休息せしむ。
- (乙) 腹圧を弱むるには、
 - (イ) 側臥位を取らしめ、
 - (ロ) 陣痛發作時に口を大きく開かせ且つ「あー」と高聲を發せしむ。

腹圧を弱むる法

第五章 正規分娩の經過

分娩は陣痛により先づ子宮口及び頸管が擴張されて胎兒の通路を開き、次で腹壓加はりて胎兒を娩出し、少時の後胎兒附屬物を排出するを以て正規の經過となし、全く連續せる一つの生理的現象なるが、これを大凡次の四期に區分することを得。

前驅期

分娩の前驅をなす期間にして、時に全くこの時期なきことあり、この期は分娩豫定日の數日又は十數日前より極めて不規則なる前驅陣痛あり、子宮分泌多少増し、胎動は寧ろ靜かになり、次の如き内診所見ある期間を云ふ。

- (甲) 初産婦にありては、(第百五十三及び百五十四圖を見よ) 圖に示す如く子宮腔部既に消失し、而も子宮外口は全く閉鎖するか又は僅かに開き兒頭は骨盤入口に進入し固定す。
- (乙) 經産婦にありては、(第百五十五圖を見よ) 圖に示すが如く子宮腔部尙ほ明に存在し、而も子宮口及び頸管は既に著しく擴張し兒頭は骨盤入口上に移動す。

圖三十五百第

す示を期口開焼分の婦産初

開く強管頸し定固入嵌に腔盤骨小は頭兒
みのるせ大開にか僅は口子宮外も而し大



分娩第一期又は開口或は準備期

本期は規則正しき準備又は開口陣痛の反覆に始まり子宮口の完全に擴張する(これを全開大と云ひ其直徑約十乃至十二釐なり)までの期間を云ふ。

分娩開始の
徴候

前羊水

後羊水

卵胞

第三編 正規分娩

準備陣痛開始し、時と共に其強さ及び回数を増しつつ反復到來するや、胎兒の下降すると同時に子宮口は漸次擴大したために其附近の卵膜は子宮壁より剝離し出血したために血液を混ぜる粘液を排出するに到る、これを俗に「印があつた」と云ひ子宮口開大即ち分娩の初徴にして子宮口開大規則正しき陣痛發作及び次に述ぶる卵胞形成の四點は分娩開始を知る貴重なる徴候なり。

圖四十五百第

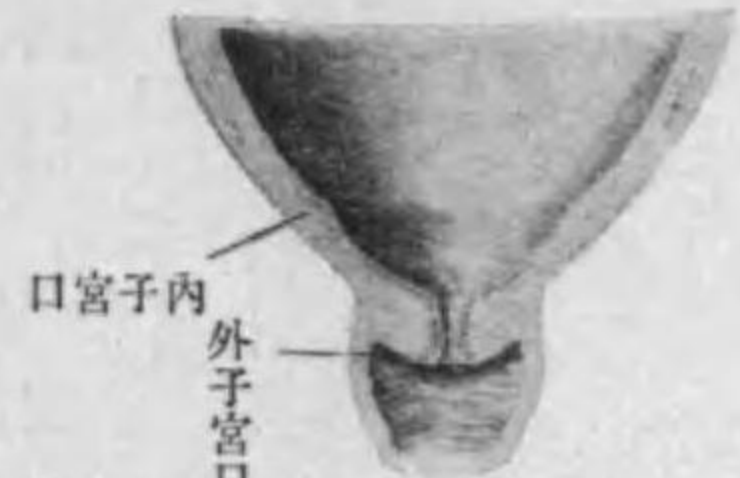
子宮の初期分娩の經産初示す状況を部管頭及び部腫外も而し失消部腫子宮すぜ大開だ未子宮



子宮子内 外子宮口

圖五十五百第

頸るけに初期分娩の經産初示す状況を子宮及び部管外し存在は向部腫子宮す開多子宮



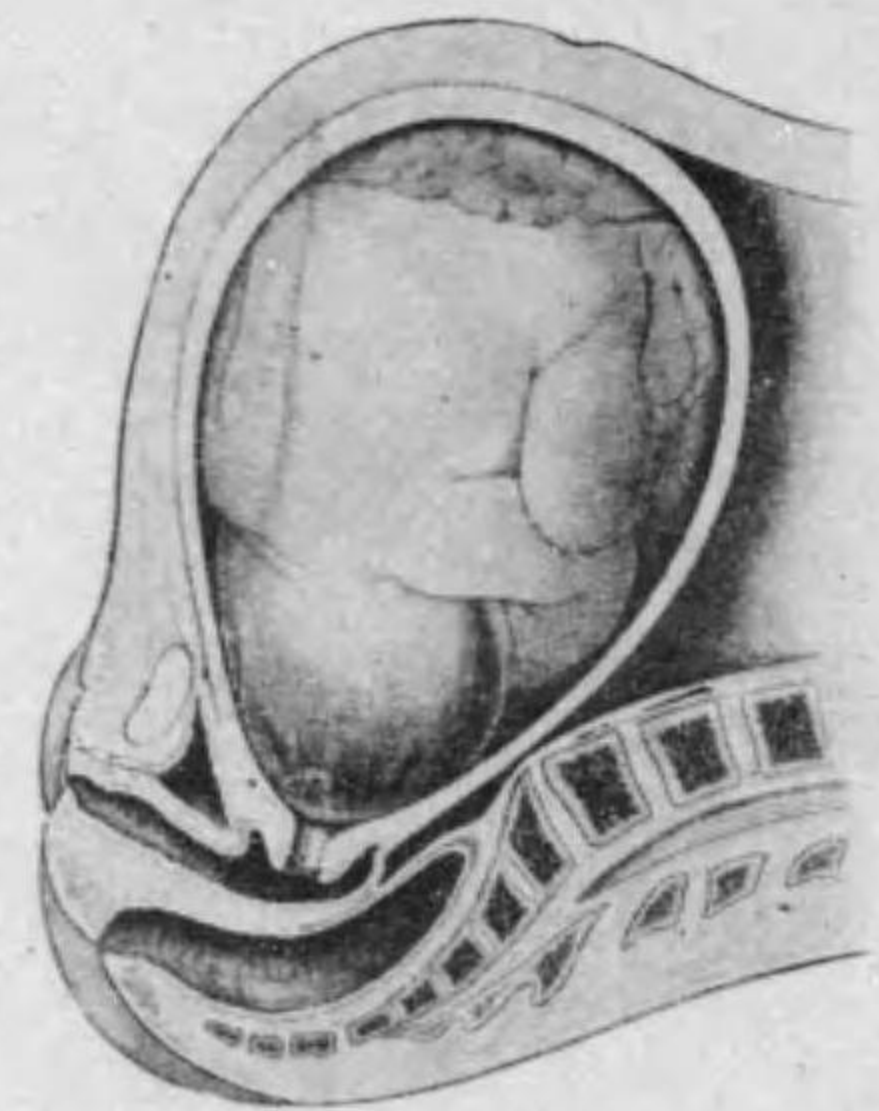
子宮子内 外子宮口

かく卵膜が剝離さるるや以後陣痛發作毎に其中に羊水の一部これを前又は第一羊水と云ひこれに對し他の大部分の羊水を後又は第二羊水と云ふ、壓入されたために剝離せる卵膜は胞狀に膨隆して卵胞或は胎胞なるものを形成す(第百五十六圖を見よ)而も其初めに於ては胎兒の下向部が尙ば未だ充分に骨盤腔内に進入固定せず従うて下向部と子宮壁との間に充分なる間隙あり、ために前及び後羊水間の交通充分なるために陣痛發作時には卵胞緊張するも間歇時には子宮壁の弛緩すると共に前羊水は再び上方に還流するを以て卵胞弛緩す、かく陣痛發作及び間歇毎に以上のことを繰返

二二八

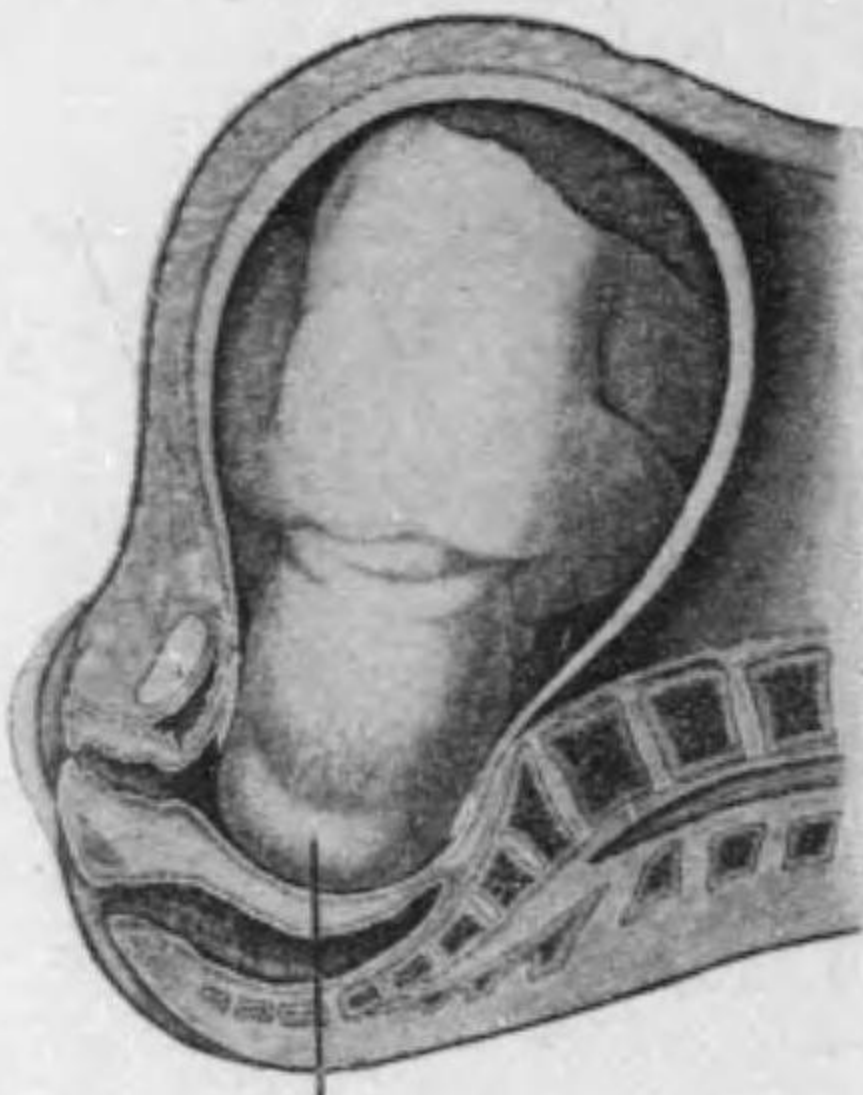
圖六十五百第

す示なめ初の成形卵胞にて初期の期口開



圖七十五百第

し大開全ごん殆口子宮にて期末の期口開す示な態狀るとんせ綻破にさ將卵胞



卵胞

し傍ら漸次卵胞の大きさと緊張とを増し以て子宮口乃至頸管を擴開す。かくして子宮口が其直徑五種位まで擴開せらるる頃に到れば胎兒の下向部は骨盤腔内に深く固く進入して前後兩羊水間の交通を殆んど全く絶つために卵胞は陣痛間歇時に於ても最早弛緩することなく絶えず緊張し腔腔内に向うて膨隆するに到る(第百五十七圖を見よ)。更に一定時間陣痛が規則的に反覆するや、子宮口は遂に全開大し其直徑十乃至十二種となり、子宮口縁は極めて菲薄となり強く上方に引退し觸知し得ざるに到り、卵胞は遂に破裂す、これを破水又は卵胞破裂と云ひ、茲に分娩第一期の終り第二期の初めを告ぐ。

二二九

第五章 正規分娩の經過

破水

圖八十五百第

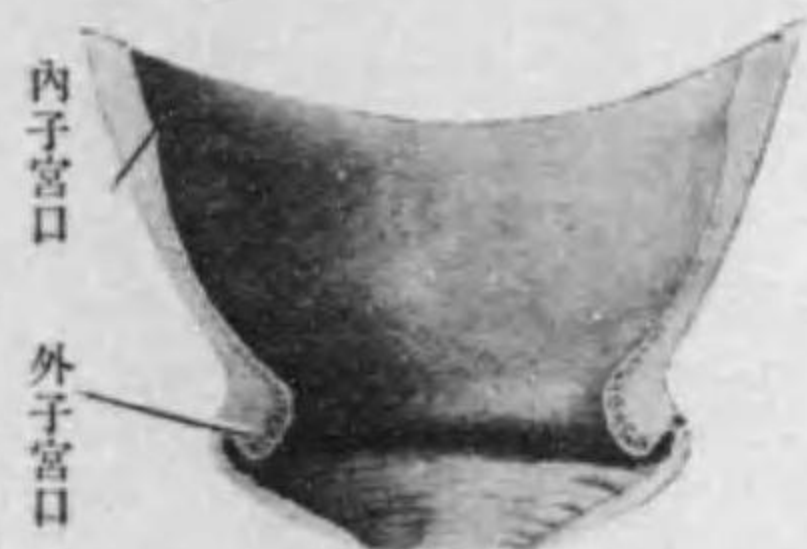
初産婦の期開の末期に於ける状況を示す子宮及び部管頭完全分娩外子及び管頭が僅に開き外子に膜が残る状態



前羊水量

圖九十五百第

初産婦の期開の末期に於ける状況を示す子宮及び部管頭完全分娩外子及び管頭が僅に開き外子に膜が残る状態



この時期に於ける頸管及び子宮口の状態の初産婦と経産婦とによる差異は第百五十八圖と第百五十九圖とを比較法視すべし。

此期間に於ける産婦の一般状態は陣痛が増強するに従うて産婦は漸次苦痛を増し不穏となり分娩に對する恐怖を起し軽度の悪寒を覺え時に悪心嘔吐を催すに到り殊に初産婦に於ては破水に際し腔内破裂の感あると同時に多量の羊水流出したために非常なる不安又は興奮を來すことがあるを以てよくこれを慰藉せざるべからず。

前羊水量 正規破水時流出する前羊水量は普通二十乃至三十瓦にして而も一時的に後羊水の漏れ出すことなし従うてそれ以上多量に流出するか又は破水後絶えず漏れ出す場合は多くは胎児の下向部が開大せる子宮口に適合せずして前後両羊水がよく交通するためなり若しこれを放置せんか全部の羊水が胎児娩出前に

羊水の早漏

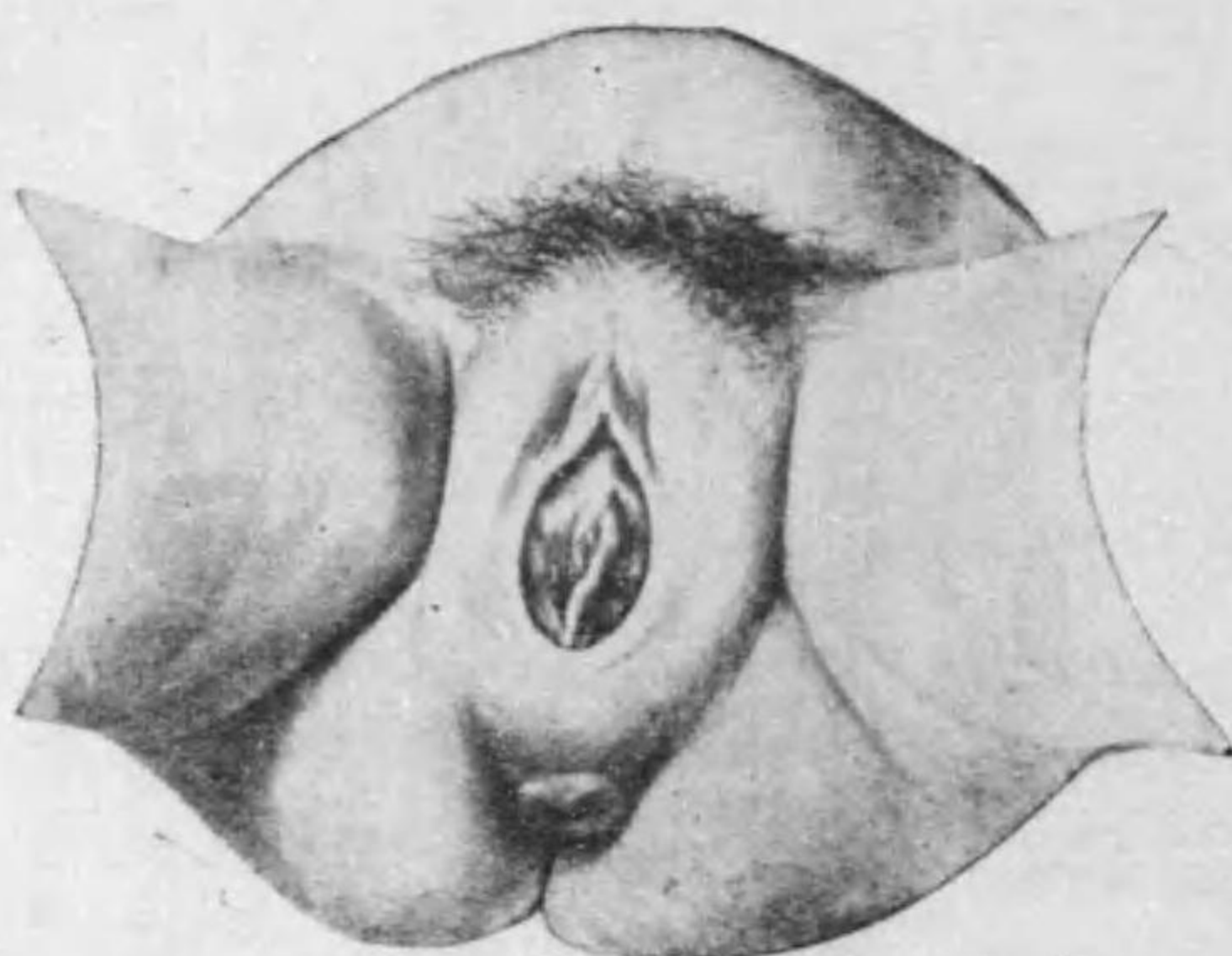
流出してこれを羊水の早漏と云ふ非常なる分娩困難を來すを以て早く醫治を乞はざるべからず。

分娩第二期又は排出或は娩出期

本期は子宮口の全開大(即ち正規破水に始まり胎児の娩出するまでの期間を云ふ。

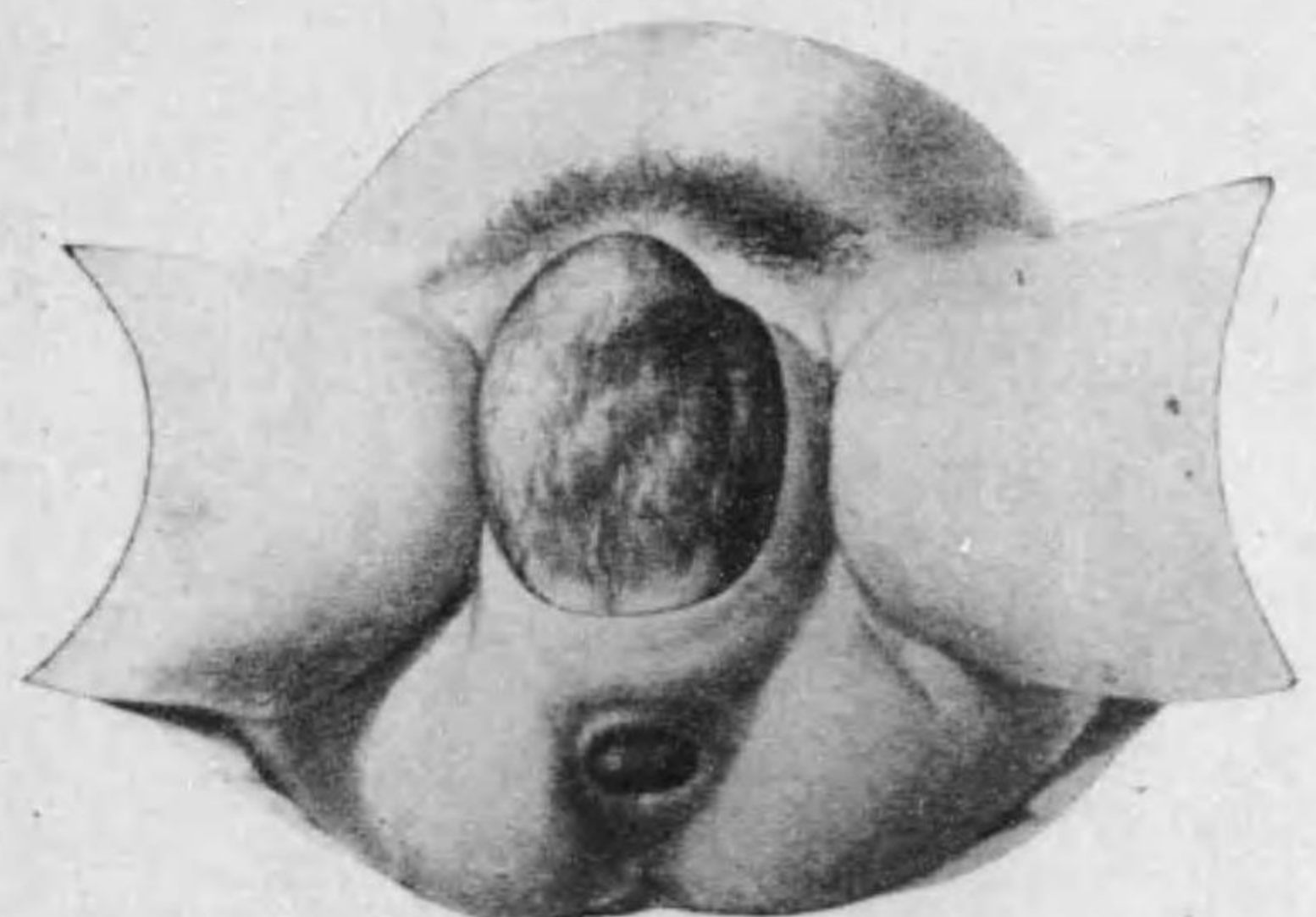
圖十六百第

胎頭通過の状態を示す



子宮口全開大し正規破水来るや兒の下向部多くは兒頭なり以下兒頭と記述する所は兒の下向部と心得べしは骨盤腔内に深く進入して以て軟部産道を直接に壓迫するため反射的に腹圧起りて排出陣痛は益々強く且つ頻繁となり其結果兒頭は骨盤腔内に後に述ぶ廻轉をなしつつ漸次骨盤出口に向うて壓下され兒頭の下降するに従うて陣痛は其強さと發作回数とを増し産婦の苦悶は益々増加す。

峽部に下降するに到れば會陰は兒頭により漸次強く伸展され球状に膨隆し、肛門も開きて其粘膜外翻し來り強き壓迫のため便意を催し又場合によりては糞便を不隨意的に排出して消毒を不完全ならしむることありこれ分娩前に便を充分に排出し置く必要ある一所以なり。それより暫時にして陣痛發作時に頭蓋の一部が陰裂間に現はれ陣痛間歇時に再び腔腔内に引退し隠るるに到る。この状態を兒頭の排露と云ふ(第百六十圖を見よ)。



第百六十圖

後頭位露露の状況を示す

此時期になれば陣痛及び腹壓は其極度に達して努責又は戰慄陣痛となり産婦の苦痛最も甚だしくために不隨意的に努責し時に潮紅し發汗著しく不隨意的に努責し時に全身又は腓腸筋部の痙攣を起すことあり。既にこの時になれば兒頭は最早陣痛間歇時に於ても陰裂外に露出するに到る。この状態を兒頭の撥露と云ひ(第百六十一圖を見よ)陰唇及び會陰の伸展緊張其極に達し會陰破裂を來し易く産婦は劇痛のため啼泣し時に失神することさへあり。

然れどもこれ多くは一瞬時にて兒頭は次の陣痛發作又は撥露に次で娩出し續いて後續部容易に娩出し同時に後羊水は多少の血液を混じて流出し産兒は母體の股間に第一聲を揚げ臍帯は其後尙ほ暫く搏動し腔腔を通じて胎盤に連絡し子宮は著しく縮小したために子宮底は著しく下降して臍窩の高さこれを臍高と云ふ又は少しく其上方にあり産婦は同時に一種爽快の感あり兩三回長大息し陣痛も一時休止し多くは續いて睡眠に陥る。

分娩第三期又は後産期

本期は胎兒娩出直後より後産即ち胎盤卵膜及び臍帯の全く排出し終るまでの期間を云ふ。

後産の排出は稀れに胎兒娩出と同時に進行することあるも普通は胎兒娩出後十乃至十五分を経て後産期陣痛到來して以て胎盤の剝離を助け普通二十乃至三十分にして全く子宮壁より剝離し次で陣痛腹壓腔壁の收縮及び胎盤自己の重量により外界に壓出さる。

其際若し胎兒面を先きして排出されんかこれをシュルツ氏式胎盤娩出と云ひ之れに反し母體面を先きにして排出されんかこれをダンカン氏式胎盤娩出と云ふ(第百六十二圖及び第百六十三圖を見よ)實地に於ては其前の場合の方多く見らる。

シュルツ氏式
ダンカン氏式

正規的出血量

かく胎盤が子宮壁より剝離する際には必ず子宮壁との間の血管が破断するため常に出血を伴ふものにして正規分娩に於ける全出血量は本邦婦人に於ては平均約二百五十珦なり。

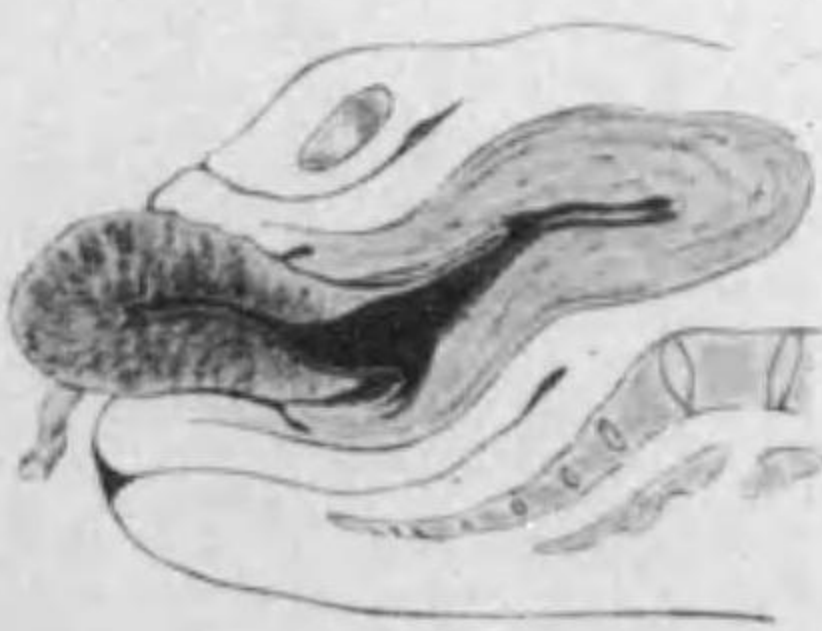
圖二十六百第

示す状の出娩盤胎式氏ンカンダ



圖三十六百第

示す状の出娩盤胎式氏ユツルユシ



縮佳良ならんか破裂血管は閉鎖し血栓を生じ全く止血して茲に分娩を終る。

第六章 正規分娩の持続時間

一般に分娩の持続時間は主として 一、娩出力の強さ 二、産道抵抗の大小即ち骨盤腔の廣さ 三、初産なるか経産なるかに關係するものにして本邦婦人の正規分娩に要す

る時間は大凡次の如し。

- 一、分娩第一期は 初産婦に於ては十乃至十二時間、経産婦に於ては四乃至六時間。
 - 二、分娩第二期は 初産婦に於ては二乃至三時間、経産婦に於ては一乃至一時間半。
 - 三、分娩第三期は 初産婦に於ては十五乃至三十分、経産婦に於ては十一乃至二十分。
- 即ち第一期最も長く、第二期これに次ぎ、第三期最も短く、初産婦に於て長時間を要し殊に高年(三十歳以上)及び若年(十八歳以下)の初産婦に於て著し。

第七章 分娩の母體及び胎兒に及ぼす影響

第一節 分娩の母體に及ぼす影響

分娩の母體に及ぼす影響は種々なれども之を要するに 一、胎兒及び其附屬物の娩出 二、及びそれに對する努力 の二因による左に其主なるものを擧ぐべし。

(甲)胎兒及び其附屬物の娩出より受くる影響としては

- 一、産道殊に軟部産道の損傷、ために分娩時は勿論其後暫くの間出血及び疼痛あり、不幸傳染せんか産褥熱の原因をなす。
- 二、體重減少す。其度は一定せざれども大凡母體體重一珦につき約百瓦内外の割合なり。

三、血液を損失す。其量亦一定せず、大凡二百五十珣を以て正規的量となす。
 四、其他全身的には、(イ)悪寒又は悪寒戰慄あることあり、これ血液損失分娩時の冷却精神の感動等によるものにして、發熱を伴ふことなく従うて憂ふるに足らず、(ロ)睡眠状態となる、これ分娩時の過度の苦痛一時にとれ、疲勞著しく、且つ精神的安心を得るために來る。

(乙)胎兒及び其附屬物排出に對する努力即ち娩出作用より受くる影響としては、過度の全身的肉體的は勿論精神的勞働の結果として、

- 一、體温は攝氏一乃至四分位上昇し、
- 二、脈搏は頻數となり緊張増し、
- 三、呼吸も迅速となる。
- 四、其他全身的には、(イ)食欲減退し、(ロ)睡眠困難となり、(ハ)陣痛増強するに従うて疼痛を増し強く努責し、其結果漸次疲勞し、甚だしき場合には悪心嘔吐不安興奮痙攣等を來す。

第二節 分娩の胎兒に及ぼす影響

分娩により胎兒の受くる主なる影響次の如し。

一、兒心音は陣痛發作時に緩徐となり、間歇時に再び元に戻る、この關係は破水後に於

骨重疊

應形機能

産瘤

て著明なり、これ子宮壁の收縮のため胎盤血行障害さるゝことが其主なる原因なり。
 二、胎動は分娩の進むに従うて減弱し、
 三、頭部變形す、兒頭は産道内に於て最も強き抵抗を被むる部分なり(廣くして大なればなり)而も兒頭を形成する各頭蓋骨の連絡は既述の如く緩潤なるを以て強き抵抗に



圖四十六百第
 圖の疊重骨の骨蓋頭
 頂額側右が縁骨頂額側左
 頂額側右、し層重に下の縁骨
 す示なるぞ生の瘤産に骨

遭へば相隣れる頭蓋骨は其邊緣互に相層重してこれを頭蓋骨の重疊と云ふ(第六百六十四圖を見よ)其容積を減じて狭き産道内の通過を容易ならしめんとす、これを頭蓋の働態又は應形機能或は累積作用と云ひ、兒頭過大なるか又は産道狹隘なるかにて

兒頭娩出の困難なる程益々著明となる。
 而して其重疊の仕方 は母體の後方に在りてこれを後在すると云ふ強く抵抗を受くる骨縁が母體の前方に在りてこれを前在すると云ふ比較的抵抗を受くること、跂き骨縁の下に層重す、従うて兒頭の産道内を通過する状態即ち胎兒の産道内に於ける位置によりて殆んど一定し、診断の一助となるものなり、然れども兒頭娩出して抵抗除去さるるや漸次復舊し、分娩後七乃至八日に於て全く原形に復するものなり。
 四、産瘤の形成、兒頭が産道内に於て強き抵抗を受くるや上記の働態機能により其容

面腫

頭血腫

第四編 正規分娩

積を縮小して抵抗を減じ以て産道を通過せんと努む、而も尙ほ不十分ならんか兒頭は産道内に於て長き間強き壓迫を被むり、ために其最も強く壓迫さるる部位の皮下結締組織内の血行障害を來したために鬱血を起し更に進んで血性漿液性浸潤を起したために其部位が漸次腫脹状に腫脹するに到る、これを産瘤と云ひ顔面部に生せる場合には特にこれを面瘤と云ふ、其生ずる部位は産道内に於ける胎兒の位置により殆んど一定し、且つ初めより死亡せる胎兒には生ずることなし、産道の抵抗更に強度ならんか途には頭蓋骨の骨膜下血管が破裂しては頭蓋骨の骨膜下血腫又は頭蓋血腫(第百



圖五十六百第
腫血頭るぜ生に骨頂額副兩右左
(藏所者著)

出血して骨膜下に血腫を生じ腫瘤を形成するに到る、これを頭血腫又は頭蓋血腫(第百六十五圖を見よ)と云ひ稀れに見るものなり、其産瘤との鑑別は初生兒編を参照すべし。

第八章 産科的消毒法

第一節 消毒法の必要なる理由

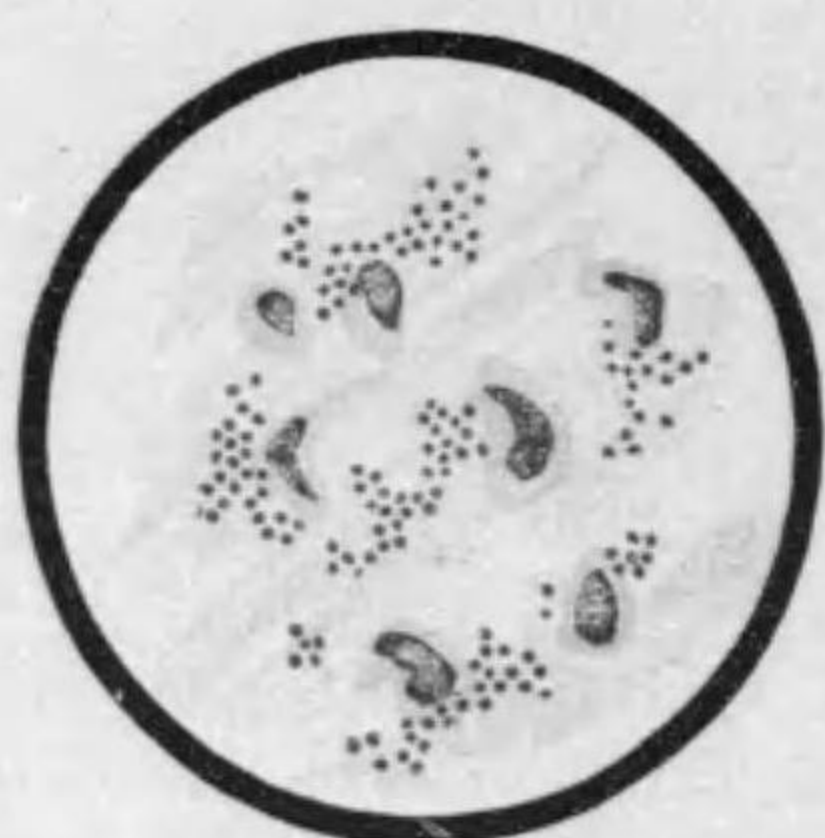
病原菌

分娩後即ち産褥時に強き發熱を來し屢々褥婦とは産褥にある婦人を云ふの生命を奪ふ恐ろしき産褥熱なる疾病は主として連鎖状球菌(第百六十六圖を見よ)葡萄状球菌(第百六十七圖を見よ)稀れに大腸菌淋菌(ちふてり菌等の細菌(これ等を病原菌と云ふ)の傳染繁殖によりて生ずる一種の傳染病なり。

圖六十六百第
菌球状鎖連



圖七十六百第
菌球状葡萄



以上の病原菌殊に連鎖状球菌と葡萄状球菌とは外界の到る所例は術者又は患者の身體殊に手指衣服は勿論室内寝具等に散在し、一定の温度と養分(例ば血液創面よりの分泌液、羊水、其他の不潔なる排泄物)との下には非常によく傳染繁殖して其數を増し、其部分の組織又は臟器を侵蝕破壊すると同時に非常に有害なる毒物を産出し、血行によりて全身に分佈して以て褥婦の全身を著しく障礙するものなり。

今妊娠分娩及び産褥を考ふるに妊娠時には生殖器殊に軟部産道は著しく鬆軟となり、分泌増

炎症
化膿

加し、非常に傷き易くなる。次で分娩時には硬き兒頭と骨盤壁との間に強く壓迫され、又胎盤は子宮壁より剝離するあり、ために軟部産道は一つの大きな創面と變じ、こより多量の分泌物を出して以て上記病原菌の傳染繁殖に好都合の状態となる。他方吾人が妊産婦を處置する場合に使用する器具材料には一つとして上記病原菌の存在せざるものなし、故に若し吾人が次に述ぶる消毒法を嚴重に行はざれば極めて容易にこれ等病原菌が軟部産道の創面に傳染し繁殖して恐るべき産褥熱を起すに到る、而して其部位及び其周囲は發赤腫脹し疼痛あり且つ發熱し(この状態を炎症又は癩衝と云ふ)屢々膿汁を分泌す(これを化膿と云ふ)。

従うて吾人が其職務を完全に行はんとするには先づ第一に次に述ぶる消毒法を熟知しこれを嚴重に實行せざるべからず。

而して其實行法は次の諸點に留意するにあり。

消毒法
防腐法

- 一、術者自身の身體及び衣服を常に清淨に保つこと。
- 二、患者の身體、衣服及び寢具を清潔にすること、殊に
- 三、患者の生殖器及び附近に直接に接觸する總ての物體例へば術者の手指、器械、綑帶材料等はこれを次に述ぶる消毒法、滅菌法又は殺菌法とも云ふによりて細菌の全く存在せざる状態即ち無菌の状態に於て使用すること。
- 四、爾後絶えず細菌の傳染を豫防し(これを防腐法と云ふ)既に傳染の疑ひある者はこれを

防腐法
消毒方法

を清潔にすること(これを制腐法と云ふ)。

而して其消毒方法には、(甲)高熱を以てする理學的消毒法と、(乙)消毒薬を以てする化學的消毒法とあり、高熱を利用する場合は更に一煮沸消毒する場合、二燒灼消毒する場合、三蒸氣消毒する場合、四高熱空氣を以てする場合とを區別し、消毒薬としては昇汞、リゾール、リゾホルム、クレゾール、石鹼、石炭酸、アルコール等を使用する。

昇汞は猛毒藥なるを以て注意して使用すべし、普通フクシンを以て着色して他の溶液と誤らざる様にし、且つ消毒力を強むるために少量の食鹽又は鹽酸を加へ、金屬製の容器を避く、これ容易に腐蝕されるればなり、普通〇二乃至〇一%即ち五百乃至千倍の溶液として使用する。

「リゾール」は、クレゾールを石鹼に溶解せるものにして一種不快の臭氣あり、リゾホルムは其臭氣を善化するもの、普通二%即ち五十倍の溶液として使用する。

石炭酸(カルボール)は水又は溫湯を少しづつ加へ攪拌しつゝ溶解す、普通二乃至五%即ち五十乃至二十倍の溶液として使用する。

「アルコール」は五十乃至七十%のものが消毒力最も強く、無水又は純アルコールは消毒力微弱なり。

第二節 手指の消毒法

手指の消毒法は金屬製又は木製器械に於けるが如く高熱又は強き消毒液を使用することを得ざる上に其表面には無數の毛髮、皮脂腺及び汗腺の開口部あるのみならずこれを廓大鏡にて見る時は第百六十八圖示すが如き縦横に走る無數の大小皺襞あり是等の間隙内に無數の細菌潜在し其悉くを死滅せしむる事困難なるを以て常に不完全なるを免れず従うて古來種々なる方法應用されしも皆一つとして完全なるものなし現今にては次に述ぶるフールブルンゲル氏法最も完全とせらる。

フールブルンゲル氏法

第百六十八圖

手の皮膚表面廓大鏡



時に爪床の間にある塵垢を出來得る限り充分に除去したる後清淨なる手術衣を着け、二、石鹼(これは軟石鹼即ち加里石鹼又は綠石鹼を最良とすれども又普通石鹼にてもよし)殺菌せる刷毛(これは長さ十二種、幅五種の大さにて毛のなるべく硬きをよしとす)バキン、棕櫚又は豚毛製等あり及び堪へ得るだけ熱き攝氏五十度内外絶えず流出する殺菌水若しこのなき時は湯を時々交換すべし)を以て手腕殊に指間爪床其他皺襞に富む部位を注意

して丁寧に洗刷すること十乃至十五分にしてなるべく熱き殺菌湯を以て石鹼を悉く洗去し、次で

第百六十九圖

爪の鏡



三、七十乃至八十%アルコールを以て一乃至二分摩擦し、四、微温の〇・一%の昇汞水、二乃至三% (即ち五十乃至三十倍)の石炭酸水、一乃至二% (百乃至五十倍)の「リゾール」又は「リゾホルム」水又は一五%七十倍の石鹼、クレゾール水等の消毒溶液中にて少くとも三分間更に丁寧に洗刷して以て消毒を終る。
注意 以上の方法によるも尙ほ其消毒は絶対的ならざるのみならず全く一時的なるを以て必要あらば時々これを反覆し常になるべく其完全を期すべし、そのためには、

手指消毒に關する注意

豫防的消毒法

一、平素身體殊に手腕の清淨にして無傷なるに心掛け、なるべく傳染性の危険物體例ば種々なる傳染病殊に産褥熱患者又は腐敗化膿せる物體例ば浸軟腐敗兒腐敗羊水膿、或は産褥熱患者の惡露等に接するを避け若しこれ等に接せる時は出來得べくんば四十八時間以内に於ては正規の妊産褥婦を取扱はざる様にすべし、尙ほ平素皮膚の攝生に留意すべし、これを豫防的又は前消毒法と云ふ。
二、一度消毒せる部位はこれを乾燥せしめざる様絶えず消毒薬液を以て潤すべし。
三、一旦消毒せる手指は絶対に他の消毒を行はざる物體に觸るべからず、若しその疑ひ

だに存せんか直に上記消毒法を初めより嚴重に行ひ直すべし而も不充分又は不完全を思はしむる場合には殺菌し無傷なる護手袋又は指囊を利用すべし。

第三節 妊産褥婦生殖器の消毒法

第一項 外陰部及び其附近の消毒法

- 一、患者を仰臥位とし腰下に清潔なる高き枕及び便器を挿入し下肢を股及び膝關節に於て強く屈曲せしめ且つ股間を充分に開かしめ、
- 二、術者は其股間又は右側に坐し、豫め充分に消毒せる手指を以て石鹼及び微温湯或は
- 三、石炭酸石鹼溶液を使用し、外陰部及び附近を脱脂綿又は「ガーゼ」を以て充分に摩擦したる後、
- 三、殺菌水又は二%五十倍石炭酸水或は一%百倍「リゾール」又は「リゾホルム」水の多量を以て石鹼を充分に洗ひ落して消毒を終らば
- 四、其部を殺菌消毒せる「ガーゼ」又は綿を以て拭ひ再び傳染するを避け且つ患者をして其手指を茲に觸れしめざる様に注意す。

第二項 内陰部殊に腔腔消毒法

- 一、先づ上述の方法によりて外陰部及び其附近を消毒したる後術者はその手指を更に消毒し直し、
 - 二、〇・一%又は一%即ち千倍昇汞水又は二%五十倍石炭酸水又は一%百倍「リゾール」水等の多量を滿せる洗水器即ち「イルリガートル」の噴管を左手を以て握り其先端を腔入口に向て徐々に液を流出せしめつつ右手の示及び中指を深く腔腔内に挿入し其全壁を隅なく洗拭すべし、此際特に腔穹窿部の消毒に努むべし、一般に腔腔の消毒は一、強き消毒薬を應用し得ること、二、消毒液を吸収する危険あること、三、露出し明視することの困難なること、四、器械的消毒法を充分に行ひ難きこと等のため常に充分なる結果を得ざること多きを以て常に多量の消毒液を以て充分にこれを行ひ且つ洗滌液は充分に腔腔より流出せしむべし。
- 腔腔洗滌を行ふ場合
- は次の時に限る、然れども若し上記の消毒法を完全に行ひ難き場合には寧ろ行はざるをよしとす。
- 一、内診又は腔式に手術又は其他の操作を行ひたる場合、
 - 二、内診前既に他所に於て又は他人によりて内診されたるか又は膿性或は惡臭を有する分泌物の存する場合。

腔腔洗滌を行ふ場合

第四節 器械の消毒法

第一項 金屬製器械の消毒法

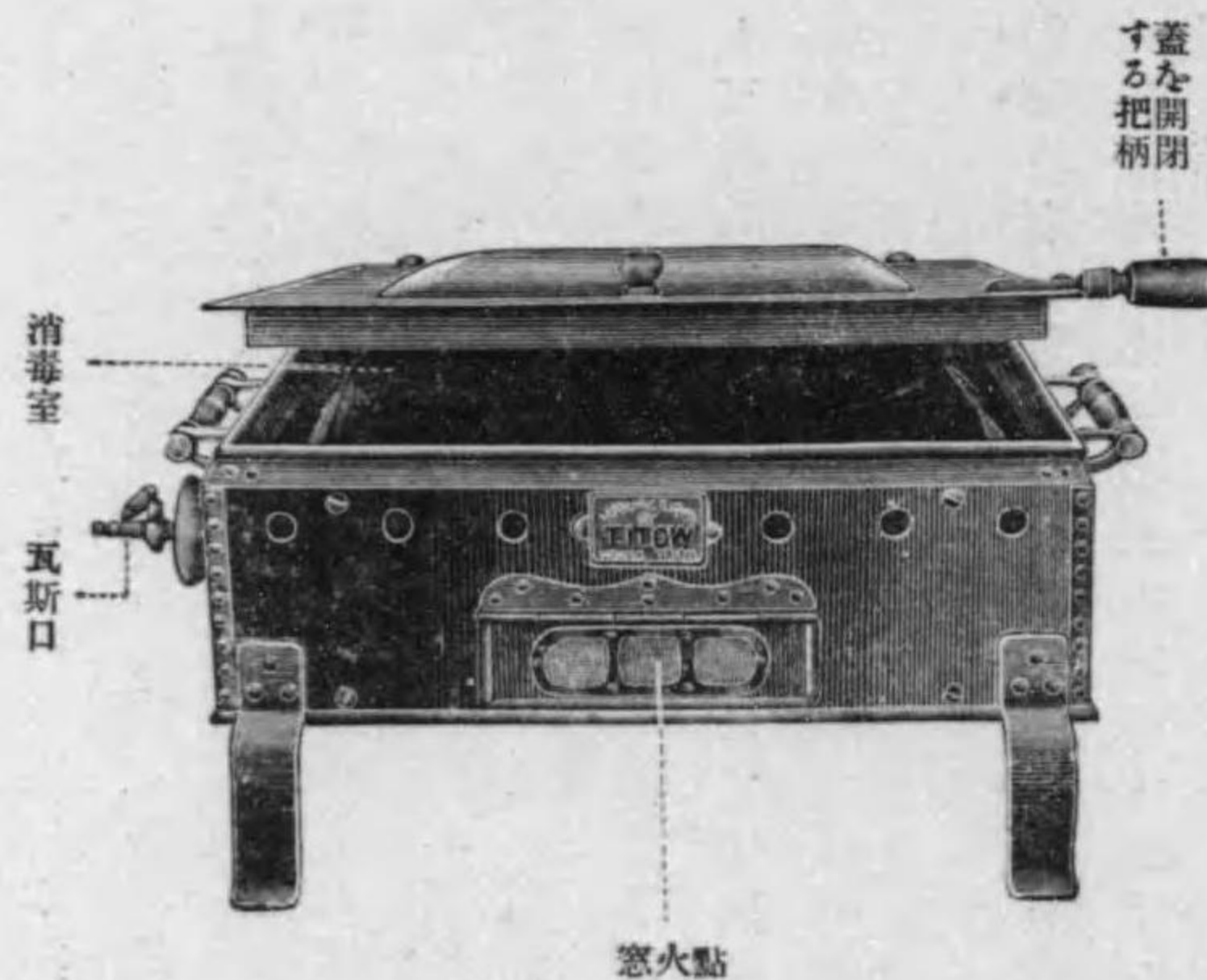
金屬製器械例ば刀、剪刀、カテーター等、は煮沸消毒を最良とす、就中シンメルプッシュ氏煮沸消毒器（第七十圖及び第七十一圖を見よ）によるを至便とすれども、場合によりては鍋釜湯沸の類を代用するも差支へなし。

方法 煮沸消毒器の八分目位まで水又は一乃至二%の曹達（重曹）水を盛り（曹達水を用ふる時は消毒完全なるのみならず、鍋を生ずるを恐少し）これを沸騰せしめたる後、この中に五乃至十五分間留置すべし、但し刀又は其損傷を防ぐために綿を以て包み煮沸すべし、この際消毒器の蓋を密閉し、泡沫の生ぜざる様にすべし、然らざれば液の温度が器の上下によりて差を生じたために消毒の目的を充分に達し得ざることあればなり。かくして冷殺菌水を以て冷却して直ちに使用するか、又は三乃至五%石炭酸水中に貯へ用に臨みてこれを使用す。

坊間販賣する防疫用石炭酸中には鹽酸を含み、ために金屬に錆を生ぜしむるを以て常に消毒用石炭酸を使用すべし。突然に至急消毒を要する場合には、器械をアルコールに浸し、これを引き上げて直ちに點火燃焼すること兩三回なるべし。

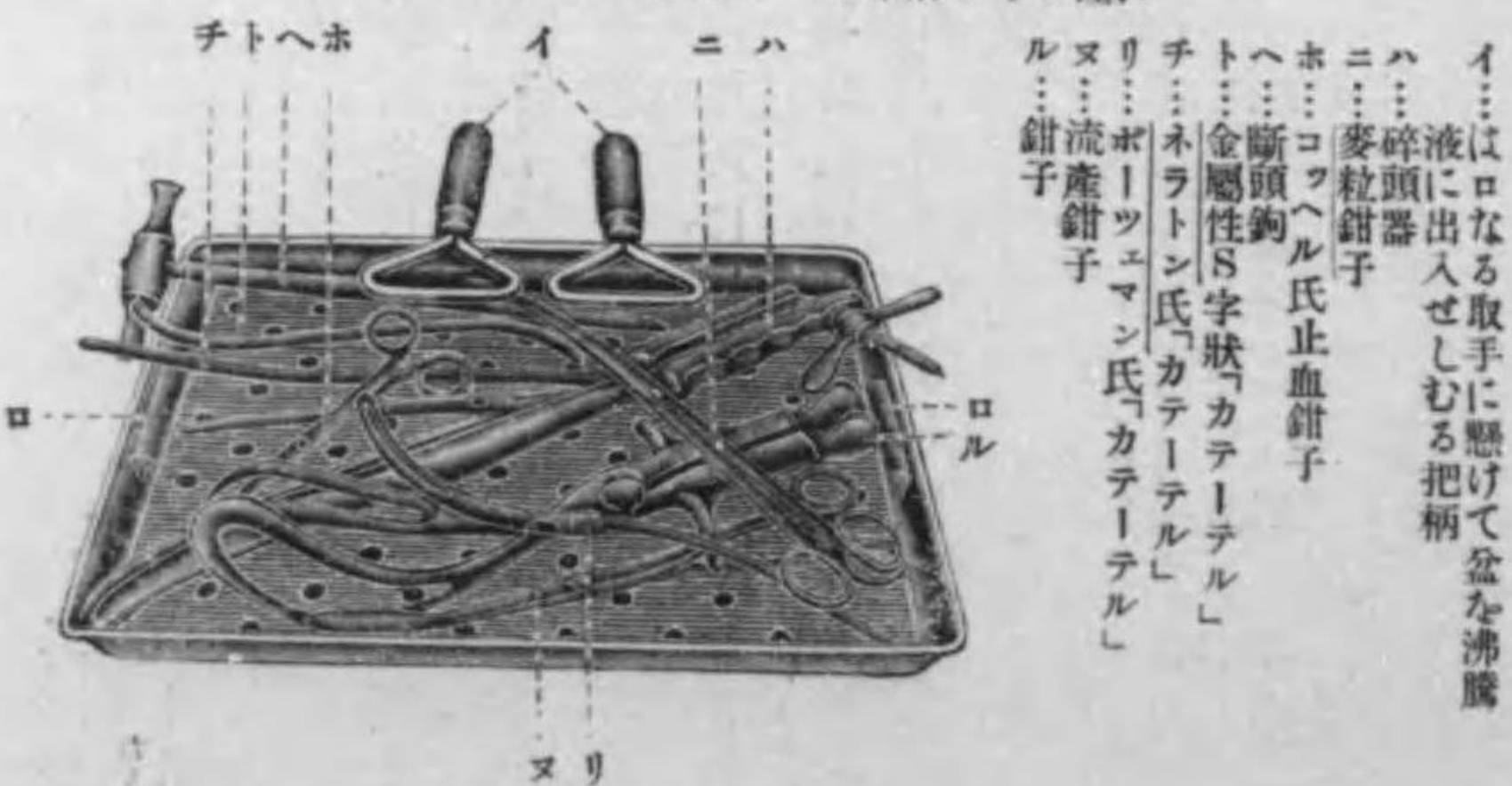
洗水器の消毒法 これも煮沸するを最良とすれども、これを行ひ得ざる場合には、器

圖十七百第
器毒消沸煮氏ユシッブルメンシ



圖一十七百第

中益械器るる入に中液器沸煮圖十七百第は圖
りなるたれ入な械器きべす毒消るな々種に



中に水又は熱湯を盛りて煮沸するか、若しこれを行ひ得ざる場合（硝子製には三%石炭酸水又は一%リゾール水を以て充分に其内外面を洗刷したる後上記消毒溶液中に

三十分以上浸したる後使用する。

第二項 護謨製器械消毒法

五分間位の煮沸消毒を最良とすれども強く其質を損するの缺點あるを以て二三分煮沸後〇・一%又は一%即ち千倍昇汞水、五%石炭酸水又は二%リゾール水中に長く貯へ使用に際し殺菌水にて洗滌して使用する。

護謨手袋消毒法

こと大なるを以てこれを「ガーゼ」に包み蒸氣乾燥消毒を賞用す、この場合には其内面にも蒸氣の流通し得るために其中に綿を緩くつめ若し多数を一時に消毒する場合には各個の間に必ず「ガーゼ」を置くべし、然らざれば熱氣のため互に相膠着して強き損傷を來すべし、又若し消毒後乾燥状態にて使用せんとする場合には消毒前に豫め灼熱殺菌せる滑石末を入れ置くべし、かくせば消毒乾燥せる手指を容易に挿入し得るの便あり。
其他煮沸消毒を行ひ難き器械の消毒法は先づ石鹼と刷毛とを以て丁寧に洗ひたる後千倍の昇汞水、二十倍石炭酸水、五十倍リゾール水等を以て充分に洗拭せる後其中に長く漬浸し貯ふべし。

第五節 繻帶、縫合、結紮材料及び衣服の消毒法

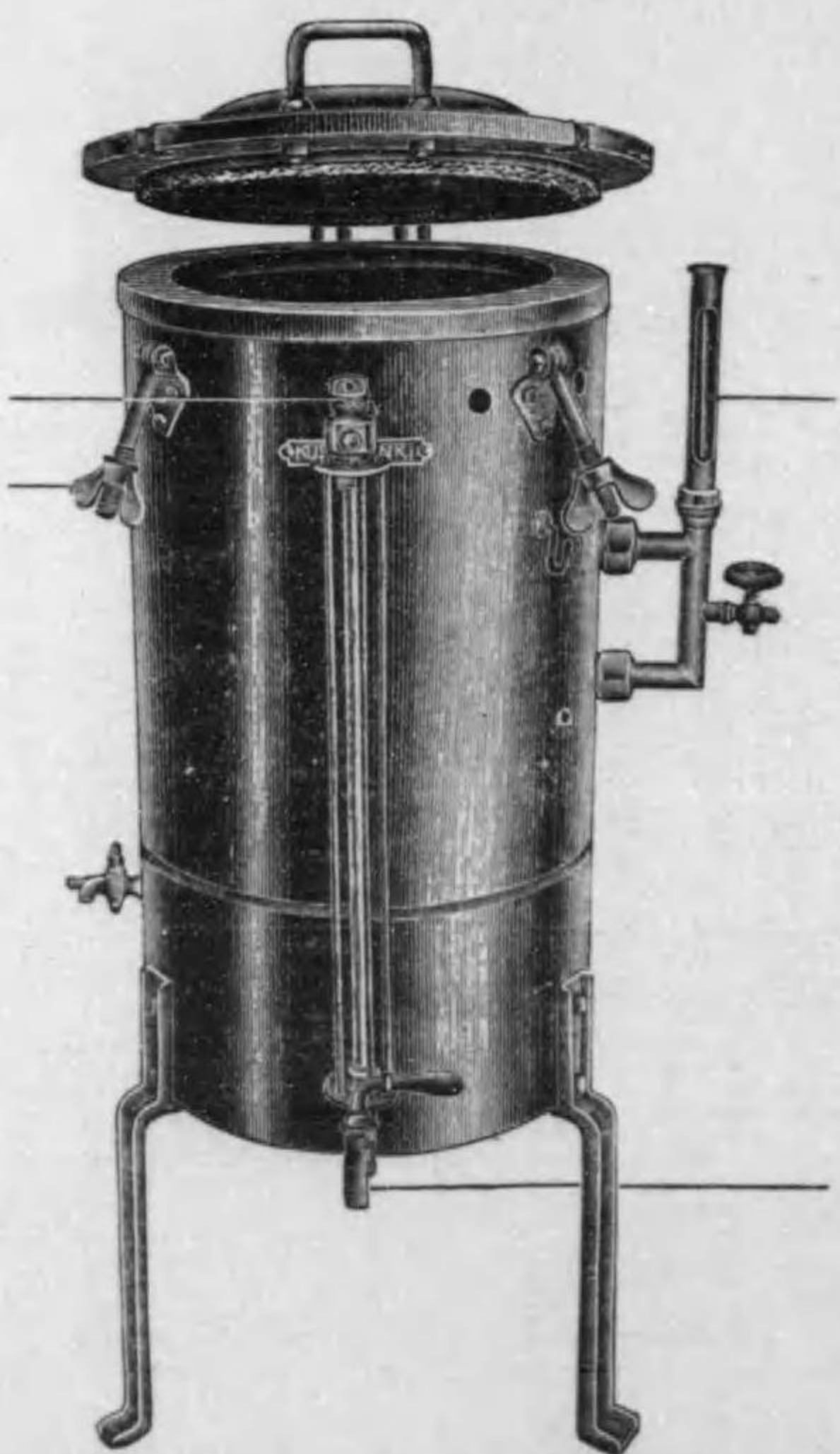
第一項 繻帶材料消毒法

コッホ氏又はシンメルブルグ氏殺菌釜による蒸氣消毒法を最良とすれども亦場合により

実暖計

水を流出せしむる口

第百七十七圖
シムルブルグ氏消毒釜の圖



水を注ぐ口 蓋を固定する装置

ては鍋釜の類を以て煮沸消毒するか又は蒸しても充分に消毒の目的を達し得るものなり。
左にシムルブルグ氏殺菌釜(百七十二及び百七十三圖

第二項 縫合及び結紮材料消毒法

臍帶結紮絲
絹絲、てぐ
腸線

- 一、臍帶結紮絲普通麻を用ふは上記煮沸消毒によるべし。
- 二、絹絲及び「てぐす」は純粹の水の中に二十乃至六十分煮沸し、これを昇汞アルコール（昇汞一に對しアルコール百又は五%石炭酸水、〇・一%昇汞水又は五〇%アルコール中に貯ふ。
- 三、腸線はこれを硝子板に巻き、ヨード、ヨード加里液沃度一〇沃度加里一〇蒸餾水一〇〇〇〇中に八日間浸し置き用時三%石炭酸水又は殺菌水を以て沃度を洗去するか又は無水アルコール中に貯ふ。

第三項 衣服の消毒法

術者の術衣手拭、産婦の上下着、肌着、腰巻、蒲團、敷布、下敷等はこれを煮沸又は蒸氣消毒を行ふを理想とすれども實際行ひ難き問題なるを以て只管其清潔を旨とし而も上記病原菌の附着し居るものと考へ取扱ふべし、即ちこれ等の者が直接に外陰部に接觸せざる様にし、又消毒したる手指器械、繙帶材料等に觸れざる様にし、若し觸れたる場合には直にそれ等のものを再び嚴重に消毒し直すべし、萬一産褥の如き不潔物を用ふるの止むを得ざる場合には先づ一旦これを熱湯、石鹼を以て清潔にしたる上、充分に煮沸消毒して使用すべし。

第九章 分娩に關する諸診斷法

第一節 産婦診察法

大體に於て既述の妊婦診察法によるべしと雖も、産婦診察に際し特に留意すべき諸點左の如し。

第一項 問診

- 一、陣痛の存否 若し其存するならば其開始せる時日其後の經過即ち其度數強度發作及び間歇の規則正しきか否か等
- 二、破水の有無 若し其既に破水せるものによりては其時日前羊水の性状、量其後に於ける經過殊に續きて羊水の漏出あるや否や等を詳細に尋問し、かくして陣痛あり破水後なる場合には直に分娩に對する準備を行ふべく之れに反し其未だ破水せざる場合には既述の産婦及び其家族の一般的既往症を尋問すべし。

第二項 現狀診察法

(甲) 外診

- 一 陣痛の存否 を檢し其既に存する場合には上述の間診をなしつつ其手掌を腹壁外より子宮體部に置き以て其強さ、回数、發作及び間歇の性狀を精檢し、其間歇時に於て
- 二 (イ) 子宮底の高さ、位置、壓痛の存否 (ロ) 腹壁緊張の度、浮腫の存否
- (ハ) 羊水の量 等に留意しつつ既述の診察實施法によりて、
- (ニ) 胎兒の位置及び各部分を既述の特徴より推定して以て其胎位、胎勢、胎向を定め、
- (ホ) 胎兒の先進部の種類及び骨盤入口に進入し固定せるや否や、
- (ヘ) 胎動の存否 (ト) 收縮輪の存否及び其高さ、
- 等を精檢し更に進んでは
- 三 兒心音、臍帶雜音、子宮雜音等の有無、部位、性狀等を聴取し、必要あらば直に内診に移るべく、然らざれば、次で
- 四 産婦の全身状態、
- 五 乳腺の診察に、次に、
- 六 身長、體重、最大腹圍及び腰圍、骨盤其他を測定す。

(乙) 内診

内診はなるべく節約すべきは勿論なれども必要と認めれば直にこれを行はざるべからず、即ち既述の方法によりて嚴重なる消毒法を行ひたる後、既述の内診實施法(第一八頁)を見よによりて、次の諸點をなるべく短時間にて、而も完全に内診すべし、即ち、

一 外陰部に於ては、(イ) 其狹窄、畸形又は病變の存否、(ロ) 鬆軟の度、(ハ) 伸展性の良否等、

二 内陰部に於ては、

(イ) 腔腔の性狀 即ち其廣さ、畸形の有無、鬆軟の度、伸展性の良否、病變の存否、壓迫症狀、例は腫脹、疼痛、乾燥、發熱、血腫等の存否及び其程度、部位等、(ロ) 子宮口の大きさ、形狀、位置、口唇の性狀 (子宮口の大きさを云ひ表はすには(一) 一乃至三指を通じ得るとか(二) 五厘錢、一錢、二錢銅貨の大きさ(三) 直徑、五種とか云ふ)、(ハ) 子宮腔部乃至頸管の消失せるや否や、性狀、開大の度、

(ニ) 下子宮部の性狀 先進胎兒部分との關係、殊に前置胎盤の存否、

(ホ) 子宮内容の性狀 即ち、1. 卵胞の存否(卵胞存在し其緊張せる時は緊満せる薄き護膜囊の如く觸れ、弛緩せる時は弛緩せる護膜囊としてか又は皺襞を作れる卵膜として觸る、之れに反し卵胞存在せず即ち破水後に於ては内指頭は直接に胎兒の先進部に接觸す、) 大きさ、緊張の度、卵膜の厚さ、前羊水の量及び其漏出の存否、2. 胎兒小部分又は臍帶の下垂乃至脱出の有無、臍帶搏動の存否、胎兒の産道内に於ける位置、先進部の診定及び其廻轉の模様、程度の正否、

骨盤腔に對する關係の正否。

(ハ)骨盤の形狀、大き、異常の存否、其存せんか、其部位及び程度、等を精細に検査すべし。

(ト)分泌物の性状。

第二節 分娩開始の診斷法

以下述ぶる症候のある場合には分娩開始と診定することを得。

問診及び外診所見

(甲)問診及び外診により、

一、既に分娩豫定日の前後に相當すること。

二、子宮底強く前下方に懸垂し、初産婦に於ては兒頭既に骨盤入口部に進入固定し、移動せざるか又は僅に移動すること。

三、初めは極めて不規則なる前驅陣痛なるも、漸次規則的となり、其強さ及び度數が時と共に増強すること。

四、子宮分泌物増加し且つ其中に少量の血液の混入すること。

五、胎動の微弱となること。

内診所見

(乙)内診により、

一、初産婦に於ては子宮腔部僅に存するか又は全く消失し、子宮外口稍々哆開し、經産婦に於ては子宮腔部は尙ほ存するも頸管既に擴張し手指を通じ得ること(第百五十四

圖及び百五十五圖を見よ。

二、更に確實なるは陣痛發作時に緊張し間歇時に弛緩する卵胞を觸知すること。

第三節 胎兒各部分の内診上の特徴

縫合

一、縫合

(イ)矢狀縫合

は左右兩顙頂骨間の間隙なれども分娩進み頭蓋骨の重疊を來すや、多くは最早間隙として觸れずして左右兩骨縁の相重層せる狀を呈し、更に進んでは其の附近に産瘤を生じ、ために其全徑路を觸知し得ることあり、かかる場合には其兩端にある大小顙門の位置によりて其徑路を想像するに止まる、而も場合によりては兩顙門を觸知し得ず、ために其診定の非常に困難にして時に不可能のことあり。

(ロ)前額縫合

は一端に大顙門を他端に鼻梁を觸る。

(ハ)冠狀縫合

は一端に大顙門を他端に耳に觸る。

(ニ)後頭縫合

は一端に小顙門を他端に耳の後部を觸る。

總て縫合を觸定せんとする場合には、内指頭にかを多く用ひ、極めて靜かにし、且つ鋸齒狀運動をなし、つつ進むべし、然らざれば途中よりこれを失ふ恐れ有り。

縫合觸診時の注意

二、顙門

(イ)大顙門

は矢狀縫合、冠狀縫合及び前額縫合の相會合する所に生ずる菱形の窩なる

も、分娩進み骨重疊著明となるや菱形窩の全く消失すること稀ならず、かかる場合には上記四縫合の會合部を本顙門と心得べし。

(ロ) 小顙門 は矢狀縫合と後頭縫合との會合部にして、其附近に頭蓋中最も硬き後頭骨突起を觸知せば、診斷更に確實なり。

(ハ) 側顙門 は其附近に耳を觸知し、其形狀極めて不規則なり。

三、頭部 は其硬度平等にして非常に硬く、上記縫合及び顙門を觸れ、且つ頭髪を證明することを得。

頭部
前頭及び前
面部

四、前頭乃至前額部 は常に大顙門及び前額縫合を觸れ、且つ一側に於て眼窩或は其上縁を、他側に於て頭髪の發生部を觸知す。

顔面部

五、顔面部 は中央に鼻梁其附近に口腔、頤部、それと反對側に眼窩を觸知す。

(イ) 鼻 は顔面部の中央に位し一つの隆起として存し、比較的硬き軟骨及び二個の小鼻孔を觸れ、且つ其附近に口腔、眼窩を證明し得ること多し、但し面癩により異形を呈すること稀ならざるを以て、輕卒なる診斷をなすべからず。

(ロ) 口 は横裂にして舌あり、指を挿入するに生胎に於ては哺乳運動あり、且つ硬き上下相平行せる二個の硬き齒槽突起を證明す。

口と肛門との
鑑別點

其肛門との鑑別は、肛門に於ては一裂隙小にして横裂ならず、二指を挿入するに生胎にありては括約作用あり、三、其際指頭に胎糞附着し、四、一側に於て生殖器を觸れ、

他側に於て尾骶骨先端を觸る。

臀部

(ハ) 顙部 は馬蹄形の硬き下顎骨を觸れ、其附近に口腔、他側に頸部を證明す。

六、臀部及び其頭部との鑑別
臀部は一頭部より小、二、柔軟にして硬度一様ならず、三、表面凹凸不平にして、四、二個の同大柔軟なる半球體相併立し、各々其中に硬き坐骨結節を觸れ、五、臀間溝の中央に肛門あり、六、決して毛髪を觸れず。

七、手と足との鑑別、第百七十五圖示すが、如く足に於ては、

手と足との
鑑別點

第百七十五圖

手と足との比較 (成熟兒實物大、著者所藏)



左右鑑別點

膝部
腋窩

一、趾は指に比し短く、且つ其長さ殆んど同長なり、従つて其先端を結ぶ線は殆んど一直線をなし手に於ける如く弓状ならず、二、指に於ける如く拇趾と第二趾との間を強く擴開することを得ず、三、足趾は手掌より幅狭くして長く、四、硬き跟骨を觸れ、五、足關節は蹠側屈曲運動不完全、六、生胎にありては刺戟により衝動様運動をなす、其左右の鑑別は、

(イ)手に於ては、診者の手と握手し得る時は診者の手と同名手にして、之れに反する時は異名手なり。

(ロ)足に於ては、診者の足趾と胎兒の足趾とがその同名趾端に於て相一致して合はすことを得る時は診者の足と反對側即ち異名の足なり。

八、膝部は其特有なる形状、移動性及び膝蓋骨證明による。

九、腋窩は一側に於て桿状の上膊を、他側に於て胸壁の一部を觸れ常に頭側に向つて閉ぢ、骨盤側に向ふて開く。

胸廓は其容積大にして肋骨、肩胛骨、鎖骨等を觸知することにより容易に診定することを得。

第四節 胎兒先進下向部の骨盤腔内に於ける

高さ診定法

入口上の場合

一、先進下向部骨盤入口に存在する場合

外診により該部分の骨盤入口上に容易に移動し、固定することなく、内診により辛うじてこれに達し、且つ容易に移動せしむることを得。

入口中の場合

二、骨盤入口部に進入せる場合

既に外診により其固定せるを認め、内診により其移動の多少困難なるを認め、而も内指頭は容易に薦骨岬に直接に達することを得、然るに分娩更に進みて先進下向部の最大周圍部が

潤部の場合

三、骨盤入口部を過ぎ、骨盤潤部に入るや

内指頭は決して薦骨岬に達せず、先進最下部は既に骨盤峽部に存するを認め、而も兩側坐骨棘を容易に觸知することを得、次で先進部の最大周圍が

峽部乃至出口の場合

四、骨盤潤部を過ぎ、峽部に進入するや

最早や兩側坐骨棘を觸れず、かくして陣痛の増強すると共に胎兒下降し、先進部が骨盤峽部を過ぎ骨盤出口に近づくに従うて初め尙ほ觸知し得たる尾骶骨先端も漸次これを觸れずして、胎兒の先進部は陣痛發作時に陰裂間に現出するに到る。

第十章 分娩時に於ける胎兒の位置

分娩時に於ける胎兒の位置は、これを

第十章 分娩時に於ける胎兒の位置

縦位

頭位

頭蓋位
屈位

胎児の胎位によりて縦(直)位と斜位乃至横位とに區別し、更にこれを其胎向によりて第一及び第二胎向及び第一及び第二分類に細別すること既に述べたるが如し、就中斜位乃至横位は胎児の異常胎位に屬し従うて自然分娩を遂げ得ること極めて稀なるを以て異常分娩編に於て詳述することとし、茲には縦位に就てのみ述べべし。

縦位はこれを其下向部の種類により

一 下向部が頭部なる時の頭位と 二 骨盤端なる時の骨盤端位とに區別し、

頭位はこれを其骨盤腔内に先進する部分により一 頭蓋部の先進する頭蓋位、二 前額部の先進する前額位、三 顔面部の先進する顔面位を大別す、就中

頭蓋位は兒の頤部が常に其胸部に接近せる胎勢を保つを以て一名屈位とも稱し、其後頭部の先進する後頭位と前頭位(又は前頤部の先進する前頭(頤)位とを細別す、従うて頭蓋位即ち屈位はこれを次の四種に細別することを得るものにして、ブッシュ氏分類法と比較するに次の如し。

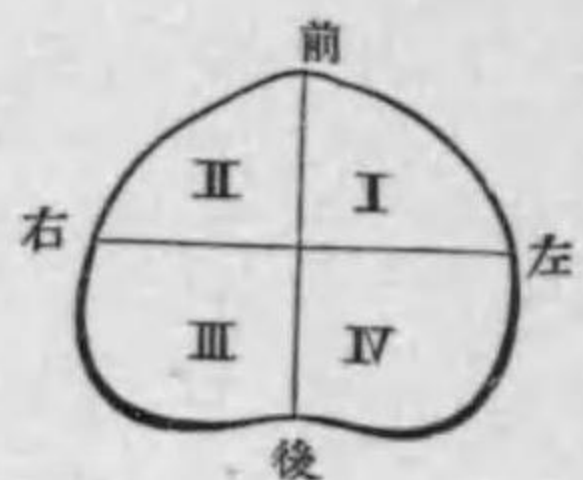
ブッシュ氏分類法

- 第一後頭位後頭位の第一胎向(一)第一頭蓋位
- 第二後頭位後頭位の第二胎向(二)第二頭蓋位
- 第一前頭位前頭位の第一胎向(一)第四頭蓋位
- 第二前頭位前頭位の第二胎向(二)第三頭蓋位

以上の關係を記憶する便法

は第七十六圖に於て

圖六十七百第



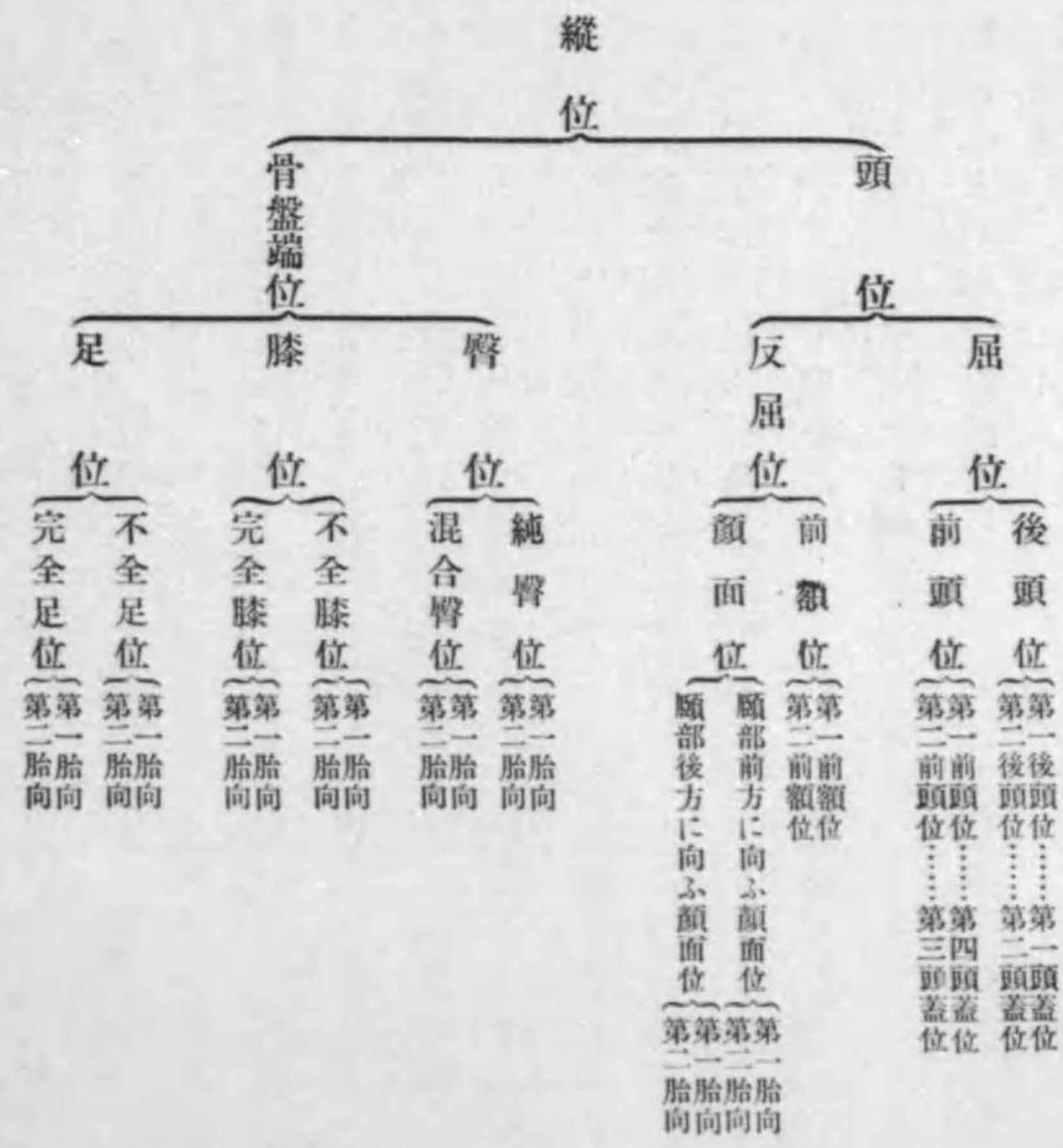
圖は骨盤腔を下方より見てこれを四等分し、これに圖の如く I. II. III. IV. と符號し、内診の結果小頤門が I. 即ち母體の左前方從ふて大頤門が母體の右後方 III. に觸る時は第一頭蓋位にして、即ち第一後頭位、小頤門が II. 即ち母體の右前方從うて大頤門が左後方 IV. に觸る時は第二頭蓋位にして、即ち第二後頭位、小頤門が III. 即ち母體の右後方從うて大頤門が母體の左前方 I. に觸る時は第三頭蓋位即ち第二前頭位、小頤門が IV. 即ち母體の左後方從うて大頤門が母體の右前方 II. に觸る時は第四頭蓋位即ち第一前頭位とするにあり。

反屈位
骨盤端位

前額位及び顔面位は頭蓋位に反し、兒の頤部は常に其胸部より遠ざかりたる胎勢を取るを以て兩者を總稱して一名反屈位とも云ひ、第一及び第二胎向を細別するのみならず、顔面位に於ては産道内を頤部の廻轉する方向により一 顔面位にして頤部が母體の前方に向ふ場合と 二 後方に向ふ場合とを細別す。

骨盤端位に於ても、其先進する部分により一 臀部の先進する臀位、二 膝部の先進する膝位、三 足部の先進する足位を大別し、臀位は更にこれを先進部が全く單に臀部なる場合の純臀位と、臀部と同時に他の部分主として下肢の並存する場合の不純又は混合臀位とを區別し、膝位及び足位はこれを其一側のみ先進する不全膝位又は足位と、兩側共に先進する完全膝位又は足位とを細別す。

依て分娩時に於ける縦位は次の如く分類することを得。



以上の中後頭位が最も多く吾人の遭遇するものにして且つ其他の胎位に比し分娩最も容易従うて母子の危険最も少きものなるを以て之を分娩時に於ける胎児の生理的

位置と云ふ。

第十一章 正規分娩に於ける分娩機轉

定義

第一廻轉

正規分娩に於ける分娩機轉とは、正規産に於ける胎児及び其附屬物主として頭部及び肩胛部が次の四廻轉をなしつつ産道を通過し娩出さるる模様を云ふ。今左にこれを後頭位に就て説明すべし。

第一廻轉 陣痛開始し胎児が下方に壓下せらるるや兒頭は骨盤入口に進み矢狀縫合

は其横徑に一致して入り初めは大小顛門殆んど同高を保つも漸次陣痛の増強する

に従うて特に後頭部が強く壓下されだ

めに頤部が著しく胸部に接近し以て小

顛門が大顛門よりも深く下方に入り即

ち低位を取りて先進するに到るこれを

第一廻轉又は第一胎勢廻轉と云ふ(第百

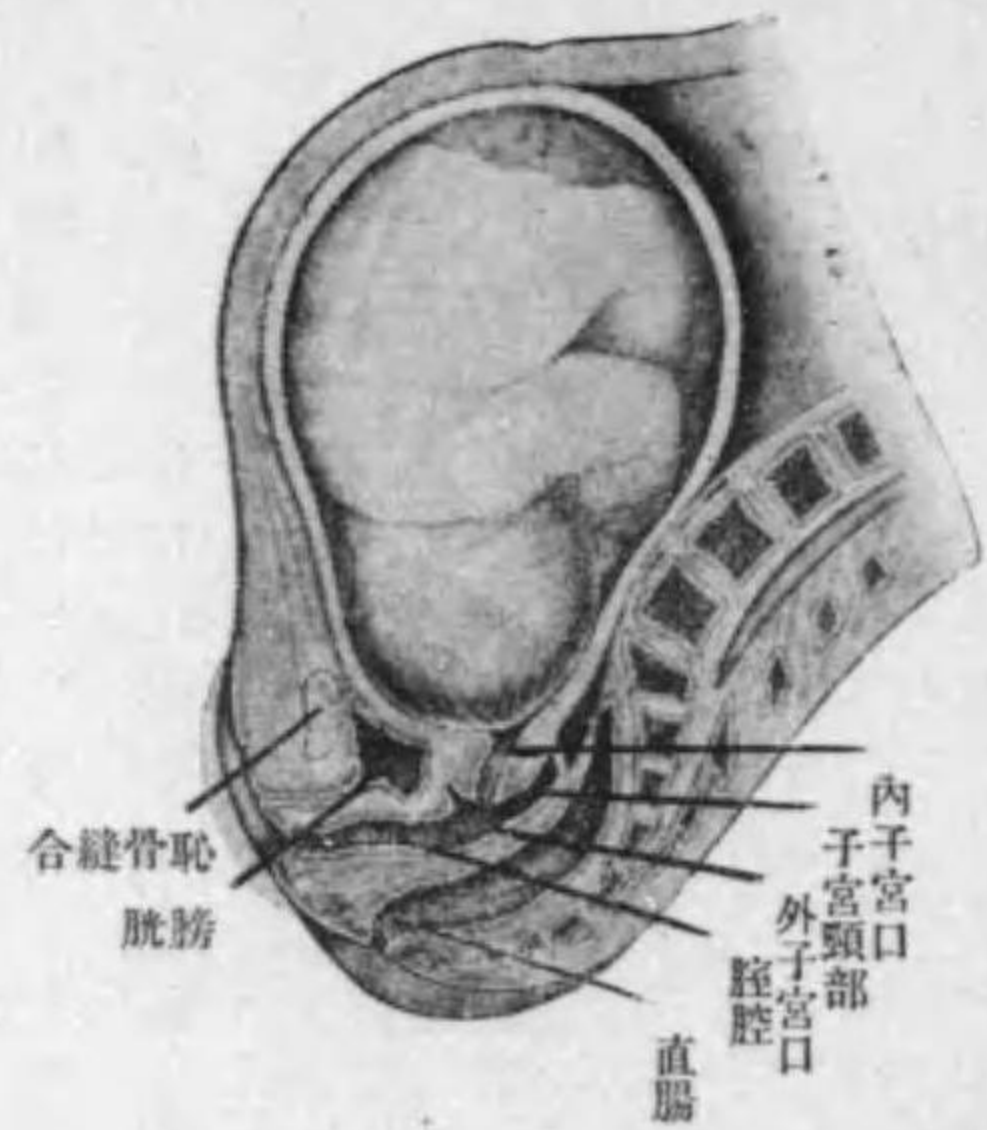
七十七圖を見よ)。

第二廻轉 分娩更に進むや兒頭は其先

進せる小顛門を常に母體の前方に推

移する様徐々に廻轉を營みつつ下降す

第七百七十七圖 第一後頭位に於ける第一廻轉



第十一章 正規分娩に於ける分娩機轉

第三廻轉

るために、初め骨盤入口部にて其横徑に一致せる矢狀縫合は、骨盤淵部に到るや、其斜徑に一致し、骨盤峽部乃至出口に到るや、其前後徑に殆んど一致し、小顛門即ち後頭部は恥骨縫合の方(即ち母體の前方)に大顛門(即ち前頭部)は薦骨窩の方(即ち母體の後方)に向ふに到る、これを第二廻轉又は第一胎向廻轉と云ふ。

第三廻轉(第七十八圖を見よ) 次で排臨撥露し兒頭將きに娩出せんとするや、項部は恥骨縫合の後縁に、小顛門は恥骨縫合の下縁に支定され、臍部が再び胸部より速かりて以て前頭、顔面、頤部の順序を以て會陰の方より娩出し、最後に後頭が恥骨弓下より娩出

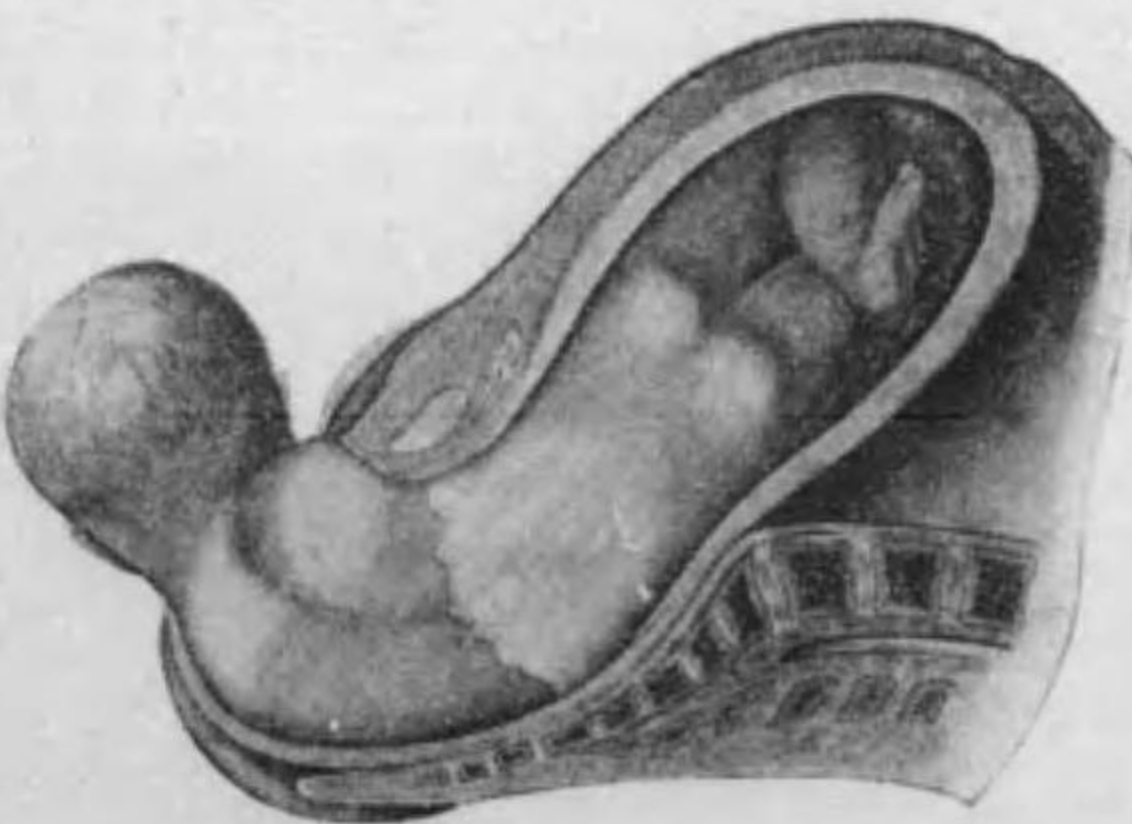
圖八十七百第

す示を況状の露撥頭兒るけに位頭後



圖九十七百第

す示を況状を成完の轉廻四第て於に位頭後一第
は面顔の兒し出娩に全完がと部頭と部頭
ふ向に面内の腿大側右體母



第四廻轉

肩胛部の分
娩機轉

肩幅

して以て兒頭全く陰裂外に露出す、これを第三廻轉又は第二胎勢廻轉と云ふ。

第四廻轉(第七十九圖を見よ) かくして兒頭全く娩出するや、次で肩胛部が次に述ぶるが如き廻轉をなしつつ産道を下降するために、兒頭は母體外に於て肩胛部の廻轉に應じて廻轉す、即ち娩出當時母體の後方に向へる兒の顔面は漸次其側方に廻轉して、母體大腿の内側に向ふに到る、これを第四廻轉又は第二胎向廻轉或は外廻轉と云ふ。

肩胛部の分娩機轉

兒頭の全く娩出せる當時即ち上記第三廻轉の終りに於て肩胛部は骨盤入口部に在り、其肩幅又は肩胛横徑とも云ひ、兩肩峰を結ぶ直線を云ふは入口部の横徑線に一致して入り、以後肩幅は骨盤淵部に於ては其斜徑線に一致し、但し矢狀縫合の一致せる斜徑線と反對の斜徑線に一致す、これ肩幅と矢狀縫合とは生理的に互に直角に相交するを以てなり、骨盤峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致する様廻轉しつつ下降し、其娩出せんとするや、前在肩胛部(即ち恥骨縫合の方)にある、即ち母體の前方にある肩胛部は恥骨縫合の下縁に支定され、軀幹が多少前上方に屈彎するが如き廻轉をなしつつ後在肩胛部(第一後頭位)にては左側肩胛、第二後頭位に於ては右側肩胛が先づ會陰の方より娩出し、次で前在肩胛部娩出して、茲に肩胛部の娩出を終る、但し肩胛部は頭部に比しては小なるのみならず柔軟にてよく壓縮せらるるために、其廻轉の様は頭部に於けるが如く必ずしも規則的ならず。

軀幹及び四肢の娩出 は既により大なる頭部及び肩胛部によりて産道が充分擴張せらるるため何等の抵抗を受くることなく従うて特別の分娩機轉を營むことなくして肩胛部の娩出に次で容易に行はる。

第十二章 後頭位の診断及び分娩機轉

第一節 第一後頭位の診断及び分娩機轉

(甲) 診断

は次の諸點によるべし(第百八十圖を見よ)。

一 外診所見 としては

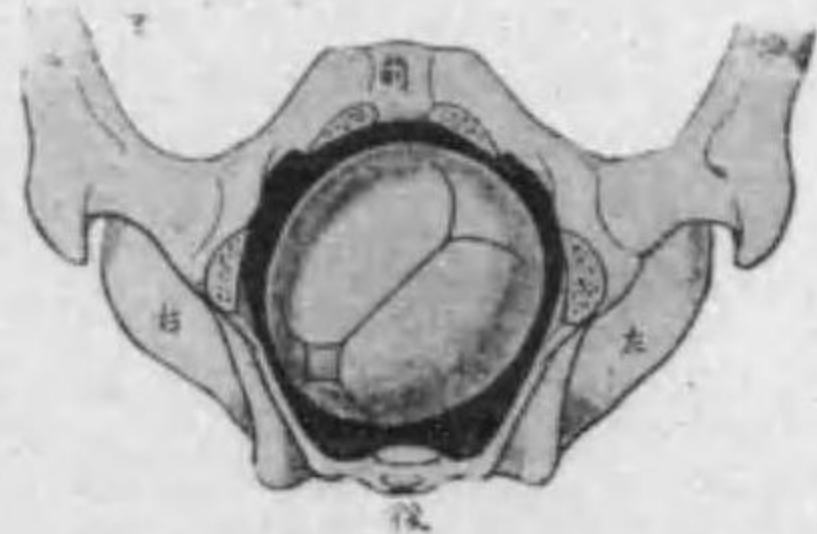
(イ) 頭部 は骨盤入口上にあり。

(ロ) 臀部 は子宮底部にて稍々其左側に

(ハ) 兒背 は母體の左側に存し、

圖十八百第

位頭後一第
見所診外其は圖上
見所診内其は圖下
てに方後右は門額大、方前左は門額小
す致一に線徑斜(右)一第は合縫狀矢



(ニ) 小部分 は母體の右側にて上方に位し、

(ホ) 兒心音 は左臍棘線の中央の附近に於て最も明瞭にこれを聴くが、分娩の進むに従うて漸次に正中線に近づき且つ下方に降る。

二 内診所見 としては

(イ) 小顛門 は低くして(先進して)母體の左側又は左前方に在り、

(ロ) 大顛門 は高

(ハ) 矢狀縫合 は骨盤入口部にては其横徑に潤部にては其第一斜徑に、峽部乃至出口にては其前後徑に一致して觸る。

三 産兒所見 としては

(イ) 産瘤 は右顛頂骨の後部に生じ、 (ロ) 骨重疊

は左顛頂骨縁が右側の下に層重す。

(ハ) 頭形(第百八十一圖を見よ) は其大斜徑線(矢狀線)の方向に於て延長し、小斜徑線(横線)の方向に於て短縮して以て長頭顛形をなす。

(乙) 分娩機轉

分娩開始するや兒頭下降し、其矢狀縫合を骨盤入口の横徑に一致しつつ其内に入り同時に第一廻轉を營みて小顛門を先進せしめ、次で第二廻轉により小顛門は常に母體の前方に向うて廻轉しつつ兒頭下降す、ために矢

圖一十八百第

るせ出娩て以な位頭後
す示な(形顛頭長)形頭兒
常正の前形變は線點
りなのもす示な形頭



状態は骨盤淵部に於ては其第一斜徑に骨盤峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致し、陰門を出でんとするや、第三廻轉によりて前頭顔面頤部が逐次會陰より最後に後頭が恥骨弓下より娩出して以て兒頭全く娩出するや、肩胛部の分娩に移り該部の産道内に於ける下述の廻轉の結果として兒頭第四廻轉をなし兒の顔面は母體右側大腿の内面に向く、骨盤入口部に於て其肩幅を横徑に一致せしめて入りたる肩胛部は其下降するに従うて軀幹の縦軸廻轉によりて右肩胛下降して母體の前方に向ひ、左肩胛後方に向ひ、ために其肩幅は骨盤淵部に於ては其第二斜徑に峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致するに到る、次で肩胛部陰門に達すれば右肩胛恥骨弓下に支定され兒の軀幹は前後軸の廻轉をなして以て先づ左肩胛會陰の方より、次で右肩胛恥骨弓下即ち母體の前方より娩出して以て肩胛部の分娩を終る。

第二節 第二後頭位の診断及び分娩機轉

第二後頭位の診断

(甲) 診断 は次の諸點による(第百八十二圖を見よ)。
一 外診所見 としては

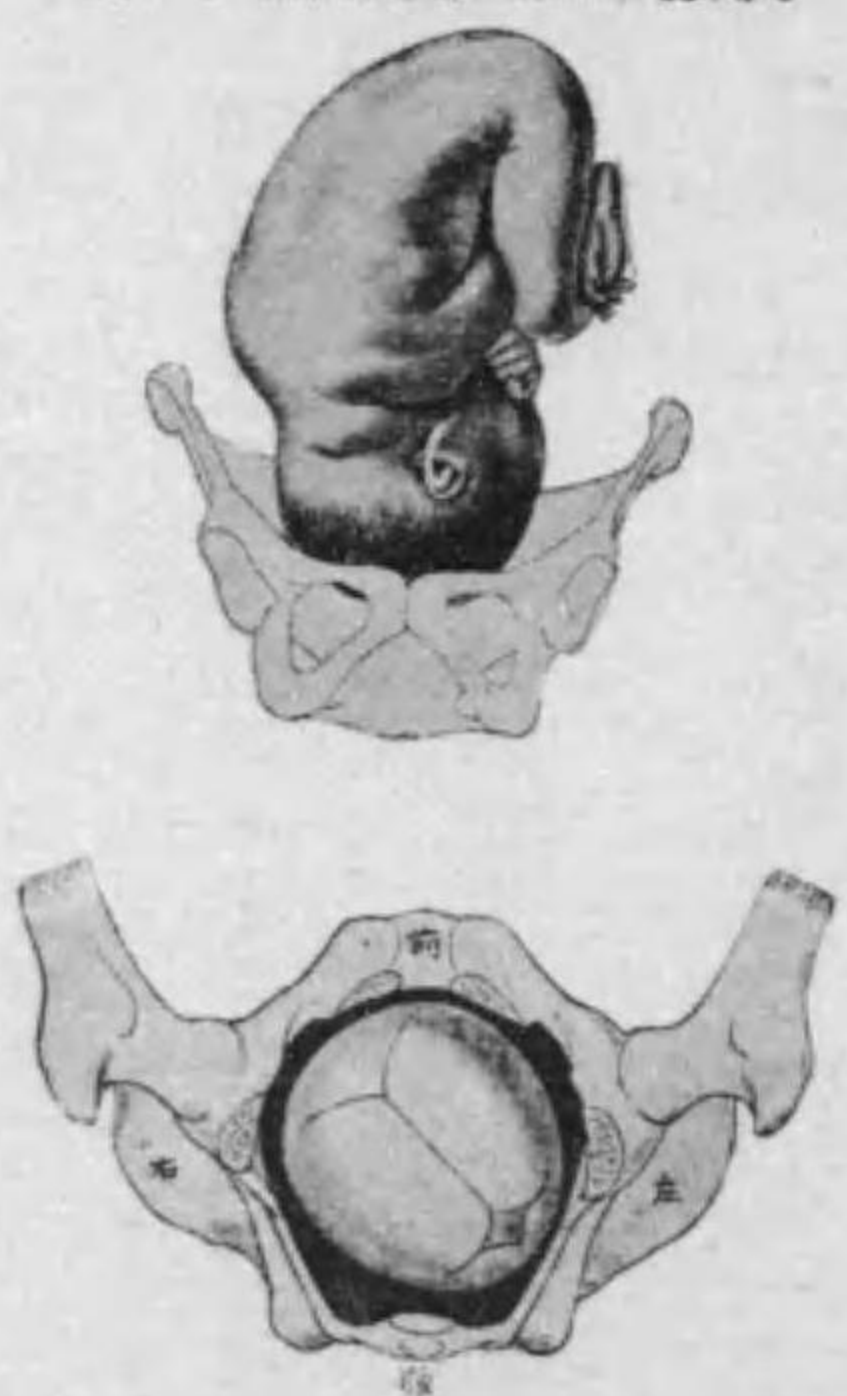
- (イ) 兒頭 は骨盤入口上にある、 (ロ) 臀部 は子宮底部にて稍々右方に位し、
- (ハ) 兒背 は母體の右側に在り、 (ニ) 小部分 は母體の左側にて上方に位し、
- (ホ) 兒心音 は右臍棘線の中央の附近に於て最も明瞭にこれを聴取す。

一 内診所見 としては

- (イ) 小顱門 低く先進し母體の右側又は右前方に在り、
- (ロ) 大顱門 高くして母體の左側又は左後方に在り、
- (ハ) 矢狀縫合は骨盤入口

第百八十二圖

第二後頭位
見所診外其は圖上
見所診内其は圖下
りあに方後左は門顱大、方前右は門顱小
す致一に線徑斜(左)二第は合縫狀矢



に於ては其横徑に淵部に於ては其第二斜徑に峽部乃至出口に於ては其前後徑に一致して觸る。

三 産兒所見 としては

- (イ) 産瘤 は左顱頂骨の後部に生じ、 (ロ) 骨重疊 は右顱頂骨縁が左側の下に層重す。
- (ハ) 頭部の變形 は第一胎向と同じく長頭顱形をなす。

乙 分娩機轉

大體に於て第一後頭位の場合と同じ、只其胎向の異なるために胎兒部分と産道の前後左右の關係を異にするのみ。

第二後頭位の分娩機轉

今其異なる點を列擧すれば次の如し。

- 一 第二廻轉に於て小頤門は右又は右前方より、前方に廻轉すること、従うて矢狀縫合が骨盤潤部に於て第二斜徑線に一致すること。
- 二 第四廻轉に於て兒の顔面が母體の左側大腿の内面に向くこと。
- 三 肩胛部の娩出は(イ)肩幅が潤部に於て第一斜徑線に一致すること、(ロ)右側肩胛が先づ後方より娩出し、次で左側肩胛が前方より娩出すること。
- (丙)豫後 後頭位の豫後は總ての他の胎位に比し最も佳良なり、これこの胎位に於ける先進頭部の最大周囲は兒頭周圍中最小なる小斜徑周圍約三十二釐なるを以て、最も容易に産道を通過し、且つ陰門殊に會陰の損傷を來すこと最も少ければなり。

後頭位の豫後

第十三章 正規分娩の處置

正規分娩は普通自然に經過し従うて助産婦の處置すべきものなれども亦忽ちにして異變を起し時期を失せんか胎兒のみならず母體の不幸を來すことあるを以て常に周到なる注意を怠らず變に際しては時期を失せずして専門醫の補助を受ける様心掛くべし。

第一節 分娩時助産婦の携帶すべき器械及び材料

助産婦用器械及び材料として備ふべきものは

- 一 診察用器械としては(イ)聴診器(第百二十五圖)(ロ)検温器(第百八十三圖)(ハ)骨盤計(第百二十七圖)(ニ)卷尺(第百二十八圖)。
 - 二 消毒用器械及び材料としては(イ)爪剪刀(ロ)爪鉗(第百六十九圖)(ハ)刷毛(ニ)石鹼(ホ)消毒液(リゾール)「リゾホルム」石炭酸「アルコール」、沃度「丁幾等」(ヘ)液量器。
 - 三 處置用器械及び材料としては(イ)洗水器(第五圖)(ロ)洗腸器(産婦用及び初生兒用)(第百三及及び四圖)(ハ)剪刀(ニ)ピンセット(第百八十四圖)(ホ)麥粒鉗子(第百八十五圖)(ヘ)止血鉗子(第百八十六圖)(ト)カテーテル(第百八十七圖)(チ)臍帶剪刀(第百八十八圖)(リ)氣管カテーテル(第百八十九圖)(ヌ)臍帶結紮絲(ル)消毒綿帶材料(ヲ)護謨布(桐油紙)手術衣(手拭)(ワ)ホフマン氏液(エーテル)一分「アルコール」三分の混合液なり、(カ)二%硝酸銀水及び點眼装置(ヨ)等分亞鉛華澱粉又は「シッカロール」。
- 等にしてこれ等は一定の順序にて一定容器内に納め携帶運搬に便利なる様製造販賣せらる。

第二節 分娩の準備

一 産家の準備すべき器具及び材料 としては(イ)手洗鉢三個、内二個は温湯を入れ、一個は消毒液を入れる、(ロ)沐浴用大「たおる」、(ハ)腰枕、(ニ)差込便器、(ホ)初生兒及び産婦用

第百八十三圖

沐浴用檢温器の圖



第百八十七圖

ネラトン氏尿道「カテーテル」の圖



第百八十四圖

解剖「ピンセット」の圖



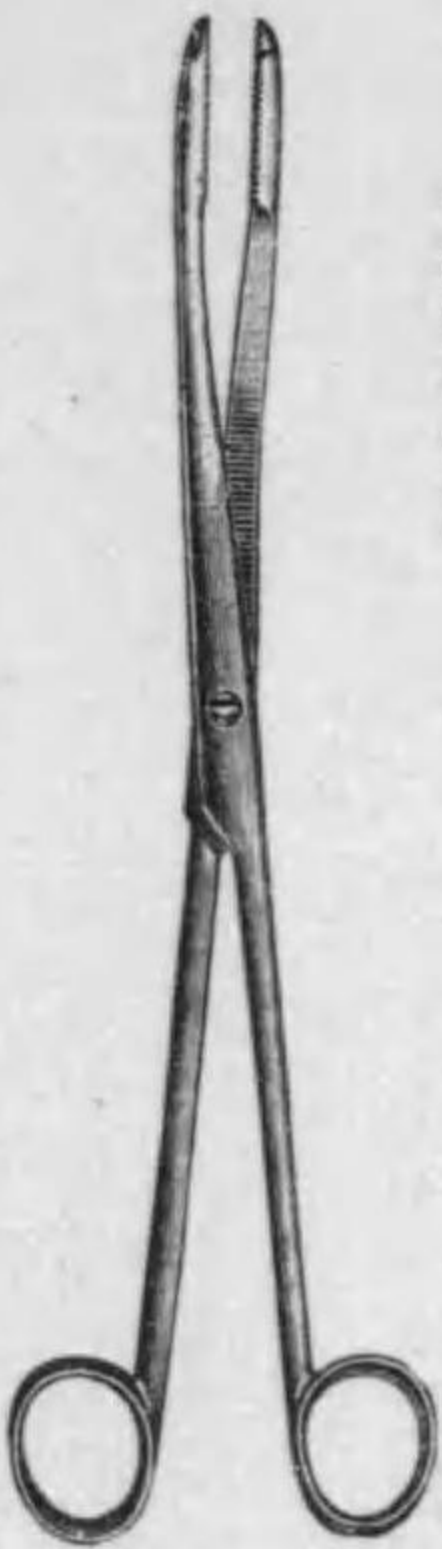
第百八十七圖

金屬製S字狀尿道「カテーテル」の圖



第百八十五圖

麥粒鉗子の圖



第百八十八圖

圖の刀剪帶脐



第百八十六圖

血止氏「シアベ」
圖の子鉗



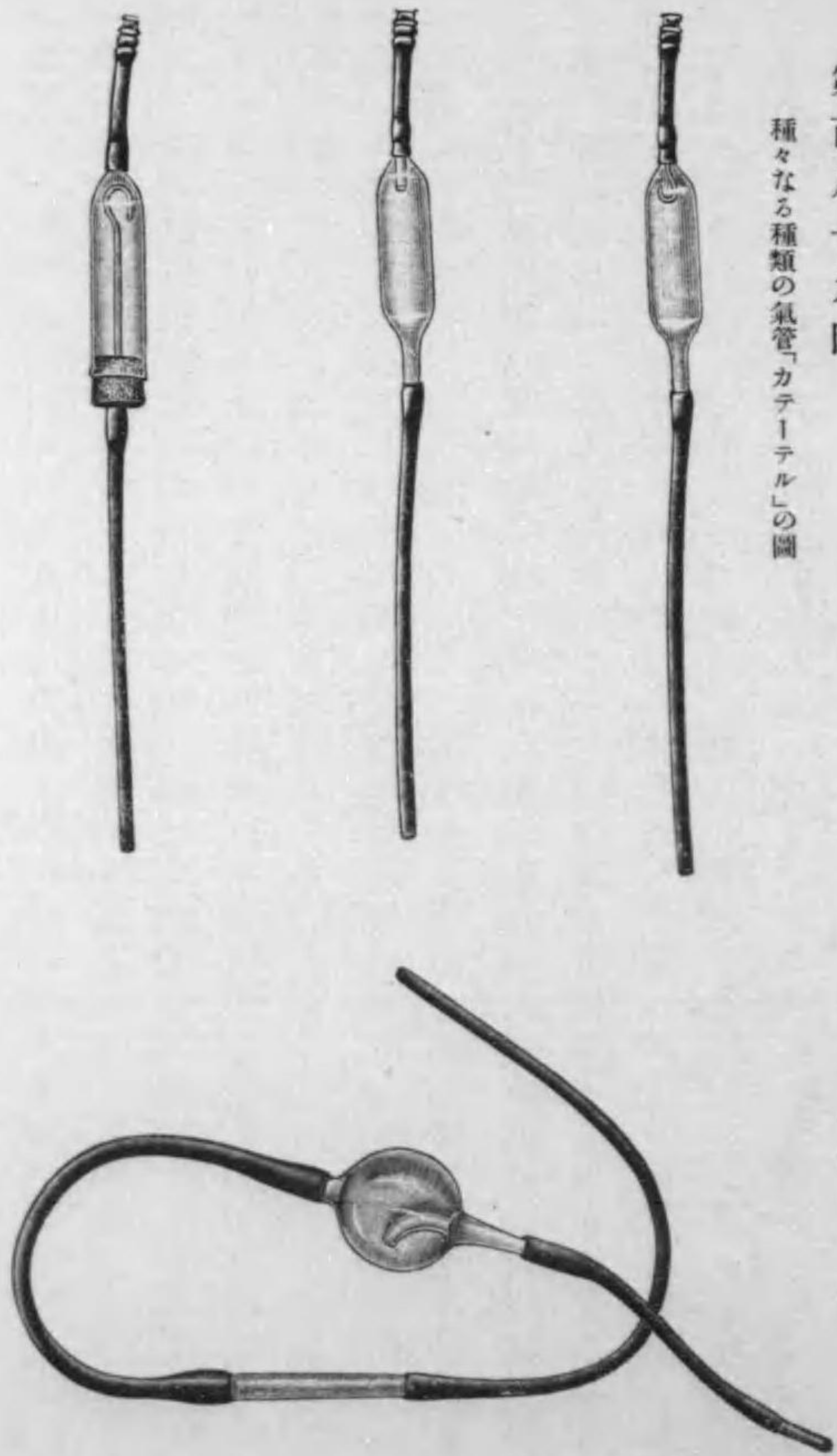
第百八十八圖

圖の刀剪帶脐



第百八十九圖

種々なる種類の氣管「カテーテル」の圖



産室

衣類(豫め温むべし) (へ)多量の熱湯及び冷水 等なり。

二、産室 はなるべく廣く、閉静清潔にして光線の射入及び空氣の流通よき室を選び、(換氣法第一三頁を見よ) 不必要の器具はこれを他室に移し、室温は攝氏二十度(華氏七十度)

内外とし、(温室法第一三頁を見よ)夜間の照明充分にて便所、下水等の悪臭の入らざる一階目の室にて且つ無用の人を出しめしめす。

三、産床 は廣き室なれば其中央に置き、狭き室なれば其足端を最も明き側に向けて三方より近寄り得る様に置き、寧ろ硬き清潔なる蒲團を選び、其上に護謨布又は桐油紙及び清潔なる敷布を敷き、更に腰部には清潔なる脱脂綿及びガーゼの數層を置きて、分娩時臥床の汚染するを防ぐ。

四、産衣 は清潔にして寛潤なるものを用ひ、あまり厚着せしめず、殊に分娩時には發汗し易く且つ羊水、血液等にて汚染するを以て寧ろ薄着とし、若し冬季なれば分娩用股引を着けしむ。

五、産位 各地の習慣により一定せざれども、現今一般に應用さるるは仰臥位と側臥位となり、産婦壯健にして分娩全く正規に經過する場合には産婦の好みに任して差支へなければども、分娩第一期に於ては半臥位上體を擧げたる仰臥位第二及び第三期に於ては水平仰臥位を取るを以て最良となす。但し急速遂娩する恐ある場合又は斜位を取らんとする恐ある場合等に於ては側臥位を取らしむべきなり、而も其側臥は急速遂娩の恐ある場合には最も先進せる部分の偏在せる側を下にして側臥せしむべく、故に第一期後頭位に於ては左側臥位、第二期後頭位に於ては右側臥位とす、斜位を取らんとする場合には兒頭の偏れる側を下にして側臥せしむべし。

産床
産衣
産位

第三節 正規分娩各期に於ける處置

第一項 分娩第一期に於ける處置

運動
排便、排尿
腹壓

一、運動 初産婦の分娩最初期にて陣痛未だ不規則且つ微弱なる時期には室内又は室外の散歩は却て陣痛を強むる助となるを以て寧ろ奨べきなれども、既に子宮口開大せる場合又は經産婦にて腹壁弛緩せるもの或は急速に遂娩する習慣ある者は必ず産床に静臥せしむ、これ卵胞が早期に破裂し、羊水早期に流出し、同時に臍帶又は小部分の脱出或は急速遂娩等を起し胎兒は勿論母體の生命を危険ならしむることあればなり。

二、排便、排尿 分娩時に糞便が蓄積する時は屢々陣痛又は腹壓の微弱を起して分娩を困難ならしめ、又排膿撥露の前後に不隨意的に排泄して消毒を不完全ならしむるを以てこれを充分に排泄することは、分娩の始終を通じて非常に必要なることなり、殊に分娩初期に於ては必ずこれが充分なる排泄を謀るべし、即ち出來得べくんば自然的に、場合によりては人工的に導尿(第一四頁を見よ)又は洗腸(第二頁を見よ)によりてこれを行ひ、分娩最初期に於ては注意して便所に行かしても宜しけれども、子宮口の既に開大せるを思はしめし場合には必ず床上にて仰臥位に於てこれをなさいしむべし。

三、腹壓 は既に述べたる如く分娩第二期に來り主として胎兒の排出を司るものなる

診察

が、時に分娩第一期に既に來ることあり、ために却て早期破水又は産婦の疲勞等起すを以て必ずこれを嚴禁すべし。

四、診察はこれを周密に行ふべきは勿論なれども、そのために却て母體に障害を來さざる様留意すべし、即ち内診の如き一般に此期に於ては其必要を見ざることも多きを以て真に止むを得ざる必要時に限り、消毒を嚴重にし短時間に行ひ且つ卵胞を破らざる様注意すべし。外診の如きも濫りに行はんか陣痛の異常、早期破水の原因をなすを以て必ず陣痛間歇時に於て靜かに行はざるべからず。

五、産婦の慰安、殊に初産婦に於ては以後の分娩經過其他に關し多大の不安あるものなるを以てこれが慰安に努むべし。

六、飲食物、總て分娩時の飲食はこれを一時に多量與ふべからず、消化性、流動性の食物、無刺激性の飲料を少量宛與ふべし。

七、兒心音の聴取、兒心音は胎兒生死を知る唯一の徴候なるを以て時々これを聴取し傍ら臍帶雜音の存否を注意すべし。

八、陣痛の性状、陣痛の正否は本期に最も大切なる關係を有するを以て其發作間歇の正否を絶えず注視し、時と共に増強する様努むべきなり、然れども時に産婦睡眠に陥りために陣痛の微弱乃至休止することあり、かかる場合に若し他に何等憂ふべき危険症候なからんか寧ろこれを助け充分に安眠せしむべし、ために覺醒後元氣恢復して陣

痛の性状著しく改善するの利あればなり。

九、其他産婦の一般状態、殊に體温、脈搏、呼吸及び子宮分泌物の性状を注視し、異變に際して時期を失せず醫治を乞ふの用意なからざるべからず。

第二項 分娩第一期に於ける處置

破水時の注意

一、破水時の注意、破水直前に於ては、破水時に前羊水散亂して産衣其他を汚染せざるために消毒せる「ガーゼ」片を陰門の前に懸垂すべし、次で破水到らば一其時間
二、前羊水の性状及び量を注視し、三、直ちに兒心音を聴取し、若し異常あらんか直に内診し、主として臍帶脱出の有無を検し、傍ら既述の内診時診定すべき諸點を検すべく之れに反し異常なくんば決して内診を行はず。
二、兒心音、は破水後に於ては其前に比して臍帶の壓迫さるること多く従うて其異常を來し易きを以てなるべく頻回に聴取すべし。

二、陣痛及び腹壓、本期は兒頭が小骨盤腔内にて強く壓迫されつつ狭き産道を通過する最も危険なる時期なるを以てなるべくこの時期を短縮する様に謀らざるべからず、而してそのためには種々の方法あれども主として娩出力を正強ならしむるにあり、即ち産婦の一般的元氣を充進せしむると共に適當なる位置、即ち下肢を少しく屈曲してこれを固定し、兩手に産網を與へて把持牽引せしめ、陣痛發作時に於て強く腹壓を加

會陰保護の時期

へしめ、之れに反し間歇時には全くこれを嚴禁して以て無益の疲勞を避くべし。

四、**脱肛豫防** 兒頭深く下降し、會陰強く膨隆し、直腸粘膜が肛門外に翻轉するに到らば、消毒「ガーゼ」又は脱脂綿を以て肛門部を押へ、殊に陣痛發作時には適當なる反壓を加へ以て脱肛とは直腸粘膜が肛門外に脱出するを云ふを豫防し、傍ら會陰の伸展を助く。

五、**會陰保護** 次で兒頭排臨に及べば、會陰は益々膨隆し、強く伸展し、破裂の危険増すを以て、時期を失せずして後述する方法によりて會陰保護術を行ふべし、而して其時期に關しては各場合により一定し難けれども、大凡經産婦に於ては排臨の時より、初産婦に於ては撥露の時より、これを行ふを通則となす、其際に於ては産婦をして腹壓を加へしめず、廣く開口し高く「アー」と叫ばしめ、以て兒頭が陰裂間を徐々に通過する様努むべし。

六、**兒頭娩出直後に於ける處置**

(イ) かくして兒頭娩出せば、直に清潔にして軟かなる布片を以て口、鼻及び其周圍を拭ひ、羊水粘液、血液等を去りてこれを吸入せしめざる様にし、直に

(ロ) 頸部に臍帶纏絡の有無を検し、纏絡は五六回の分娩に一回位の割に来る、若し其存せんか直に拇示兩指間に軽く挟みてこれを弛め、且つ兒頭を越えて外すべく、若し纏絡緊密にして外すこと困難ならんか任意の二ヶ所にて結紮し、其中間を切斷すべきも至急の場合には助手をして二ヶ所を強く指壓せしむるか又は「コッヘル」氏止血鉗子を以て

挟みて其中間を切斷し、速に胎兒の娩出を謀るべし。

七、**肩胛部娩出** 兒頭娩出するや、其他の部分は普通續いて又は次の陣痛發作により容易に娩出するものなれども、時に其娩出に時間を費したために兒の顔面「チアノーゼ」を呈し、胎兒の危険切迫することあり、又は臍帶纏絡のため速かに胎兒を娩出せしむる必要あることあり、かかる場合には次に述べる肩胛部娩出術を行ふべし、而して其際には、同時に會陰保護を充分に行ふことを忘るべからず、これ屢々實地に於て兒頭娩出に際し會陰破裂を免れ得たるに安心し保護を怠り、ために却てこの際強き損傷を來すこと稀ならざればなり。

八、**胎兒娩出直後に於ける處置** かくして胎兒娩出し終らば

(イ) 更に再び口、鼻及び其周圍を清拭したる後、羊水、血液等にて汚染せざる様、而も臍帶を牽引せざる様注意して母體の股間に冷却せしめざる様にして静臥せしめ、

(ロ) 規則正しき呼吸を營むや否やを検し、其異常なきを知らば、直ちに

(ハ) 子宮の收縮状態を注意し、其固く收縮するを知らば、

(ニ) 再び會陰其他に裂傷の存否、出血の存否を注視し、

(ホ) 時々臍帶の搏動を検し、其全く停止せる後、直に以下述ぶる方法によりて臍帶を切斷すべし。

會陰保護術

目的

會陰保護實施法

會陰保護術は助産婦に最も必要なる技術なるを以て以下述ぶる方法によりて常に充分なる熟練をなすべし。

會陰保護の目的は會陰破裂を防護するにあり、この目的を達するには以下述ぶる方式によりて一、會陰及び腔口の伸展を助くると同時に二、兒頭の正規的廻轉(第三廻轉)を助け、且つ其陰門通過を出來得る限り徐々ならしむべし。

會陰保護實施法には次の二種あり。
(甲) 仰臥位に於ける會陰保護法

一、産婦の位置姿勢 産婦はこれを仰臥位となし、腰下になるべく、高き枕を入れ以て會陰に手を達し易からしめ、且つ兩下肢を股及び膝關節にて強く屈曲し、加ふるに股間を充分に開かして、外陰部を充分に露出す、次で

二、術者の位置 は其右側に坐し、産婦の右脚を己れの膝上に伸展せしめたる状態に於て載せ、

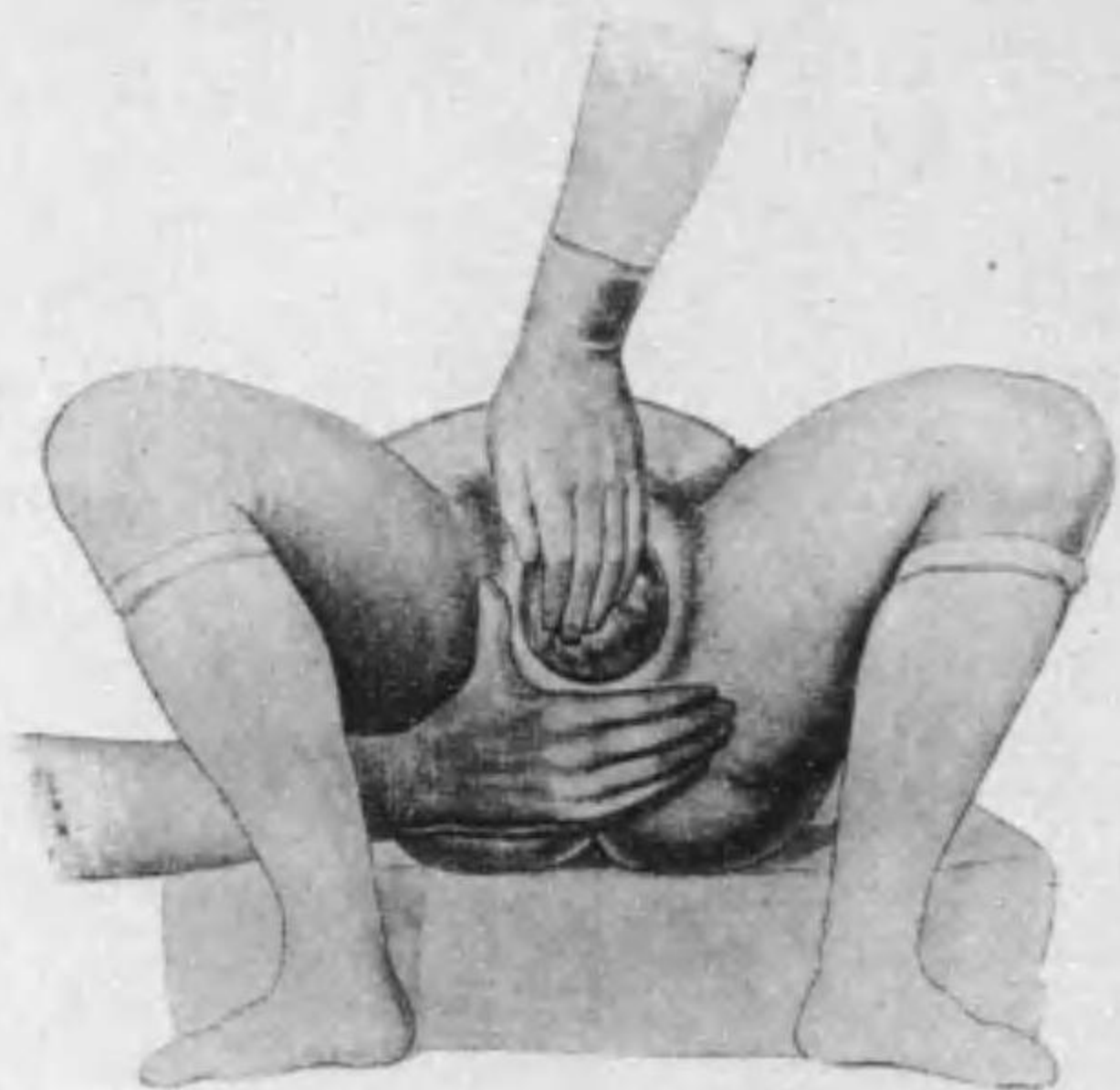
三、保護を行ふ(第九十圖を見よ。即ち

(イ) 右手を其拇指と示指との間を充分に開きこれを陰唇繫帯部を去る約一乃至二種の所に於て陰門の後邊に並行に當て、手掌を以て會陰及び肛門を壓定す、爾後陰門

に近き陰唇繫帯の一部は常に必ずこれを明視し、以て陰唇及び會陰の伸展状態を知

圖十九百第

き付手の術護保陰會るけ於に位臥仰



圖一十九百第

き付手の術護保陰會るけ於に位臥側



り得る様にすべし、尙ほ手掌と會陰との間に殺菌ガーゼ又は脱脂綿の薄層を置く時は消毒を完全ならしむるのみならず手掌の滑脱を防ぎ得るの利益あり。
(ロ) 他手即ち左手は其指頭を相密集せしめたる状態か又は拇指と示指とを開きたる

状態に於て陰核を越えて兒頭に置く。

(ハ)以上の如き手付きの下にて陣痛發作到らば腹壓を禁じ(廣く開口し、アーと呼びしむ)兩手殊に右手を以て陰唇及び會陰の伸展を助け、左手を以て兒頭の正規的廻轉を助け、且つ徐々に下降せしめ、兒頭の娩出は主として陣痛間歇時に於てこれを促進せしむべし。

(乙)側臥位に於ける會陰保護法(第九十一圖を見よ)。

一、産婦を左側臥位とし、下肢を股及び膝關節にて軽く屈曲せしめ、且つ兩下肢間に膝關節の上部に於て中等大の枕を挟み、

二、術者は其背側に坐し、右手を其股間よりして外陰部及び會陰に上述の如くして當て、左手は産婦の上方側の下肢を越えて上述の如くして兒頭に當て、上記と全く同一の方法及び注意の下に保護すべし。

一般に甲の方法が費用さる、これ外陰部の露出充分なるために保護法を容易に且つ充分に行ふことを得従うて保護の目的をより充分に達し得るの便あればなり。

肩胛部挽出術

本法はクリステレル氏胎兒壓出法(後にあり)の効を奏せざるか又は胎兒の危険急にして同氏法を行ふ暇なき場合に次の如くして行ふ。

術式

肩胛部挽出術式(第九十二圖を見よ)。

一、産婦の下(即ち後方)に在る兒の肩胛部(これを後在する肩胛部と云ふ)と同名の手掌(例ば第一胎向にては左手掌)を以て兒頭及び後在肩胛部を後方即ち下方より受けてこれを産婦の前上方に壓上して後方に間隙を作り、

第百九十二圖
肩胛部挽出術式
指示の各腋窩に掛け且つ肩峰を握るとして腕を幹軸で續部肩胛部てり



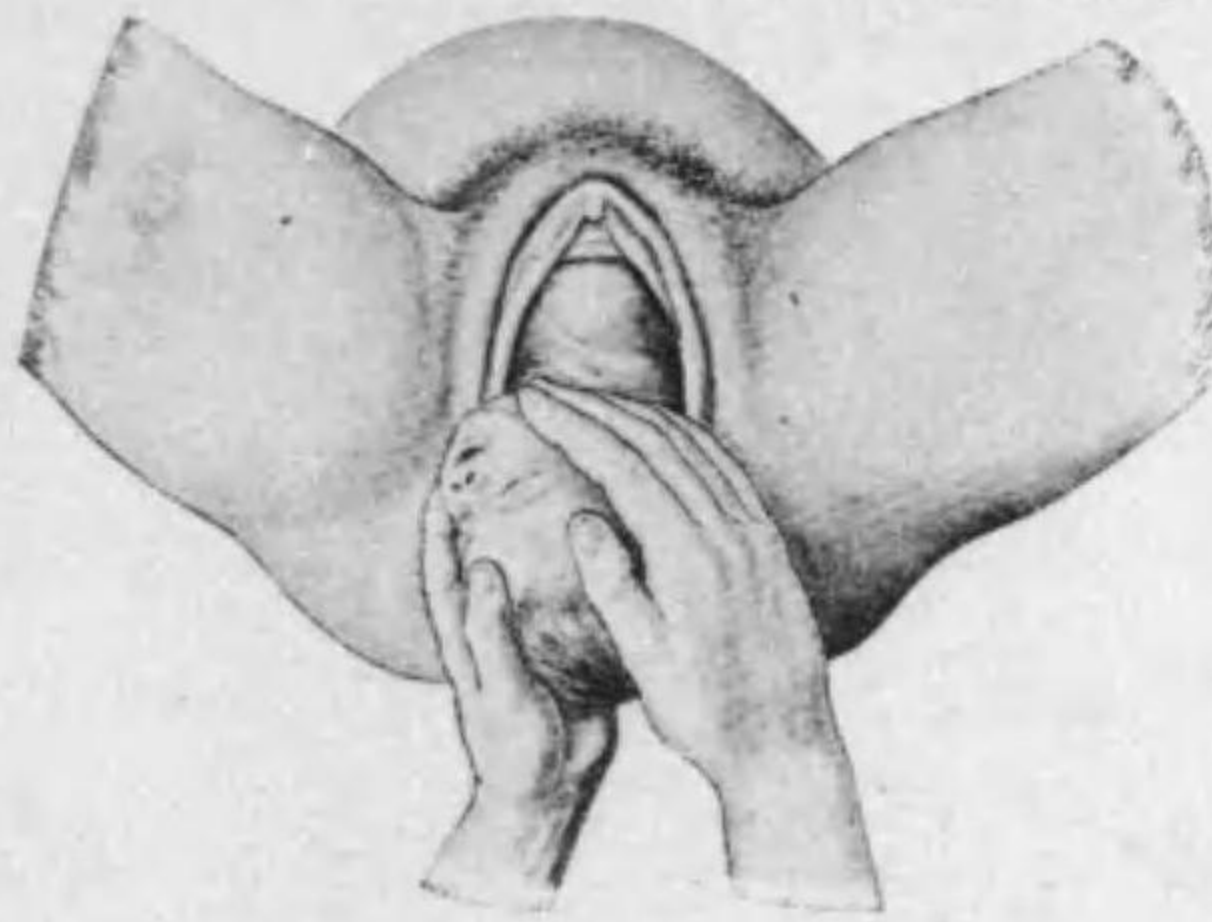
二、他側の手即ち後在肩胛部と異名の手(例ば第一胎向にては右手)の示指を兒の背面よりして深く後在の腋窩に挿入し、中環及び小の三指はこれを手掌内に屈し、其中指の示指側を兒の上膊の外側に當てて示指を押し、拇指はこれを肩胛部に置いて以て後在肩胛部を固く握り、且つ其手掌上に兒頭を載せ、

三、今迄兒頭を受けたる手はこれを直に前在する肩胛部及び頸部に當てて上下の兩手互に相壓

しつづつ産婦の後下方に向うて兒を牽引する時は恥骨弓下に前在肩胛部娩出す、次で四、兩手に力を入れて兒體を牽引しつづつ産婦の前上方に骨盤誘導線の方に廻轉せば肩胛部續て兒の軀幹娩出す。

圖三十九百第

(作操一第)術出挽部胛肩
すとんせ出挽部胛肩在前てし引牽に方下後を頭兒



圖四十九百第

(作操二第)術出挽部胛肩
すとんせ出挽部胛肩るす後てげ上き引に方上前を頭兒



若し指頭腋窩に達せざる時は兒頭を兩頤側より挟み注意して後下方に下ぐれば前在肩胛部前進す(第百九十三圖を見よ)。次でこれを前上方に上ぐれば後在肩胛部娩出す(第百九十四圖を見よ)。

萬一以上の方法無効ならんか、

産婦の後方に在る兒の四肢を後に進ぶる上肢解出法によりて解出娩出せしめ、その上肢と頭部とを一所に握りて先づ前上方に、次で後下方に前後即ち上下の振り様運動を行ふ時は目的を達することを得。

臍帯切斷術

初生兒が娩出後活潑に啼泣するや普通四乃至五分にして臍帯の搏動全く止み、この間に於て胎盤より約五十乃至六十珦の血液が初生兒の心臓内に流入して兒の發育を助く、故に本術は異常ありて止むを得ざる場合を除きては常に必ず臍帯搏動の全く停止せる後に於て、次の如く行ふべし。

臍帯切斷術式

- 一、豫め殺菌消毒せる臍帯結紮糸(普通麻を用ふ)を以て臍輪を去る約二指横徑の所に第一結節を置き、更にここを去る約二指横徑の所に第二結節を行ふ、結紮時には兩手の拇及び示指を以て結紮部の膠樣質を左右に擦りて其部をなるべく細くして以て結紮を固くして以て後來その弛緩滑脱して臍帶出血を起すことを豫防すべし、次で
- 二、左手掌内に兩結紮部を載せ、右手に臍帶剪刀(第百八十八圖を見よ)を取り、其中央部を剪斷すべし、この際血液が四方に飛散するを防ぐために剪刀の上をガーゼ又は脱脂綿

切斷の時期
及び其理由

術式

にて被ふべし。
三、かくして剪断せば直に胎兒側の断端を消毒せる「ガーゼ」又は脱脂綿を以て拭ひて出血の有無を検すべし。

第三項 分娩第三期に於ける處置

本期に於ては 一、子宮の收縮状態 二、出血の有無を監視し、これに異常なくんば後産期陣痛來り胎盤自然に剝離し排出さるるを待つべし。

(一)時々子宮の收縮状態を検す。一手掌を子宮體部に置きて其形状子宮底の高さを見る。と同時に其硬度を検す、正規の場合には子宮は適當度に平等に硬く、收縮し扁平球状に觸れ出血なし之れに反し子宮弛緩し子宮底上昇し出血存する場合には先づ子宮の收縮を促進すべし即ち

産褥子宮收縮促進法

(イ)膀胱の充否を検し、必要あらば導尿(第一四頁を見よ)を充分に行ひ、

(ロ)子宮底部乃至體部を輪狀に摩擦し、

(ハ)子宮體部の氷巻法を行ふ(第九頁を見よ)。

(二)後産期陣痛の有無及び其性状を注視し、

(三)出血の有無を検す、但し此期に於ける出血は 一、子宮の收縮不全による場合と

分娩第三期に於ける出血の原因

二、裂傷による場合とあり、而して其鑑別は

(イ)裂傷による場合は 1.子宮の收縮佳良なるに拘らず 2.胎兒娩出直後より 3.鮮紅色の血液が 4.絶えず流出し、

(ロ)子宮收縮不全による場合は 1.子宮の收縮不完全にして軟かく 2.胎兒娩出後一定時間の後に 3.暗赤色にして屢々凝血を混せる血液が 4.發作的に流出し 5.子宮底の摩擦又は壓迫によりて出血量を増加す。

裂傷による出血と弛緩による出血との鑑別
出血時の處置

以上の諸點より其依りて來る原因を探し(甲)其輕度の場合には 上記の子宮收縮促進法又は壓迫法後に詳かなりによりて止血せしむることを得れども (乙)其強度の場合には直に醫治を乞ふべし、然らずんば短時間中に強き大出血を來したために母體の死を招くこと決して稀ならざればなり。

(四)後産の娩出除去 かくして胎盤自然に子宮壁より全く剝離し下降し來るや次に述ぶる如き徴候を呈するを以て、かかる場合には腹壁外より子宮を軽く壓迫すれば胎盤は陰裂間に娩出す、然る時は

これを兩手掌を以て受け、これを徐々に一定の方面に捻轉せば漸次に卵膜が振れたる索状となりて娩出し來る(第九十五圖を見よ)。

若しこの際卵膜の一部強く子宮壁に癒着して其剝離困難ならんか忍耐して上記の一定方向の捻轉を續行し決して牽引を行ふべからず、かくして多くはこれを除去することを得れども時に其一部を残して中途より離断することあり、然る時は

後産娩出を急ぐ場合

圖五十九百第

の計時なれこけ受に掌手兩を盤胎状るす轉廻に方向じ同と轉廻の針



其斷端にベアン氏又はコッヘル氏止血鉗子を掛けて更に一定方向に捻轉して出來得る限りこれが排除に努め而も不充分ならんか速かに醫治を乞ふべし。かくして後産は自然に完全に娩出せしむるを理想とす而してそのためにはなるべく自然に監視し、常に子宮底部の摩擦或は臍帯の牽引等を行はざるにあり。然れども次の如き場合には其娩出を急がざるべからず。
(イ) 出血多量なる時。

クレイデ氏胎盤壓出法

(ロ) 胎兒娩出後二時間以上経過せる時。
(ハ) 産婦に熱發其他の異常ある時。

クレイデ氏胎盤壓出法

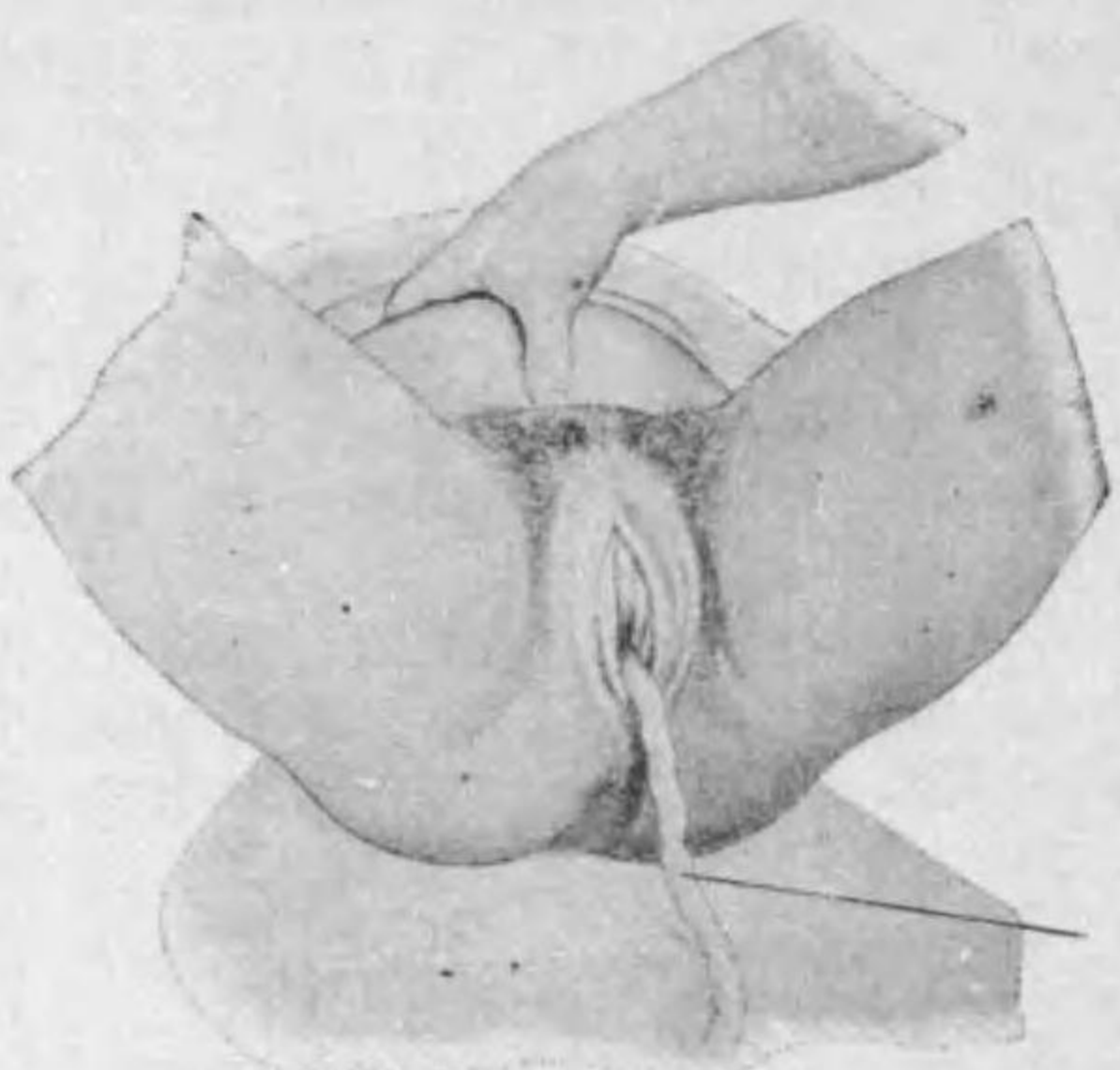
本法はかかる場合に應用さるるものにしてこの際臍帯の牽引の如き忘れてもこれを行ふべからず、これ決して目的を達せざるのみならず強き出血子宮内膿症の如き恐るべき結果を起せばなり。

クレイデ氏胎盤壓出法實施法(第九百九十六圖を見よ)

一、産婦を仰臥せしめ、下肢を股及び膝關節にて強く屈曲せしめ、且つ股間を充分に開か

圖六十九百第

き付手の法出壓盤胎氏テイレク



二、膀胱を充分空虚にし、
三、子宮底部を輪狀に摩擦して、子宮が強く收縮するや、
四、普通右手を以て其拇指を子宮前壁に、残る四指を子宮後壁に當て、以て子宮底部を前後より把持し、これを五、骨盤誘導線の方角に向うて強く壓定すべし。
注意、本法は一回にて奏効せざる事あるを以て兩三回上記注意の下に規則的にこれを

胎盤剝離の徴候

以上の方法によりても尙ほ目的を達し得ざる場合には速に醫治を乞ふべし。
胎盤剝離の徴候
胎盤の大部分既に子宮壁より剝離し、腔腔内に排出さるるや、次の徴候を呈するを以て

多くは腹壁外よりこれを推知することを得。

一 今迄卵圓狀にして圓みを帯びたる子宮底部は扁平となり稜角狀に觸れ、子宮は寧ろ細長くなり、従つて子宮底の高さ多少上昇す。

二 子宮は非常に動き易くなり、

三、而も臍帶は子宮の運動と共に移動することなし。

四、臍帶は陰門外により長く脱降す。

五、恥骨縫合上縁に於て卵圓形の軟き膨隆部を認む。

(五) 褥婦の清潔及び更衣、かくして分娩全く終らば

(イ) 石炭酸又はリゾール溶液に浸したる布片又は脱脂綿を以て外陰部及び其附近を充分に清拭したる後、

(ロ) 會陰、腔入口、陰核及び其附近等に裂傷の存否を検すべし、但しこの際臀部を上舉し又は強ひて陰唇を強く開くべからず、ために外氣が内陰部に進入して空氣栓塞を來す恐あればなり、かくて何等特別の異狀なくんば、

(ハ) 外陰部に消毒綿又は殺菌ガーゼを當てて以て傳染を豫防し、其上より丁字帶を以て壓定し、腹帶を適當度に懸け、産床を清潔にし産衣を更へ、保温して、兩下肢を接着せしめ、安靜に仰臥睡眠せしむ。

(六) 爾後の監視、初生兒及び後産の精檢、分娩經過の記載

爾後尠くとも二時間褥床に待して褥婦の一般狀態殊に子宮の收縮狀態、出血を監視し、變に應じて上記の處置を取り、其思はしからずんば速かに醫治を乞ふべし、この間に於て初生兒に於ては其發育の度、畸形又は損傷の有無、生活狀態の健否、臍帶出血の有無等、後産に於ては其排出の完全なりや否や、病的變化の存否、損傷の有無等を精密に檢査し、更に進んで分娩經過の記載を行ふべし。

第四節 分娩直後に於ける初生兒の處置

分娩直後に於ける初生兒が強健にてよく自然的呼吸を營み高聲に啼泣する場合には、暫く上記の處置をし母體の股間に靜臥せしめ、直に上記母體の監視殊に子宮の收縮狀態と出血とを注視し、其異常なきを知らば、母體の監視を助手に委ねて初生兒を以下述ぶる如く處置すべし、世間往々胎兒娩出するや、總ての注意を初生兒に傾け、ために母體の生命を危険ならしむることあり注意すべし。

一、沐浴、上記の臍帶剪斷を終らば直に豫め用意したる浴槽に於て兒體を清潔にすべし、此際若し胎脂が多量に附着せる場合には先づオレオフ油、卵白又はワセリン等を塗りこれを摩擦して去りたる後、攝氏四十度内外の浴湯中にて血液、粘液、羊水、胎糞等の不潔物を洗ひ去るべし、此際若し石鹼を使用するならば、なるべく無刺激性のものを

選び、(石鹼の良否鑑別法は第三一頁を見よ)、皮膚を刺戟せざる様損傷せざる様留意するは

圖七十九百第

き付手の時浴沐
其り握て於に部節關節を腕兩の兒て以を手左
を孔道體外てし定壓を鼓耳の兒て以を背指拇
(藏所者著) すに潔清を兒て以を手右き塞



勿論耳孔、口腔内に浴水の入らざる様第百九十七圖示すが如くすべし。

二眼、口の清潔 はこれを決して浴湯を用ひず、別に備ふる清水を軟き布又は綿に浸して極めて静に微傷だも生せしめざる様丁寧に清拭すべし。

三クレイテ氏點眼 はなるべく早く分娩後三十分以内に於て

行ふべし、即ち 左手の拇及び示指を以て上下兩眼瞼を開き、右手に二%五十倍の硝酸銀溶液を有する點眼器を取り、其一滴を角膜中央に滴下すべし、此際使用する硝酸銀溶液は必ず新鮮なるものならざるべからず、其舊きものは刺戟作用強く、強き結膜炎を起せばなり。

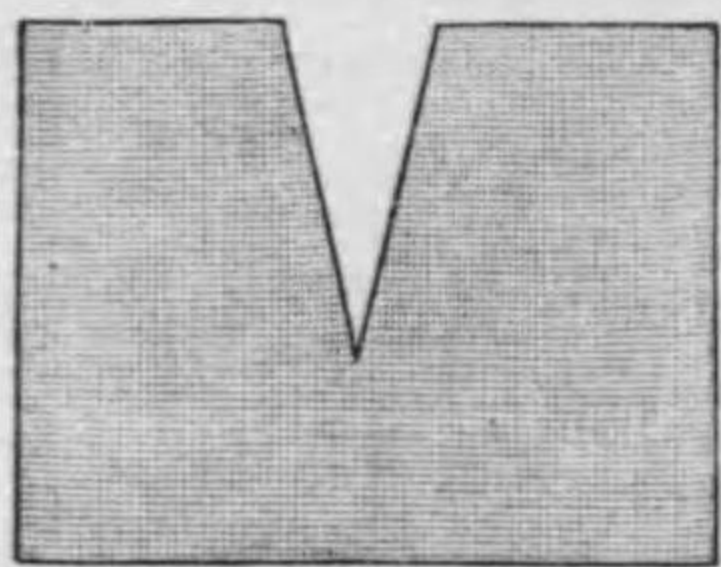
本法の目的は分娩時母體生殖器内の淋菌の感染によりて生ずる恐るべき初生兒膿漏眼(初生兒膿を見よ)を豫防するにあり、母體に淋毒の有無に拘らず、必ず行ふべし。

四沐浴後の處置 かくして沐浴を終らば

點眼

圖八十九百第

形雛「セーガ」む包な帶臍



(イ)豫め温めたる「タオル」を以て兒を包み、體表殊に腋窩、股間、其他の皺襞に富む部分の水
分を丁寧に拭ひ去り、兒の冷却を防ぎつつ體重を測り、

(ロ)臍帶結紮の完否、臍帶出血の有無を注視し、次で、

(ハ)臍帶を施す、即ち約二寸平方の「ガーゼ」三、四枚を重たるものを取り、其一邊の中央に約一寸許りの切り込みを作りたる布片(第百九十八圖を見よ)の消毒せるものにて、其切込みの中に臍帶を入れて包み、これを左上方に曲げ(血管を胎生時に於けると同一の方向に向はしむるためなり)其上を臍帶或は卷軸帶(第百九十九圖を見よ)又は小なる多頭帶を以て軽く纏絡固定す。

(ニ)この間に於て更に兒體の検査を充分に行ひ、次で

(ホ)着衣せしむ 衣服及び襪等總て皮膚に直接する布片は木綿の軟きものを用ふべし、毛織物は皮膚を刺戟し、硬き物は皮膚を傷け、絹布及び金巾は保温の目的を達せざるを以て使用すべからず(第三三頁を見よ)又染色せる布は皮膚の不潔を來すのみならず、時に染料のため、皮膚に意外の刺戟を與ふることあるを以て白色のものが宜し、衣服は寛潤なるものを緩く着け且つあまり厚着せしめず、大人より僅に厚くし、其他は湯婆室温等にて調節すべし、頭部は寒冷時に於ては眞綿を以て被ひ冷氣を避くべし。

(ハ)臥床は時季に應じて適當に温め、湯婆等を用ふる場合には火傷を起さしめざる様注意し(第三頁を見よ)必ず褥婦と別にし、常に側臥せしめ且つ時々左右向きを變換すべし然らざれば吐出物其他を嚙下し甚だしきはために窒息することあり又一方にのみ側臥せしむれば兒頭に不規則なる變形を來す。

(ト)檢温すべし但し此際湯婆の影響を受けざる様注意すべし。

五爾後絶えず一般状態を注視し若し呼吸淺く不正顔面蒼白體温の下降等あらば覺醒せしめ背部を輕打して啼泣せしめ以て深呼吸を營ましめ又は沐浴せしめ或は Hoffman 氏液の注腸等を行ひ速に醫治を乞ふべし。

第五編 正規産褥

第一章 産褥の定義

産褥
授乳婦
産褥婦

産褥とは妊娠及び分娩による母體の生殖器及び全身の變化が妊娠前の状態に復舊するまでの期間を云ひ普通六乃至八週日を要す。一般に授乳婦(乳を與ふる婦人)を云ふは其然らざるものに比し迅速且つ完全なり。此期間の婦人を産褥婦又は褥婦と云ふ。

第二章 産褥に於ける復舊作用

産褥復舊作用

産褥に於ける復舊作用とは産褥子宮の縮小と産道創傷の治癒とを云ひこれを一生殖器に於ける變化と二腹壁に於ける變化とに大別することを得。

第一節 生殖器に於ける變化

(甲)子宮殊に子宮體部に於ける變化 次如。

一産褥子宮の位置は普通強き前屈前傾を取り扁球形且つ多くは右側に轉位す、これ主として左側大腸S字狀部の膨滿壓迫による。

子宮底の高さと産褥時日との関係

二、産褥子宮の移動性は著しく増し従うて膀胱直腸等の充滿の度褥婦の位置等により容易に其位置を變じ攝生宜しきを得ざれば遂に病的位置をとるに到る。
 三、産褥子宮の容積は時日を経過するに従うて漸次縮小し約六乃至八週日の後には舊態に復すれども普通多少の肥厚を残すものなり更にこれを詳述せんか次の如し。
 (イ) 其大さ殊に子宮底の高さと産褥時日との関係は橋爪哲造氏によるに次表の如し。

産褥時日	子宮底の高さ	
	恥骨結合上縁よりの距離	臍下三指横徑
分娩直後	一・七五種	臍下三指横徑
第一日	一五・二〇種	臍高
第二日	一三・二三種	臍下二指横徑
第三日	一一・四八種	臍下三指横徑(分娩直後に同じ)
第四日	一〇・一一種	臍と恥骨結合上縁との中央より上方二指
第五日	九・〇〇種	同 上方一指横徑
第六日	八・一二種	臍と恥骨結合上縁との中央
第七日	七・〇五種	同 下方一指横徑
第十日	五・五・六・〇種	恥骨結合上に僅に觸る
第十四日		腹壁外より觸れず

かく子宮底の高さは分娩直後より漸次上昇し分娩十二時間後に於ては臍窩の高さに

子宮の重量と産褥時日との関係

達し爾後漸次下降し産褥第三日に到りて初めて分娩直後に於けると同高となるかく子宮底が一時上昇する理由は主として骨盤底諸筋の緊張及び今迄膨大せる子宮が分娩によりて急に縮小したるため膀胱内に尿が比較的迅速に充盈するためにしてフランク氏によれば膀胱内に尿が百瓦たまれば子宮底は約一握上昇すと云ふ故に子宮底の高さを定むるには常に排尿後にすべきなり而して上記子宮縮小の度は初産婦は經産婦よりも著しく經産婦に於ては分娩回数を重ねるに従うて弱く年齢に關係すること極めて少し。

(ロ) 其重量の關係は次の如し。

産褥時日	産褥子宮の重量
分娩直後	一〇〇〇瓦
第二日	七五〇瓦
第一週	五〇〇瓦
第二週	三〇〇—三五〇瓦
第五週	二〇〇瓦
第八週	五〇—七〇

未産婦子宮の重量は平均六十五瓦なり

子宮腔の長さ

(ハ) 其子宮腔の長さの關係はハンゼン氏によれば次の如し。

産褥時日	子宮外口より子宮底部に到る長さ
第十日	一〇〇〇
第十五日	九九〇
第三週の終	八八〇
第四日	八〇〇
第五日	七五〇
第六日	七一〇
第七日	六九〇
第八日	六七〇
第九日	六五〇
第十日	六五〇
第十二日	六五〇

産褥子宮の組織的變化

(四) 産褥子宮の組織的變化
 (イ) 増殖せる血管 分娩後血液輸入の衰へる結果、貧血に陥り、ため、漸次萎縮し、約四週日後に於て妊娠前の状態に復す。この變化は後陣痛により著しく促進されるものなり。

(ロ) 増殖せる血管 血栓が形成され、管腔は閉鎖し、遂に消滅するが、一小部分は結締組織に變化す。

(ハ) 増殖せる結締組織 も一部は變性し、吸收さるるが、一部は永く存在す、これ多産

子宮内壁に於ける變化

婦の子宮が生理的に硬く、且つ多少肥厚し居る原因なり。

五、子宮内壁に於ける變化

(イ) 脱落膜の剝離面 は微細なる凹凸あり、且つ多少出血す、分娩時子宮内壁に附着して殘留せる脱落膜下層は、其一部は壞死に陥り、脱落して、惡露中に排泄せらるれども、大部分は新子宮粘膜炎の形成を司り、約六週日にして完成さる。

(ロ) 胎盤附着部剝離面 は其廣さ分娩直後に於ては手掌大にして、少しく隆起し、凹凸不平にて、凝血附着するも、漸次時日を経るに従うて、創面漸次縮小し、平滑となり、四乃至六週の終りには表面全く平滑となり、第三ヶ月に到れば全く治癒して、其痕跡をさへ證明し得ざるに到る。

以上子宮内壁に於ける創面よりは、多量の創傷分泌あり、これに脱落せる細胞、凝血等混じて、病原菌の傳染繁殖に最も適するを以て、消毒を嚴重にし、且つ子宮の收縮をよくして、是等物質の子宮腔内に滯溜することを豫防するは、實地上極めて大切なることなり。

(乙) 下子宮部及び頸管部に於ける變化

子宮内口は三日目には僅に一指を通じ、普通十日後には閉鎖し、三乃至四週後には子宮消息子を通し得るのみになる。頸管部が妊娠前の状態に復するには、普通四乃至六週日を要し、而も多少の瘢痕を殘す。

(丙) 子宮腔部に於ける變化

子宮外口は第三週にして僅に消息子を通し得るに到るも横裂し、多少の肥厚及び瘻痕を残すために子宮腔部は多少太くなり、硬度不等にして、表面凹凸を呈するに到る。

(丁) 腔に於ける變化

普通第四週に於て舊に復すれども、多少廣くなり、壁は平滑となり、多少弛緩し、時に瘻痕を残すことあり。

(戊) 外陰部及び會陰に於ける變化

小なる裂傷は二乃至三週にて治癒し、別に瘻痕を残さざれども、處女膜は常に必ず其基底部まで断裂したために小片となりて懸留す、會陰破裂は瘻痕を形成し、且つために陰門多少哆開し、そこより腔壁の一部翻轉露出す。

(附) 月經及び排卵の關係は

授乳婦に於ては普通一ヶ年間位月經を見ざれども(例外あり)授乳せざる場合には普通産褥を終れば月經來潮するが、個人により其時期、一定せず、之れに反し排卵機能は早くより行はるるものの如し、これ屢々分娩後月經を見ずして而も妊娠することの決して稀ならざればなり。

第二節 腹壁に於ける變化

腹壁は多少の弛緩を残し、その度は分娩を重ねるに従うて強し、正中線の着色は漸次に

消失し、新妊娠線は漸次に青白色乃至白色となり、遂に舊妊娠線となり、永く其痕跡を留め、腹直筋の離開も漸次閉鎖するものなり。

第三章 惡露

惡露とは産褥時に生殖器より排泄せらるる分泌物を云ひ

其成分は主として産道創傷面よりの分泌液にして、これに血液、粘液、脱落せる細胞或は組織及び細菌を混す。

其性状は一種の腥さき臭氣を發するも惡臭あることなし、初めは中性又はアルカリ性なれども後には酸性となる産褥の時期により其着色及び量を異にすること次に述ぶるが如し。

其種類は子宮腔内より排出さるるを子宮惡露と云ひ、腔腔よりするを腔惡露と云ふ、産褥第一乃至第三日頃までは血液に富み暗赤色を呈して所謂血性惡露として流出し、其量多し、第三日以後は肉汁様の所謂漿液性惡露となり、漸次其量を減じ、第八乃至第十日目頃よりは帶黄白色を呈し所謂白色惡露となり、普通第四乃至第六週の後に全く停止す。一般に授乳婦は其量少く、其持續短し、貧血、虛弱、下痢、發汗の場合亦同じ。

第四章 褥婦の乳汁分泌作用

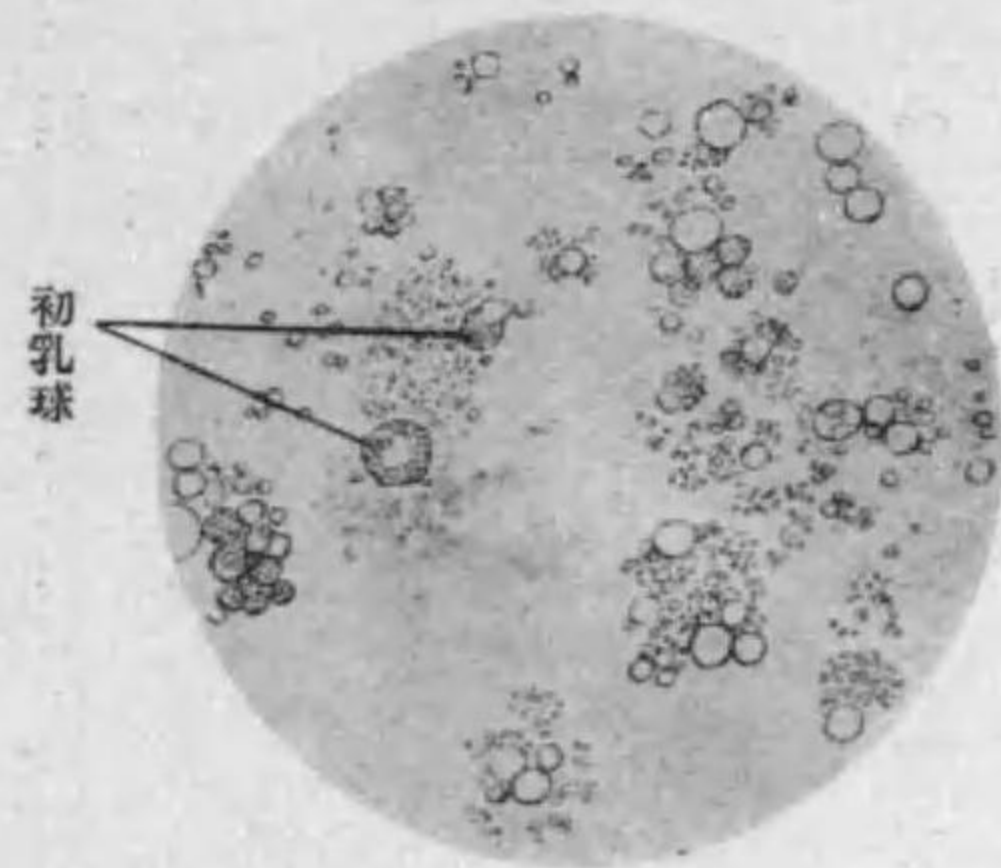
初乳

乳腺は既に妊娠の初期より發育を始むるが産褥に入るや急に盛んに發育すために乳房は急に強く充實緊満し、其中に結節状又は索状の硬き腺實質を觸るるに到り、初めは水様透明にして少しく粘稠なる液即ち初乳或は前乳を壓出するが漸次に其性質を變じ産褥第四日目頃に到れば所謂成乳に移行す。

初乳はこれを顯微鏡にて視れば第百九十九圖示すが如く小球状を呈する乳球の間に大なる梁實状を呈する初乳球なるものを含有し、且つ比較的少量の鹽類を含むために通痢の作用あり、これを與ふれば胎糞を充分に排泄せしむることを得るの便あり、其成分及び成乳との比較次表の如し。

圖九十九百第

見所的鏡微顯の乳初

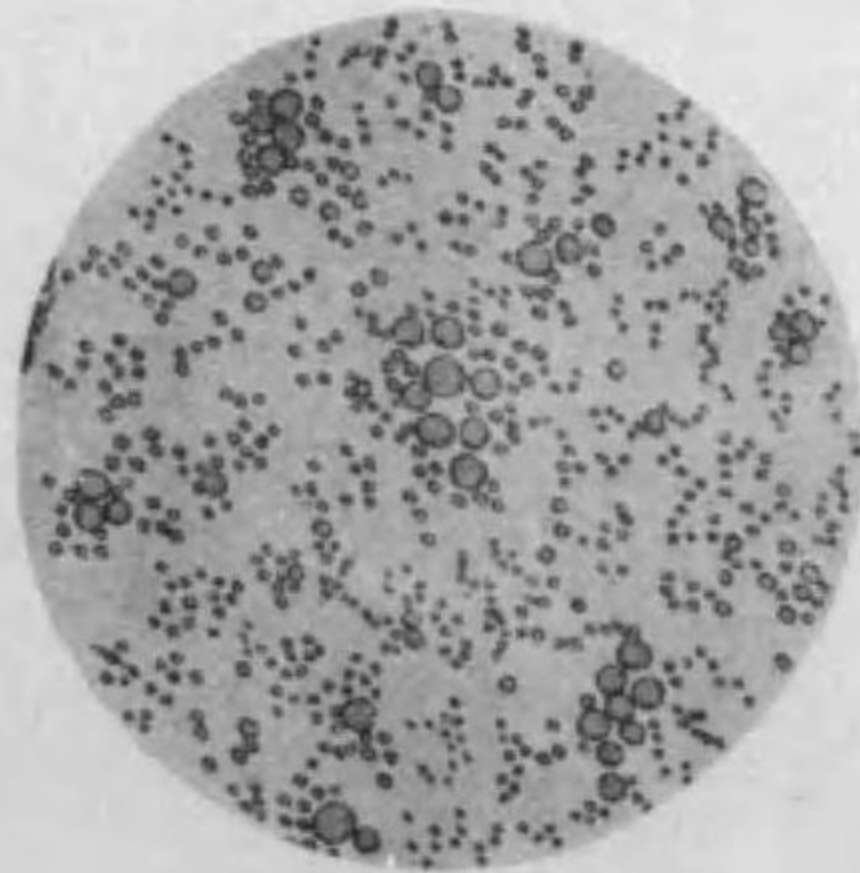


初乳球

圖百二第

見所的鏡微顯の乳成るけに目日十第褥産

其、てしに球脂肪は球小るな々種小大りな乳質、程るな大同てしに小のさ大



成乳

成乳又は常乳 白色不透明にして甘味を有し、顯微鏡にて視れば第百圖示すが如く殆んど同大の小球形をなす乳球と水分とより成る、乳汁の性質のよき者程乳球の大きさ同大にして水分とよく混和するものなり、而して其主なる成分及び牛乳、山羊乳との比較次表の如し。

成分	人乳	牛乳	山羊乳
水分(%)	八七・〇	八八・〇	八七・〇
蛋白質(%)	一・二	三・五	三・五
乳糖(%)	七・〇	四・〇	四・四
脂肪(%)	三・五	三・五	四・〇

牛乳との相違點

而して其の牛乳との主なる相違點は 次の如し。
 一、人乳は全く無菌的なること。
 二、人乳は牛乳に比し乳糖量多く、之れに反し蛋白質少し。

分泌量

影響事項

三、人乳の蛋白質は牛乳のそれに比し消化され易し。
 乳汁分泌量は産褥の進むに従うて増加し、普通産後八ヶ月頃までは漸次増加し、それより漸次減少し、一乃至三年又はそれ以上に互りて持続す。
 其一日の分泌量は種々なる關係により差異あれども、大凡一日平均三百乃至四千珣の間を動搖し、分娩後時日を経るに従うて増加すること前に述べたるが如し。
 乳汁の分泌量及び性質に影響を及ぼす主な事項は、次の如し。
 一、遺傳 分泌多き遺傳ある婦人は多くは分泌量豊富なり。
 二、褥婦の體質並に栄養の佳良なる程益々分泌量多く性質佳良なり。
 三、物理的の刺激 例ば乳房を冷却すれば其量を減じ、按摩すれば其量を増す、尚ほ乳汁分泌は乳腺腔を空虚にする程其量を増す、故に授乳の際には哺乳せしめたる一方の乳房中の乳汁が殆んど全く無くなるまで哺乳せしめ、決して中途にて他方の乳房と取り換ふべからず。
 四、疾病 下痢高熱發汗等は其量を減じ、脚氣は乳兒脚氣を起す危険あり、又微毒は乳兒に傳染する恐あり。
 五、飲食物殊に藥品のある種類のものはその一部が乳汁中に入り、ために乳兒に作用することあり、注意すべし。
 六、年齢及び經産回数 十五乃至二十歳にありては蛋白質及び脂肪分多く、乳糖少し、然るに二十乃至三十歳にありては蛋白質少く、乳糖量多し、又初産婦は經産婦に比し水分富み、蛋白質脂肪及び乳糖量少し。

第五章 正規産褥の経過

褥汗

褥婦は分娩後に於て多少の疲勞疼痛を訴ふるの他は却て爽快を感じ、眠り易くなり且つ其際發汗し易し、これを褥汗と云ふ、發汗時の處置は第十一頁を見よ、又時に惡寒を來すことあるも普通發熱を伴はず、そのは分娩時の冷却過勞のために來るものにして憂ふるに足らず。

一、體温 は次の場合、即ち 一、産褥初期に於て五分以下に於ける上昇、二、産後十二時間以内及び産褥第三乃至第四日に於て三十八度内外の上昇、を除きては常に三十七度内外にて三十八度以上の上昇は常に病的と心得べし。第二の場合の體温上昇はこれを乳熱又は吸收熱と稱し、乳汁又は惡露の排泄を充分ならしむれば下降するものなり、若し下熱せざれば病的と心得べし。
 二、脈搏 分娩直後産褥第三日目及び肉體的或は精神的刺激ある時等に於ては多少頻數となれども、其他の場合に於ては一般に緩慢にして一分間に五十乃至六十に過ぎず、これを産褥性遲脈と云ひ、肉體的及び精神的安靜循環系統の變化等が其原因をなす。若し産褥に異常起る時は先づ必ず體温と脈搏とに變化を起し來るものなるを以

産褥性遲脈

て、特にこの二點には、周密なる注意を拂ひ、病變をなすべく速に發見する様心掛くべし。

三、呼吸は胸式となり多少緩慢となる。

四、食慾は産褥第一日は寧ろ減するも、第二乃至第三日目頃より増し、漸次平常に復し授乳する場合には寧ろ著しく亢進す。

五、便通及び利尿は、褥婦は便秘する傾向あり、ために發熱の原因をなすことあり、尿は多少増加するも産褥初期に於ては、1 腹壁弛緩により腹壓不十分なること、2 分娩時に尿道膀胱の損傷あり排尿時疼痛あること、3 腹腔内壓が急に變せること、4 褥婦の位置が排尿に不便なること、等のため尿の排泄不十分又は不可能にてために膀胱炎の原因をなすことあるを以て注意すべし。

第六章 娩出後に於ける初生兒の状態

娩出後の初生兒に視る主なる變化を擧ぐれば次の如し。

一、臍帶脱落 剪断せる臍帶の殘端は漸次水分を失ひ乾燥萎縮して細く硬くなり黒色を呈し、臍輪部の皮膚は軽く輪狀に發赤するが普通分娩後五乃至七日にして其輪狀發赤部より脱落す而して其脱落せる面は初め發赤し濕潤して創面を呈するが、漸次表皮を以て被はれ普通分娩後十二乃至十五日にして瘻痕を形成し強く攣縮するため陥没して臍窩を形成す、然れども其間に於て消毒不十分なる時は容易く傳染を起して

兒の生命を失ふことあるを以て充分なる注意を要す。

二、表皮の落屑 表皮は分娩後三乃至四日目頃より糠狀又は膜狀に剝離落屑す、これ皮膚の乾燥と衣服による刺戟とのためなり。

三、初生兒黃疸 初生兒は其大半に於て生後二、三日目頃より皮膚殊に前額、鼻梁、胸部等に黄色の黃疸様着色を來し、普通一週間内外にて自然に消褪するも時に二週餘日に互ることあり、其原因に就ては目下尙ほ不明なれども、豫後は概ね佳く、佳くしたために特別の障礙を來すことなし、唯あまり高度にて長く持續する時は便通に留意し場合によりは醫師の診療を受くべし。

四、乳房の腫脹 生後三乃至四日目頃より男女の區別なく兩側の乳房腫脹し、初乳様の分泌物即ち魔乳又は鬼乳を壓出することを得ることあり、其原因尙ほ不明なるが豫後概ね佳良數日にして腫脹減退し、舊に復するが、稀に化膿することあるを以て注意を要す。

五、尿は普通娩出直後に排泄さるるが時に生後第二日目に到りて初めて放尿することあり、尿量は生後第一日最も少く五乃至五十珦に過ぎざるが漸次増量す、回数は二十四時間に十回内外なり、時に尿中に黄褐色の細粉を混することあり、これ尿の成分なる尿酸鹽類の排泄さるるにて別に異常と認むべきものならず。

六、便通は普通一晝夜間に三乃至四回にして生後三乃至四日間は黒色又は暗綠色に

第五編 正規産褥

して粘稠なる便即ち胎糞又は胎便或は胎尿とも云ふを全量約七十乃至百瓦を排泄し漸次に黄色泥状となり軽き酸臭を發す、然るに若し消化不良を起すや、綠色粘稠となり其中に乳顆粒と稱する白色微細なる顆粒を混するに到る。

胎糞は胎兒が子宮腔内に生活せる間に其腸内に蓄積せるものにして、其成分は毳毛、胃腸の上皮細胞、脂肪球細菌膽汁色素及び種々なる形をなす帶黃綠色の胎糞球より成る。

七、體温 は分娩直後に於ては約一乃至二度下降するも、一乃至三時間後より上昇し、十乃至十五時間後には三十七度に達し、以後約三十七度五分を保つも甚しく動搖し易し。

八、呼吸 は専ら腹式にして不規則、其數大凡一分間に四十内外なり（成人の約二倍）。

九、脈搏 は一分間に百二十乃至百四十なり、分娩直後、初生兒の血液の全量は臍帶を早期に切斷せる場合には體重の十四分の二乃至十六分の一に過ぎざるが、搏動停止後切斷せる場合には十分の一乃至十一分の一に相當す、これ臍帶剪斷は其搏動停止後に於て行ふべき所以なり。

十、體重 生後三、四日間は全量に於て約二百瓦減するも、八乃至十日目頃に到れば分娩直後に復し、以後漸次増量すること大凡次の如し。

分娩直後	第一ヶ月の終	第二ヶ月の終	第三ヶ月の終	第四ヶ月の終	第五ヶ月の終	第六ヶ月の終	第七ヶ月の終	第八ヶ月の終	第九ヶ月の終	第十ヶ月の終	第十一ヶ月の終	第十二ヶ月の終
三〇〇〇瓦	三八〇〇瓦	四六〇〇瓦	五三〇〇瓦	六〇〇〇瓦	六六〇〇瓦	七一〇〇瓦	七五〇〇瓦	七八五〇瓦	八一五〇瓦	八四〇〇瓦	八六五〇瓦	八八五〇瓦
			二〇乃至三〇瓦				一五瓦				一〇瓦	
一日の平均増加量												

即ち生後第四ヶ月の終りに約倍量に、第十二ヶ月の終りに約三倍量に増加するものなり。

十一、大腸門の閉鎖は普通第十三ヶ月頃なり。

十二、消化器 胃は其位置殆んど鉛直なるを以て非常に嘔吐し易し、故に其取扱を靜にせざるべからず、又消化作用一般に微弱なるを以て榮養法に充分なる注意を要す。

十三、五官器 視覚は生後一週日間は唯明暗を辨するのみ、聴覚、味覚、嗅覚等は非常に不十分なるか又は全くこれを缺く之れに反し觸覚は比較的よく發達す。

十四、兒斑又は腎斑 は薦骨部皮膚の藍青色斑にして亞細亞人種(日本支那等に)著しく六、七歳前後まで存在することあり、其原因不明にて何等病的意味なし。

第七章 正規褥婦の看護法

一、褥室 は清潔にして廣く明るく且つ換氣充分室温攝氏十八乃至二十度を可とす。

二、褥床 は寧ろ硬くして清潔を旨としなるべく白き物を用ふべし餘り軟きは却て發汗を助くるの不利あり。

三、褥衣 は清潔にして保温に適するものを可としなるべく白き物を用ふべし、これ些の汚點も直に發見することを得ればなり。

四、就褥 は勤くとも一週間出來得べくんば二週間又はそれ以上なるべし、而して初めの兩三日間は仰臥せしめ、それ以後は左右交代に側臥せしむべし、餘り嚴重に長く仰臥せしむれば子宮後屈症(子宮が頸部の所にて後方に屈曲する疾患を云ふ)を起す危険あり。

五、離床 は生殖器の復舊作用の良否、惡露の性状及び褥婦の一般状態を斟酌して定むべきものにて一定せざれども、一般に七乃至十四日後に離床せしめ、第四週後にて入浴せしめ、靜に運動せしめ、第六週後に於て徐々に家事を行はしめ、次で交接を許すべきなり。

なり。

早期離床 とは正規分娩を圓滑に終りたる健強なる褥婦に對し、既に分娩の翌日より起床せしめ、産褥第五、六日頃には多少の歩行を許す方法を云ふ、かくして一、排便を容易に且つ完全ならしめ、二、惡露の排泄をよくし、三、生殖器の復舊作用を助け従うて褥婦の全身状態を早く恢復せしむるの利益あり、然れども又一、子宮及び腔壁の下垂又は脱出を起し易く、二、出血を増す等の害あるを以て正規分娩を終り、出血及び傳染の恐なき褥婦は醫師の指揮監督の下にこれを試むるは敢て不可なきも、獨斷に濫用することはこれを絕對に禁止す。

六、陰部の處置 外陰部は分娩後一週間は勤くとも一日二回の消毒を勵行し、常に清淨に保つ様努むべし。即ち微温の消毒溶液、例ば1%の「リゾール」又は「リゾホルム」水、2%の石炭酸水、又は3%の硼酸水等に浸せる殺菌綿を以て丁寧に清拭し、後に數層の殺菌脫脂綿を當て、更に清潔なる丁字帯を掛けてこれを壓定し、以て傳染を防ぐと同時に惡露をよく吸出せしめ、適當の時間の後にこれを取替ふ、殊に排便、排尿後には必ず上記消毒を行ひ、醫師の回診ある場合には最後に交換せるものを保存して供覽すべし、尙ほ軽度の裂傷に對しては創面をよく清拭し消毒し、後に「ヨードホルム」「アイロール」「ツェオホルム」等を撒布すべし、腔洗滌は醫師の指揮命令なき以上決して行ふべからず。

七、排便、排尿 褥婦は一般に便秘の傾向あるを以てここに留意し、産褥第三日にして便

排尿法

通なくんば洗腸により(第一頁を見よ) 毎日又は隔日に軟便を排泄せしむべし、褥婦はかなり多量の尿が蓄積するも何等特別の苦痛を訴へず、又排尿するも常に不充分にしてために膀胱内に尿が過量に溜留して子宮の収縮不全、従うて復舊作用不全を起し更に進んでは尿が膀胱内にて分解し細菌の傳染を起して比較的容易に膀胱炎を來すものなるを以て常に規則的に且つ完全なる排尿を行はしむる様努むべし、既に分娩後六時間を經過し排尿なからんか、次の諸法により充分に排尿せしむべし。

- 一、異常なくんば上體を少しく舉げて放尿を營ましむ、但し強く努責するを禁す。
 - 二、膀胱部の温或は冷療法又は軽度の壓迫を加ふ。
 - 三、消毒せる微温湯又は冷水を尿道外口部に灌注す。
- 而も目的を達せずんば醫療を乞ふべしと雖も、止むを得ずんば、
- 四、消毒を嚴重にして導尿すべし(第一四頁を見よ)。
 - 八、體温脈搏を特に監視すべし、産褥第一週日間は少くとも一日二回測定すべし、三十八度以上は常に病的と心得、充分なる警戒を怠るべからず、以前は産褥第二三日目に來る發熱を乳熱として顧みざりしが近來はこの熱の存在を否定する學者多し、又脈搏の緩徐充實なるは産褥の好兆なるが其頻數にして軟細なるは屢々恐るべき産褥熱の前兆なるを以て速に醫師の來診を乞ふべし。
 - 九、飲食物 是一般に消化滋養性のものを選び、興奮刺激性のもの例は酒類強き藥味類

蓄乳の處置

瓦斯を生じ易きもの(芋類、茸類、昆布、茛瓜、慈姑等)はこれを避くべし、普通産褥第三日目頃までは流動食例は重湯、葛湯、スープ、(其製法第二九頁を見よ) 肉汁、牛乳水飴等を主とし、徐々に固形食を増し、第二乃至第三週に到りて常食に移行す、餘り長く流動食を續くは却て乳汁分泌を減退せしむるの不利あり。

十、乳腺の處置 乳嘴はこれを哺乳に便なる形となし、乳頭は常に清潔にして損傷なき様にし、若し損傷あらば常にこれを清潔に保ちて傳染を避け、且つなるべく早く醫治を乞はしむべし。

蓄乳の處置 授乳せざる場合には分泌過多にして乳腺強く緊満し劇痛あり、かかる場合に乳房を摩擦又は按摩し、或は搾乳器(第二〇一圖を見よ)により乳汁を吸出するが如きことは一時的のものなるを以てこれを避け、一、提乳帶によりて乳房を高く舉げて壓定するか、(第一七頁を見よ)、二、温又は冷療法を行ふか、又は、三、飲食物を制限するを

第一百二圖 搾乳器の圖



よしとす、而も目的を達せずんば醫治を乞はしむべし。

十一、腹壁の處置 腹壁は妊娠分娩を重ねるに従うて益々弛緩したために懸垂腹を起すに到るものなるを以て腹帯を應用し、且つ腹壁の收縮伸展運動を行はしめ、以て其弛緩及び腹直筋の離開を豫防すべし。

十二、子宮の收縮状態を監視すべし、分娩後子宮收縮佳良に

して且つ後陣痛が規則的にある場合には、産褥子宮の復舊作用は迅速に且つ完全に行はるるものなり、故に若しその不充分ならんか其依て来る原因殊に膀胱と直腸との充否に注意し、これを除去し加ふるに子宮底部の摩擦、子宮體部の氷囊貼布等を以てし、而も思はしからずんば醫治を乞ふべし、又後陣痛が過度に強く安眠を妨ぐる場合には、下腹部の濕温療法を以てし、効なくんば醫治を乞ふべし。

十三、惡露の性状を監視すべし、其着色、其量等の産褥期日に相當するや否や、惡露の存否、混合物例ば、凝血又は卵膜片或は胎盤片の存否等を注視し、其異常例ば其量過少にして惡臭を放ち、子宮收縮不良にして子宮底過高、同時に體温、脈搏の動搖等あらんか速かに醫師の診察を乞ふべし。

第八章 初生兒の看護法

一般に初生兒の處置は、褥婦の處置に先立ちて行ふべし、これ兒を清潔に保つ上に必要なり。

一、皮膚及び粘膜の看護 常に其清潔と乾燥とに留意すべし、發熱、發疹、癩爛、其他特別の事情なき限りなるべく毎朝授乳前に一回づつ攝氏三十八度乃至四十度位の温湯中にて三乃至五分間沐浴せしむべし、室はこれを密閉し、且つ冬季ならば豫め上衣、下衣、襪、襪、綳帶等を整へ、且つ温め置くべし、石鹼は刺激なきものを用ひ、丁寧に全身を清洗し、

此際特に耳孔内に浴水を入れざる様、感冒に罹らしめざる様、臍帶斷端を牽引せざる様、注意すべし。

かくして沐浴を終らば、豫め温めたる大タオルを以て速かに全身の水分を拭ひ去り、よく乾燥せしめたる後、臍帶帶を施し、着衣せしむ、此際若し頸部、腋窩、鼠蹊窩、關節部等の皮膚面が癩爛せんか、亞鉛華、澱粉、シッカロールの類を軽く撒布すべし、雖も其高度の場合には必ず醫師の診察を受けしむべし、爪は生後第二週後に到り毎週一、二回の割に剪去すべし、同時に眼、口を清潔にする場合には、決して浴湯を用ふることなく、別に備ふる清水を浸したる軟かき布又は綿を以て極めて静かに微傷だも出來ざる様注意して拭ふべし、雖も屢々ために微細なる損傷を作り、續て傳染を誘ふことあるを以て寧ろ勵行せず、單に其清潔を謀り、殊に口腔に於てはかの恐るべき齙口瘡の存否を精密に検査し、若し其疑ひあらんか、速に醫師の診察を乞はしめ、同時に他兒に傳染するを防ぐために兒を隔離するをよしとす。

二、臍帶切斷端及び脱落面の處置

臍帶切斷端は勿論脱落面も暫らくの間は一種の創面にして容易く感染して局所的續て全身的の傳染を來したために生命を危険ならしむることあるを以て常に清潔に且つ乾燥するを要す、従ふて臍帶はこれを無菌にして且つ空氣のよく流通する木綿綳帶を以て包み、尙ほ不充分ならんか「アルコール」を以て拭き、後に「アイロール」「デルマトール」

の類を撤布し、又尿糞露露等にて汚れたる時は直にアルコールを以て丁寧に拭きたる後、デルマトール、アイロール、ピオホルム等を撤布し、新鮮無菌の臍帯と交換すべし、脱落面も同様にして常に其清潔と乾燥とを謀り、完全に瘻痕が形成さるるまでは其部に殺菌綿を當て、臍帯を以て壓定すべし。

三、乳児の一般状態を注視すべし。

体温、呼吸脈搏等は日々これを測定するは勿論、體重も最初の二乃至三週は毎日、其後は一週一回宛沐浴に先立ちて計量すべし、これ體重の増減は略ぼ乳児の健康状態と比例するものにて、これによりて病變を早く発見することを得ればなり、其他利尿と便通とに注意すべし、利尿は一晝夜に約十回内外にして其都度早く襪襪を交換すべし、然らずんば外陰部、股間、臀部等に強き糜爛を來せばなり、便通は一晝夜三、四回を正規とし、若し便秘あらんか微温湯又はリスリンを以て注意して洗腸すべく、消化不良便ならんか榮養法を嚴重ならしむるは勿論早く醫治を乞はしむべし。

早熟児の看護

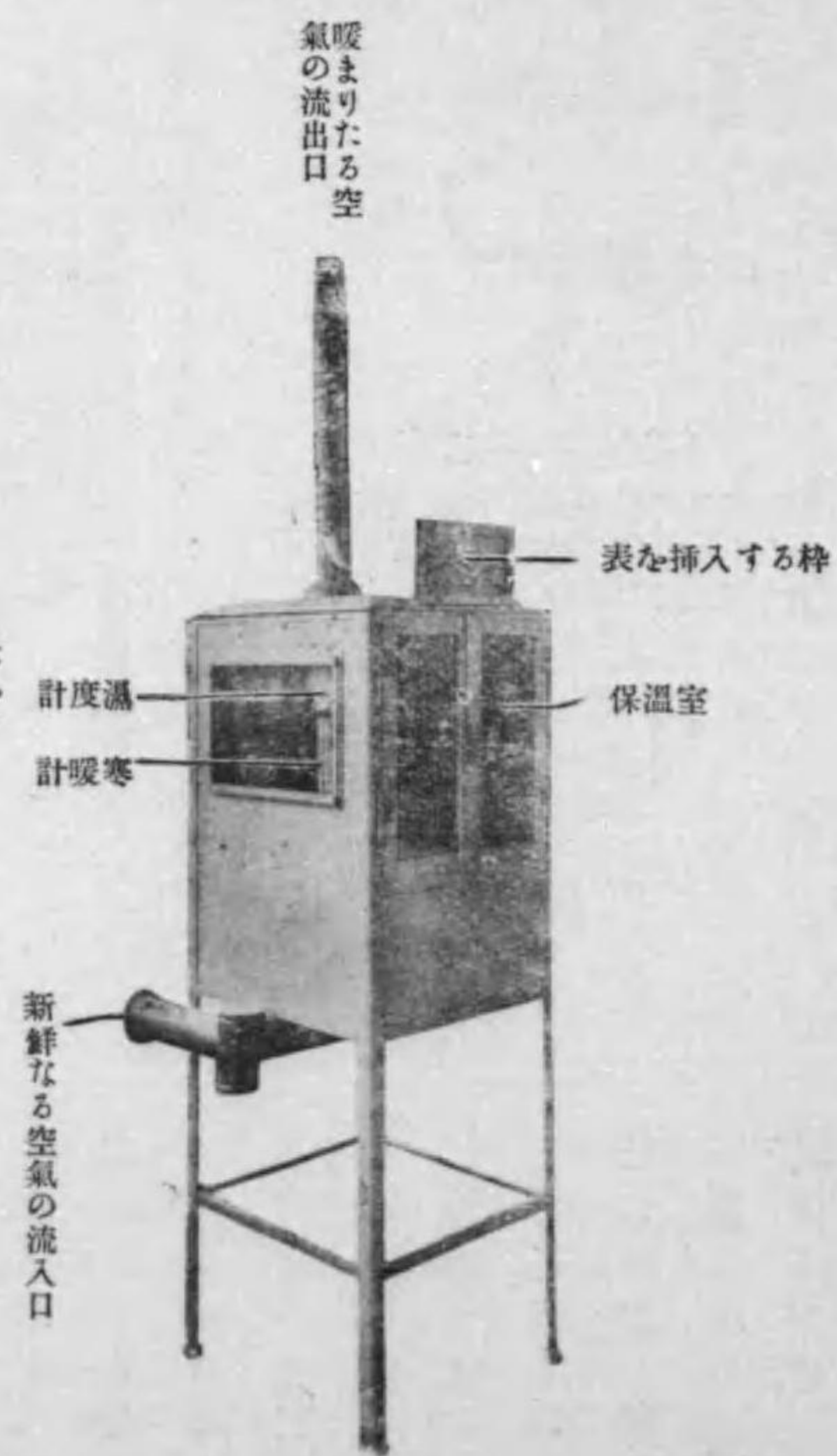
早熟児の看護及び處置

妊娠第七ヶ月以後の早産兒にて既述の成熟胎兒の微候を備へざるものを早熟兒と云ひ、生活機能著しく不完全なるものなるを以て以下述ふる看護を行はずんば生活を續くることを得ず。

一般に早熟兒は其體温調節及び吸乳作用不完全なるを以て主として 一、平等なる適

圖二百二第

圖の器温保氣電的働自製國米
(品備室教學科人婦産大東)



當體温を保たしむること 二、適當なる榮養を與ふること の二點に向うて全力を注がざるべからず、要するに早熟兒は看護者の親切と熱誠とによりて甫めて發育を續け得るものにて、兒の生死は、一、つに懸りて、看護者の掌中にありと謂ふべし、而して其處置は勿論醫師の指導の下に行ふべきなるが、

一、平等なる適當體温を保たしむるには、保温器(第二百二及び二百三圖を見よ)と稱ふる一種の保温装置内に静臥せしむるを理想とすれども、其設けなき時は綿を以て兒を包み湯婆を以て温を與へ、兒の周圍の温度を攝氏二十八乃至三十度とし、室温は二十五度内

圖三百二第

圖の器温保
(品備室教學科人婦產大東)



水槽(濕氣を與ふるため)

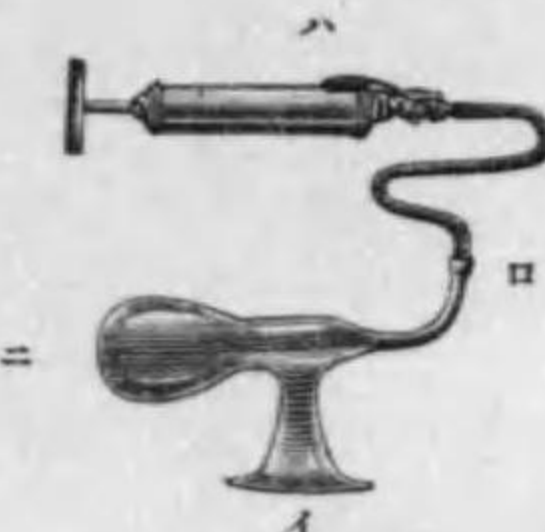
保温室(兒を臥せしむる室)

加熱槽

(甲)圖四百二第

器乳吸氏クパルエシ

シ「ハ」の(ハ)に貼に頭乳を部の(イ)に「フ」を汁乳てりよに「フ」貯し出
ひ吸に部の(ニ)を汁乳てりよに「フ」貯し出



(乙)圖四百二第

吸を汁乳てしく如の(甲)圖四百二第
な「フ」にてに部の(ロ)に「フ」貯し出
付な乳吸るな(ニ)にこそり去り取
むしせ乳吸に兒てけ



三二〇

外とすべし、若し兒の體温三十七度以下に降る時、顔面チアノーゼとなる時等には直ちに沐浴せしめ且つ同時に強く啼泣せしめて深呼吸を營ましむべく殊に此際感冒せしめざる様注意すべし。
二適當なる榮養は新たに搾取せる母乳(第二百四圖を見よ)を三十六乃至三十八度に温め一時間毎に二乃至三食匙位約三〇乃至四五瓦宛氣管内に噴下せしめざる様注意して與へ漸次増量す、且つ時々哺乳作用を習はしむべし、早

熟兒は特に爲口瘡に罹り易きを以て乳房哺乳器具は常に清潔ならざるべからず、其他上記初生兒の看護法を懇切に行ふこと勿論なり。

第九章 初生兒の榮養法

初生兒の榮養は母乳によるを最上とし、乳母によるもの之れに次ぎ、止むを得ずんば生牛乳山羊乳又は其製品による其前二者によるを天然榮養と云ひ、其後者によるを人工榮養と云ふ。

第一節 天然榮養法

第一項 母乳榮養法

一 母乳は乳兒に對し最上の榮養料なるを以て、次に述ぶる場合を除くは常に必ず生母自ら授乳すべし、これに乳兒に對して好都合なるのみならず授乳婦自らに對しても其生殖器の復舊作用を迅速に且つ完全に終らしむるの利益あり。
二 生母自ら授乳すべからざる廢乳すべき場合、重症の結核、脚氣、精神神經病、急性熱性病、腎臟炎、腺炎、授乳中の妊娠等なれども勿論醫師の指導によるべし、之れに反し兩親共に微毒ある時は生母自ら授乳すべし。

廢乳すべき場合

授乳の仕方

哺乳の方法

哺乳時間

三、初回の授乳 は分娩後六乃至十二時間目頃にて兒が啼泣し食を欲する時とし、初乳はこれと與ふべし、これの中には既に述べたる如く鹽類を比較的少量に含むために通痢作用あり不必要なる胎糞を完全に排泄するの利あればなり、俗間使用する「マクリ」は寧ろ有害なるを以て使用すべからず、若し直に授乳し難き場合には10%の「サッカリン」液を百瓦の餵水中に三乃至四滴加へ、その十乃至二十瓦を與ふべし。

四、授乳法 授乳の仕方 は母體は側臥位、出來得べくんば坐位を取り、一手の上膊部に兒頭を載せ、他手の示、中、兩指にて乳頭を挟み、兒の口中に入るために軀幹を多少前屈し、乳房にて兒の鼻孔を塞がざる様に注意す、この際兒の哺乳運動不十分なる時は乳汁を口中に絞り込むべし。

哺乳の方法 は常に必ず時間を一定し、初めは二時間毎、次で三乃至四時間毎に一回とす、これ乳汁は胃中に入りて二乃至二時間半にて消化し腸に送り出さるるを以て約三十分位は胃を空虚にして休ます必要あればなり、一回の哺乳時間 は一定し難けれども乳汁豊富にして兒の哺乳作用完全ならんか、大凡十乃至二十分とし充分に哺乳せしむ、夜間はなるべく哺乳を避くべし、かの乳兒が啼泣するや直に抱き起して授乳するが如き惡習慣は管に繁雜なるのみならず兒の胃腸を強く害し従うて其發育を不完全ならしむるを以て斷じてこれを避くべし。

一般に乳兒は善惡共に容易に其習慣性を作るものなるを以て其初めに於て充分注意の如し。

一回の哺乳量

いて規律正しくして惡習慣を付けざる様に注意すべし。かくして遂には夜間の授乳を全廢し、生後二ヶ月頃には於ては、一晝夜に四乃至六回位の授乳に止むべし。

一回の哺乳量 は兒により一定し難けれども大凡次表を標準とすべし。

兒の年齢	一回の哺乳量
第一週	50cc
第二週	70cc
第三週	75cc
第四週	100cc
第五週	120cc
第六週	150cc
第七週	180cc
第八週	200cc
第九週	220cc
第十週	250cc
四ヶ月以後	100cc
一ヶ月まで	100cc

内野淺次郎氏の分娩直後體重二千四百瓦以上の初生兒六名に就ての研究によれば次の如し。

哺乳日	各一日の平均哺乳量	各一日の平均哺乳量
第一日	71cc	71cc
第二日	185cc	185cc
第三日	249cc	249cc
第四日	331cc	331cc
第五日	338cc	338cc
第六日	322cc	322cc
第七日	413cc	413cc
第八日	357cc	357cc
第九日	361cc	361cc
第十日	385cc	385cc

廣瀬志賀兩氏の分娩直後體重二千七百瓦以上三千二百瓦迄の初生兒百名に就ての研究によれば次表の如し。

哺乳日	各一日の平均哺乳量	各一日の平均哺乳量
第一日	33cc	33cc
第二日	196cc	196cc
第三日	266cc	266cc
第四日	323cc	323cc
第五日	366cc	366cc
第六日	407cc	407cc
第七日	443cc	443cc
第八日	473cc	473cc
第九日	477cc	477cc
第十日	483cc	483cc
第十一日	499cc	499cc
第十二日	506cc	506cc
第十三日	507cc	507cc
第十四日	513cc	513cc
第十五日	523cc	523cc
第十六日	533cc	533cc
第十七日	533cc	533cc
第十八日	548cc	548cc

五、離乳 はこれ亦一定し難けれども、大凡生後第十乃至第十二ヶ月に於てし、徐々に行ふべし。若し夏期に相當せばこれを秋期まで延ばすがよし、夏期には消化不良を起し易ければなり、離乳せんとする時には先づ牛乳を以て試み堪へ得るに従うて母乳を減少し遂に全廢し、漸次に消化滋養性の流動食例は、牛乳、重湯、薄き粥、肉汁、半熟鶏卵等、固形物質を増し、遂には全く固形食に移行すべきものなれども、此時期には咀嚼作用不十分なる上に消化機能も不完全なるを以て常に充分なる注意をなし、恐るべき消化不良症を起さざる様に心掛くべし。

第二項 乳母による榮養法

既に述べたる如く母乳は其乳兒に對し最良の榮養料なれども前に述べたる如き廢乳すべき疾病ある時又は他に止むを得ざる事情あり、生母自ら授乳し得ざる場合には適當なる乳母を選定し其乳汁を以て母乳榮養法の條下に述べたると同様の方法及び注意の下に乳兒を榮養すべし。

乳母の資格 最も適當なる乳母は次の條件を備へざるべからず、勿論其選定は醫師によりて行はるるも助産婦も亦これを知り置く必要あり。
一、全身の強健なること、即ち體格及び榮養共に佳良にして齒牙全く完備し、且つ性質溫和にして秩序正しきこと、従うて既に述べたる廢乳を要すべき種々なる疾病を有

せざるは勿論、それ等疾病の遺傳もなく、其兩親、兄弟、姉妹共に皆健全なるを要す、殊に微毒は兒に直接傳染するものにて而も外觀全く健康状態を呈することあるを以て特に充分なる検査を経ざるべからず。

二、分娩時期 は必ずしも生母と同一時期なるを要せず、但し分娩直後の者及び分娩後一年以上經過せる者は適當ならず。

三、年齢 は二十乃至三十歳の二乃至三回經産婦にして其生兒の發育完全にて強健なるを要す。

四、乳腺 は其發育佳良にして分泌豊富、乳嘴及び乳頭の皮膚は健全にして且つ哺乳に便なる形及び大きなを要し、加ふるに乳汁の性質佳良ならざるべからず。
乳汁の性質の良否 は勿論醫師によりて檢定さるべきなれども大體に於て乳汁の一滴を指頭に滴らしこれを振りて容易に其形を變せざるものは佳良なりと推定することを得。

かくして選定せる乳母の攝生法は、極端ならざる限りはなるべく從來の生活法に従はしめ、普通の馴れたる食餌を與ふべし、急にこれを變ぜしむる時は、ために却て乳汁の分泌量及び性質に悪影響を及ぼすものなり。

第二節 人工榮養法

本法は遂に人乳を得る能はず、止むを得ず他動物、例ば牛、馬、山羊等の乳汁を代用して以て兒を榮養する方法なり、而して其乳汁の種類により各々多少の一長一短あれども其求め易き點に於て最も廣く牛乳が使用さる、故に茲にも牛乳による人工榮養法に就て述べべし。

牛乳は其新鮮純粹なる者に於てすら人乳に比し既に述べたる相違あり、而も吾人の使用する牛乳は管に純粹ならざるのみならず、搾取後既に長き時間を經過し其間に於て種々なる細菌が作用し、且つ種々なる手入れ殊に消毒が施され居るを以て生母又は乳母の乳房より直接に與へらるるものとは到底比較すべからず、従うてこれによる榮養には種々なる危険障礙あり、延いて乳兒の健康に幾多の障礙不都合を起し到底満足なる結果を收め得ざるは理の明かなる所なり、故に吾人がこの榮養法を應用せんとする場合には極めて周密なる注意を以て害をなるべく少くする様努むると同時に常に乳兒の全身状態殊に消化器の状態を嚴重に監視し、異變に際して速かに醫師の診療を乞ひ其指導に従ふべし。

今左に本榮養法を行ふ場合に特に注意すべき諸點を記述すべし。

一、使用すべき牛乳は注意して飼養されたる健康なる牛より清潔に搾取されなるべ

く新鮮にして純粹なるものならざるべからず、従うて牛乳屋を適當に選定せざるべからず。

二、牛乳は適當に稀釋及び補給されざるべからず、既に知る如く牛乳は人乳に比し蛋白質多く糖分少し、故にこれを適當に稀釋及び補給して人乳に近からしめざるべからず。

(イ)稀釋法は牛乳の性質、乳兒の強弱、消化の良否、發育の状態等により一定せざれども、大凡次表を標準とすべし。

乳兒の年齢	牛乳	水又は一〇%水飴水
一乃至二ヶ月	1/4 牛乳	—
三ヶ月内外	1/2 牛乳	—
五ヶ月内外	3/4 牛乳	—
七ヶ月以後	全乳	—

水に代ふるに燕麥、大麥等の穀粒煎汁(其製法、第三〇頁を見よ)を以てせば、牛乳の消化をよくすることを得れども、これ等は醫師と相談の上に行ふべし。

(ロ)糖の補給は兒の状態により多少の差異あれども、大體に於て乳糖及び「マルツ汁」「エキス」は普通は五%の割に、便秘ある場合は八乃至十%の割にし、ソクスレット氏滋養糖は下痢に傾ける場合に賞用するが約五%の割に、白糖は五%の割に、兒の充分發育せ

糖の補給

牛乳稀釋法

圖五百二第

圖の器毒消沸煮乳牛



賞用さるるは熱氣消毒法なり然れどもあまり熱度が高ければ殺菌は充分なるも質を變ずるの不利ありさりとて低熱なれば目的を達せず到底理想的のものなし。現今一般に使用さるる法はソクスレット氏消毒器による煮沸消毒法なり。即ち第二百五圖に示す装置中(イ)なる硝子瓶中に一回量の牛乳を清潔に入れこれに清潔なる護謄製の蓋をなしその半日又は一日分を(ロ)なる瓶架に載せて(ハ)なる煮沸罐内に入れ更に罐内に硝子瓶の肩に達するまで水を入れ蓋をなしたる後これを煮沸し沸騰し初めてより

牛乳消毒法

煉乳使用法

五乃至十分を経たる後に取り出して冷き所に貯へ用に臨んで攝氏三十七度内外に温めて授乳す。其残り一日以上を経たるもの又は腐敗其他の異常の疑ひあるものは断じて使用すべからず。其際使用する諸器具の清浄なるべきは勿論なり従うて使用後は直に清洗すべく若し直に行ひ難き場合には重曹水又は石鹼水中に入れ置くべし。
 四、コンデンス、ミルク即ち煉乳の使用法
 既述の如く生牛乳すら既に幾多の危険及び障礙あるに、コンデンス、ミルクは非常に多量の糖分を有する舊き牛乳なるを以て、これによる榮養法は生牛乳による場合よりも更に大なる困難と不合理との存するものなり故に出來得るだけこの使用を避け、全く止むを得ざる場合に限りなるべく純良なるものを選び、既に述べたる注意及び方法を特に勵行しつつ使用すべし。製品としては本邦製品殊に「ネッスル」及び人形印最も賞用さる、而して其稀釋法は大體次の如くなるも常に醫師の指導によるべし。

生後一週間	二	三	四
月	月	月	月
二	十	十	十
十	九	八	七
四	倍	倍	倍
煉乳	煉乳	煉乳	煉乳
水又は重湯	一九	一七	一六

使用後罐の蓋は常に充分にし、稀釋する水は、一度煮沸し冷却し

第五編 正規産褥

七	六	五
夕	ケ	ケ
月	月	月
十	十	十
四	五	六
倍	倍	倍
— — —		
一	一	一
三	四	五

たるものを使用すべし。

三〇

白木助産婦學 前編終

大正十一年一月二十日 第一版印刷
 大正十一年一月廿五日 第一版發行
 大正十一年六月五日 第二版發行
 大正十二年四月十五日 第三版發行

大正十二年九月十一日 第四版發行
 大正十三年四月二十日 第五版發行
 大正十四年七月廿五日 第六版發行
 大正十五年十二月廿六日 第七版發行

著者 白木正博

東京市本郷區龍岡町三十六番地

發行者 鈴木幹太

東京府荏原郡世田ヶ谷町下町五十番地

印刷者 大久保秀次郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所 株式會社 東京築地活版製造所

不許複製
 正金參圓九拾錢
 白木助産婦學前編

發行所

東京市本郷區龍岡町卅二番地
電話小石川四七七番・振替東京六三三八番

南山堂書店



肆 書 捌 賣

東京市本郷區春木町三丁目
同 同 二丁目
同 同 湯島切通坂町
同 同 龍岡町
同 同
同 同 本富士町
同 同
同 同 芝區愛宕町
同 同 日本橋區通三丁目
同 同 神田區表神保町
大阪市博勞町
同 同 江戸堀南通三丁目
同 同 北通二丁目
京都市三條寺町
同 同 丸太町通川端
同 同 丸太町通
名古屋市中區榮町

南江堂書店
半田屋書店
金原書店
富倉書店
吐鳳堂書店
文榮堂書店
根津書店
克誠堂書店
文光堂書店
明文館書店
丸善書店
東京堂書店
丸善大阪支社
荒木書店
松本書店
南江堂京都支店
進文堂書店
國井書店
丸善支社

名古屋市中區老松町
仙臺市國分町
新潟市古町通
同
金澤市片町
同 廣坂通
同
岡山市下之町
同 東中山下
福岡市博多
熊本市新二丁目
同 安巳橋通
長崎市引地町
鹿兒島市仲町
千葉市
同
札幌市南一條西三丁目
同 南一條西四丁目

大竹書店
丸善支社
北光社書店
考古堂書店
宇都宮書店
いろ屋書店
内田書店
渡邊書店
文江堂書店
丸善福岡支社
長崎次郎支店
芹川書店
集榮堂書店
谷村書店
松田屋書店
寶文堂書店
富貴堂書店
維新堂書店

56
1774

終